

埋蔵文化財調査報告書32

鳴海城跡(第1～7次)

1999

名古屋市教育委員会

埋蔵文化財調査報告書32

鳴海城跡(第1～7次)

1999

名古屋市教育委員会

例 言

- 1 本書は、名古屋市区緑区鳴海町字根古屋、字城、字矢切に所在する鳴海城跡で実施した、鳴海城跡発掘調査(第1～7次)の報告書である。
- 2 発掘調査は、平成2年から実施されてきた。都計3-4-87古鳴海停車場線の拡幅工事に伴い、第1次が宗教法人圓道寺の依頼を受けて、第2～4次が名古屋土木局の依頼を受けて実施した。また、第5次は、緑保健所の解体及び造成工事に伴い実施した。第6次は、下水道工事に伴い、第7次は、公園とその東側道路の整備工事に伴い実施した。
- 3 各次の発掘調査地点、期間、対象面積、担当者は次のとおりである。

第1次

調査地点 鳴海町字根古屋18(圓道寺境内地)
調査期間 平成2年9月17日～10月12日
調査面積 約50㎡(約450㎡の地形測量)
担当者 山田鉦一、小島一夫

第2次(A地点・B地点)

調査地点 鳴海町字城35-7、字根古屋18-2
調査期間 平成6年12月5日～平成7年2月14日
調査面積 約360㎡
担当者 山田鉦一、平出紀男、木村光一、

第2次(B地点北半区の再調査)

調査地点 鳴海町字根古屋18-2
調査期間 平成7年5月1日～5月31日
調査面積 約125㎡
担当者 山田鉦一、伊藤正人

第3次

調査地点 鳴海町字根古屋
調査期間 平成9年4月7日～5月23日
調査面積 約205㎡
担当者 山田鉦一、野口泰子、木村光一

第4次

調査地点 鳴海町字欠切
調査期間 平成9年5月19日～6月6日
調査面積 約95㎡
担当者 山田鉦一、野口泰子、木村光一

第5次

調査地点 鳴海町字城
調査期間 平成9年9月16日～10月28日
調査面積 約1,800㎡
担当者 山田鉦一、野口泰子、木村光一

第6次

調査地点 鳴海町字城
調査期間 平成10年9月17日～9月24日
調査面積 約21㎡
担当者 野澤則幸、田原和美

第7次

調査地点 鳴海町字城
調査期間 平成10年10月12日～10月23日
調査面積 約130㎡
担当者 山田鉦一、野口泰子

- 4 本書の水準高は、東京湾平均海面(T.P)を、方位は、国上座標第Ⅶ系による座標を使用している。
- 5 遺物については、次の方々よりご教示いただいた。記して謝意を表する。藤澤良祐(財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター)、金子健(同)、中野晴久(常滑市民俗資料館)、尾野善裕(京都国立博物館)
- 6 出土遺物、図面記録等については、見晴台考古資料館が保管している。
- 7 本書は、資料館学芸員の協力と助言を得て、次のように分担して執筆した。第1章から第6章および第8章から第9章を、山田鉦一と野口泰子が、第7章を、野澤則幸が執筆した。また、図版の作成については、調査補助員福田望子の協力を得た。

目 次

<p>第1章 はじめに 1</p> <p> (1) 位置と環境 1</p> <p> (2) 鳴海域について 2</p> <p> (3) 周辺遺跡の調査 4</p> <p> (4) 溝状遺構名の再整理 6</p> <p>第2章 第1次調査 8</p> <p> (1) 調査経過 8</p> <p> (2) 調査日誌 8</p> <p> (3) 遺構 9</p> <p> (4) 遺物 11</p> <p>第3章 第2次調査 15</p> <p> (1) 調査経過 15</p> <p> (2) 調査日誌 15</p> <p> (3) 遺構 16</p> <p> (4) 遺物 19</p> <p>第4章 第3次調査 28</p> <p> (1) 調査経過 28</p> <p> (2) 調査日誌 28</p> <p> (3) 遺構 28</p> <p> (4) 遺物 32</p>	<p>第5章 第4次調査 42</p> <p> (1) 調査経過 42</p> <p> (2) 調査日誌 42</p> <p> (3) 遺構 42</p> <p> (4) 遺物 44</p> <p>第6章 第5次調査 49</p> <p> (1) 調査経過 49</p> <p> (2) 調査日誌 49</p> <p> (3) 遺構 50</p> <p> (4) 遺物 52</p> <p>第7章 第6次調査 81</p> <p> (1) 調査経過 81</p> <p> (2) 調査概要 81</p> <p>第8章 第7次調査 82</p> <p> (1) 調査経過 82</p> <p> (2) 遺構 82</p> <p>第9章 まとめ 84</p> <p>参考文献 88</p> <p>付表 遺物一覧表 89</p>
---	---

第1章 はじめに

(1) 位置と環境

鳴海城は、緑区鳴海町字根古屋や字城一帯に所在し、鳴海丘陵西端部の標高10～15m程に位置する。鳴海丘陵の西方には天白川が南へ、南方を扇川が西へ流れ、低湿地が形成される。そのため、鳴海城は三方向が崖地形になり、東方は鳴海丘陵から張り出す高台にあり、自然地形による要害になっている。

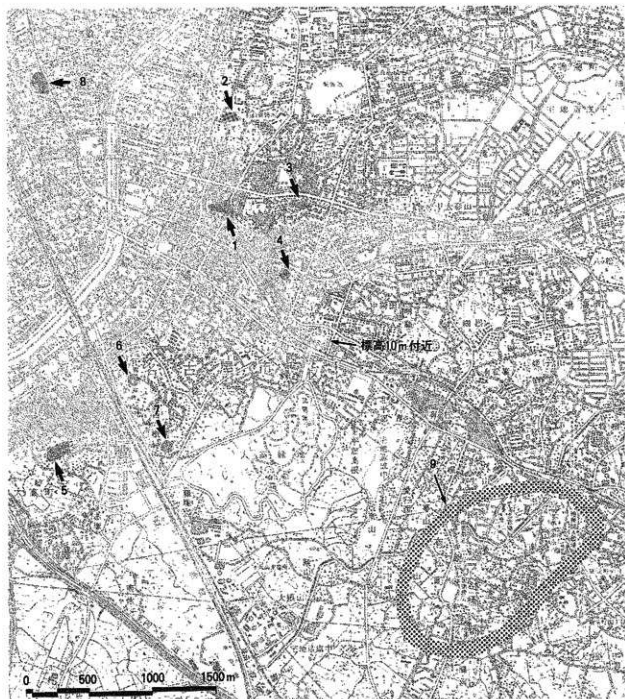


図1 鳴海城跡と周辺の城跡、砦跡の位置図(鳴海 1:25,000 国土地理院)

- 1 鳴海城跡 2 丹下砦跡 3 善照寺砦跡 4 中島砦跡 5 人高城跡
6 鷺津砦跡 7 丸根砦跡 8 星崎城跡 9 桶狭門古戦場跡(推定範囲)

鳴海城の位置は、中世には、鳴海丘陵を通る鎌倉街道の南西側になり、江戸時代には、丘陵の南と西の裾部付近を東海道が通っている。鎌倉街道の遺筋は、既に江戸時代に不明瞭となっているが、字名として、「古鳴海」「嫁ヶ茶屋」「新海池」「朝日出」「相原」があり、これらの地域を通過して、東国へ行く交通路として利用され、中世に、「鳴海荘」が成立し、南北朝期以降から15世紀後半まで、醍醐寺三寶院の地行地となり、鳴海城の付近も、鳴海荘の西端に含まれていたと考えられる。この時期頃に、街道筋の有力武士階級の城館として、鳴海城が築かれた。江戸時代には、東海道が鳴海城の南側を往来するが、村人の意識でも、鳴海城の総構えが、北側を向いていたことが強く記憶されていたと考えられる²³⁰⁾。

鳴海城の周辺では、多く遺跡の存在が知られている。縄文時代晩期の雷貝塚、弥生時代から中世の矢切遺跡、鳴海城の推定範囲内に重複する遺跡として、弥生時代から中世の城遺跡と奈良時代の鳴海庵寺がある。また、城や砦として、大高城、丸根砦、鷺津砦、丹下砦、善照寺砦、中島砦が知られ(図1)、これらは、永禄3年(1560)の桶狭間の合戦に際して、重要な役割を果たした。今川方の鳴海城を囲む砦として、織田方の丹下砦、善照寺砦、中島砦があり、人高城を囲む砦として、鷺津砦、丸根砦がある。現在、大高城と丸根砦は、国史跡に指定され、その旧形状が保存されている。

(2) 鳴海城について

鳴海城は、応永年間(1391~1428)頃に安原備中守宗範²³¹⁾の築城と伝えられ、根古屋城とも呼ばれる平山城である。天文年間(1532~1554)の頃、山口左馬助と九郎次郎父子が居城し、天文22年(1553)に赤塚の地で織田信長と戦っている。桶狭間の合戦(1560)時には、今川方の岡部五郎兵衛尉元信が、義元の討ち死に後も奮戦したことで知られる。後に、織田方の佐久間信盛が城主となるが、天正8年(1580)の佐久間氏改易後については詳らかでなく、天正18年(1590)頃に廃城となったと伝えられる。

城の当時の形状は、「愛知郡鳴海村古城絵図」(以下「古城絵図」)から推測することができ、現在の城跡公園付近が本丸となり、東西の南寄りに土橋が造られ、東側が二之丸になる。本丸の形状は「東西四拾三間(約77.4m)、南北貳拾五間(約45m)」、二之丸の形状は「東西貳拾六間半(約44.7m)、南北三拾四間(約61.2m)」と記載され、現在の天神社付近にも、「東西九間半(約21.6m)、南北拾三間(約23.4m)」の高台があり、本丸の西側にも、「東西貳拾四間(約43.2m)、南北拾八間(約32.4m)」の高台が記載される。

本丸は、東側から北側、さらに西側へと内堀を巡らせ、南側を高さ四間(約7.2m)の切岸と各土橋の南側に堀を造り、四方を堀でほぼ囲む形状になっている。本丸の東側土橋から出て二之丸に至るには、南から北西へ緩やかに曲る堀などにより四方を囲まれた小さな区画を通過することになる。この付近が東側の虎口にあたる。この区画から二之丸に至るには、南から北西へ曲る堀と内堀の東側堀との間を通過する形状となっている。この空間が、馬出しの役割を果たしていると考えられる。

二之丸は、東側から北側を外堀で囲み、内堀と近接する付近で堀が跡切れている。外堀の東側堀が南から西へ曲る付近の内側(西側)に、「市貳間(約3.6m)、高四尺(約1.2m)」の土居が南北に造られる。また、外堀の東側堀と、二之丸に至る小区画を造る堀が近接する付近にも、東西に十居形が造られる。この付近が、二之丸から南へ降る道筋にあたると考えられる。また、二之丸の北西寄りには、井戸の記載がある。

現在の天神社付近の東側から現在の東福院付近の南側に至る、総堀が東側と北側に巡っている。この堀の南側(内側)に、「此内鳴海村在家」と記載される。江戸時代に東海道が利用される以前には、この付近

が城の表側であったと後世まで伝えられる^(註1)。本丸や二之丸を囲むように総構えが形成され、鎌倉街道に沿う方向である東側と北側の防備を意識した縄張りがされ、『古城絵図』に記載される形状が完成した時期は、佐久間信盛が城主となった頃と推定される^(註2)。

この『古城絵図』が作成された時期は、不詳であるが、正保年代(1644～1647)の頃と推測され、尾張藩の防備にとっても重要な古城の一つとして、こうした堀や土塁の記録が残された。

また、江戸時代の伝聞から^(註3)、本丸の堀は、享保年代(1716～1735)以降には、既に幾らかが埋っていたと推測される。

なお、鳴海城付近での宅地化は、「鳴海耕地整理組合」が大正9年10月に県の認可を受け、昭和27年に解散する間に、ほぼ現在のような状況まで進められたと思われる。『古城絵図』には、本丸の東側の二之丸とその東側から北東一帯の曲輪(現在の天神社から北方向一帯)の間をほぼ南北に延びる堀がみられるが、この堀部分に道路(古鳴海停車場線)が通り、この道路は昭和12年に開通している。この道路の西側では、土取りがされたようで、旧緑保健所付近でも、道路側へ傾斜する崖地形が造られたようである。この崖地形に、戦時中、横穴形式の防空壕が造られたという。鳴海城の本丸東側の堀から東にかけての二之丸には、昭和29年9月に緑保健所が建てられ、昭和45年5月に鉄筋コンクリートに建て替えられた。

註1 鳴海町土屋会 1962『鳴海旧記』

「享保5年(1720)子より八十前迄内堀に鮎尾など多く居り候由 十五年以前七十歳に罷成鳴海庄屋九右衛門家来と助と申者儘に咄し申候連々埋申候」とある。

註2 安原宗範の存在を知る資料として、成海神社に伝えられる鏡(裏面に安原備中守女中の方の名が刻まれるという鏡8面)や、海蔵寺(安原備中守の菩提寺)が存在したことが伝えられる。

註3 千田嘉博 1990「尾張国における織豊期城下町網の構造」『中世城郭研究論集』

鳴海城の時期については、千田嘉博氏の織豊系城郭縄張り編年研究によれば、第5期類型B-2に相当し、天正年間に現存の城形状が築城されたと考えられている。

(3) 周辺遺跡の調査

雷貝塚

昭和2(1927)年に野村三郎によって発見され、名古屋市教育委員会で2回の発掘調査を実施している。

昭和55(1980)年に第1次調査で約14㎡が発掘され、擾乱を受けて再堆積した混貝土層が発見され、縄文晩期土器、弥生土器、灰釉陶器、中世の山茶碗が出土した^(註4)。

平成7年(1995)年の第2次調査で、約140㎡が発掘され、遺物がないため時期を確定できない竪穴住居4軒、鎌倉から室町時代山茶碗や土師皿が出土する小穴などが発見され、縄文晩期土器や弥生土器も出土している^(註5)。

矢切遺跡

昭和57(1982)年に、古墳時代後期の竪穴住居が発見されている。

昭和61(1986)年に、古墳時代後期の竪穴住居が発見されている^(註6)。

城遺跡

平成2(1990)年4月に約100㎡の範囲で調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代初頭の多数の土器が出土する、幅約2m、深さ約1.5mの溝と、多数の小穴が検出されている^(註7)。この調査地点の西側の

崖地形は、鳴海城の堀跡付近の形状を残していたものと推測される。

鳴海廃寺

昭和59(1984)年に約500㎡の範囲で実施され、古墳時代の堅穴住居2軒、奈良から平安時代の瓦を多量に含む土坑2基、平安時代から鎌倉時代と考えられる掘立柱建物2棟、鳴海城の堀と考えられる大溝などが検出されている^{注4}。この大溝は、発掘区の北端で正確な規模が不明であるものの、幅5m、深さ3m程と推定されている。しかし、鎌倉から室町時代と推測される遺構は、他に竪穴式住居と井戸状遺構の各1基が検出されているが、鳴海城に関連する15世紀から16世紀の遺物の出土量は量的には少ない。

註1 名古屋市見晴台考古資料館 1981『雷貝塚・呼続遺跡・NN-328号古竪穴発掘調査概要報告書』

名古屋市教育局

註2 名古屋市見晴台考古資料館 1986『雷貝塚 第2次発掘調査報告書』名古屋市教育局

註3 名古屋市見晴台考古資料館 1991『鳴海城跡・城遺跡発掘調査の概要』名古屋市教育局

註4 名古屋市見晴台考古資料館 1985『鳴海廃寺発掘調査概要報告書』名古屋市教育局

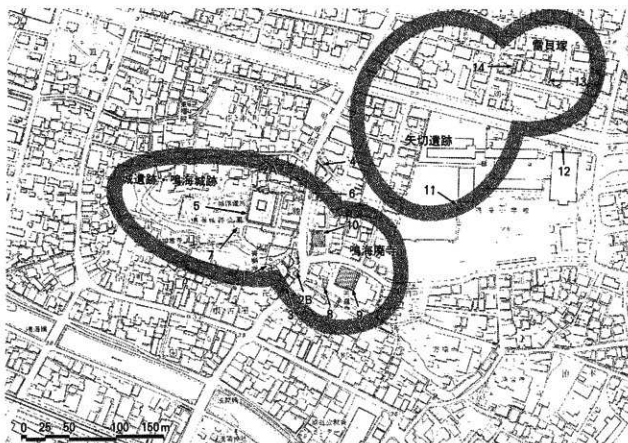


図3 周辺遺跡と発掘調査地点

- | | | |
|---------------|--------------------|------------------|
| 1 鳴海城跡(第1次) | 2A 鳴海城跡(第2次 A地点) | 2B 鳴海城跡(第2次 B地点) |
| 3 鳴海城跡(第3次) | 4 鳴海城跡(第4次) | 5 鳴海城跡(第5次) |
| 6 鳴海城跡(第6次) | 7 鳴海城跡(第7次) | 8 鳴海廃寺(東海銀行地点) |
| 9 鳴海廃寺(圓龍寺地点) | 10 鳴海城跡・城遺跡(天神社地点) | |
| 11 矢切遺跡 | 12 矢切遺跡(立合調査地点) | |
| 13 雷貝塚(第1次) | 14 雷貝塚(第2次) | |

(4) 溝状遺構名の再整理

第1次から第7次調査の成果を本書にまとめるにあたって、検出された主な溝状遺構が堀跡であり、これらに対して各調査地点ごとに付した遺構番号が、例えば、「SD01」として重複する結果となっている場合や別の遺構番号を付した場合があり、遺構を整理する際の混乱を少なくする必要性が生じた。特に、堀跡は、『古城絵図』を参照しての調査位置関係から、繋がる堀跡の一部が発見されたと判断されるものであり、次のように整理変更し、遺構の記号番号を付して、本稿では報告することにした。

調査地点での各遺構名(整理変更前)	記号-堀跡番号-調査回数・地点・区(整理変更後)
第1次調査：堀跡(SD01)	SD-1A-1
第2次調査(A地点)：堀跡(SD01)	SD-2-2A
第2次調査(B地点北半区)：堀跡(SD01)	SD-2-2BN
第2次調査(B地点南半区)：堀跡(SD01)	SD-2-2BS
第2次調査(B地点南半区)：方形状遺構(SX01)	SX-2-2BS
第3次調査：方形状遺構(SX02)	SX-2-3
第3次調査：堀跡(SD01)	SD-2-3
第4次調査：堀跡(SD02)	SD-3-4
第5次調査：堀跡(SD01)	SD-1A-5
第6次調査：堀跡(SD01)	SD-2-6
第7次調査：堀跡(SD01)	SD-1-7

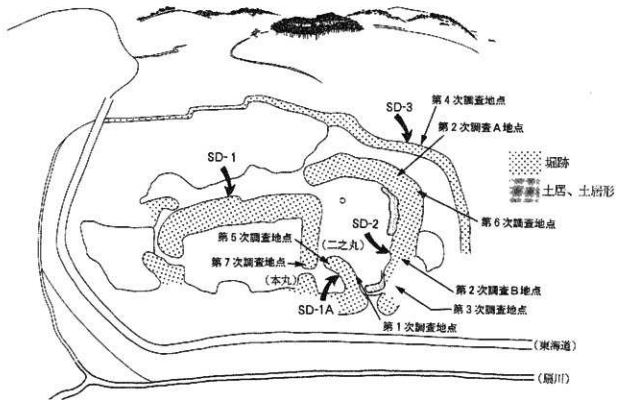


図4 愛知郡鳴海村古城絵図の堀跡とその調査地点および堀跡番号

なお、SD-1は、本丸の東側と北側および西側を囲む内堀に、SD-1-Aは、本丸から東に出て北に折れ二之丸に至る小区画を形成するため北側から東側へ弧状に掘られた堀に、SD-2は、二之丸の区画を形成する北側から東側へ掘られた外堀に、SD-3は総堀に、その遺構番号を付した(図4)。

また、第2次調査(B地点南半区)と第3次調査で検出した方形遺構(SX-2)は、繋がる遺構で、堀跡(SD-2)に関連すると推測される。

他に、第4次調査で検出した溝跡(SD01)のように、形状等から判断して、『古城絵図』にない堀跡の可能性も考えられる遺構の一部があった。

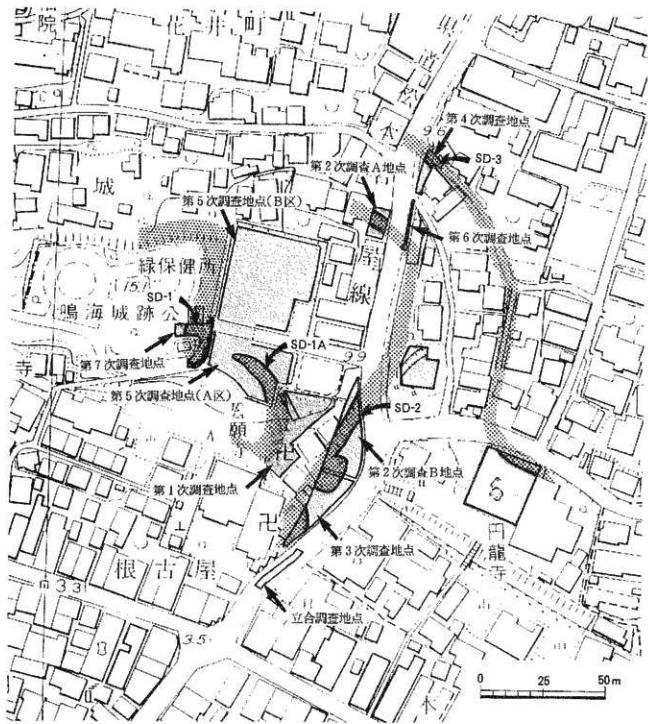


図5 調査地点と堀跡(SD-1, SD-2, SD-3)の推定位置

第2章 第1次調査

(1) 調査経過

平成元(1989)年4月、鳴海町字矢切から字本町地内での道路(都計3-4-87古鳴海停車場線)拡幅工事計画に伴う埋蔵文化財保護について、土木局と教育委員会が、事前協議を行った。この際に、この一帯には、城跡・寺院跡・集落跡の複合遺跡が残存するため、道路用地の買収や移転工事計画等が具体化した際に、保存方法について具体的な協議を進めることにした。

平成2(1990)年1月に、土木局より、圓道寺境内部分についての用地買収が可能となり、平成2年度中に移転工事が計画される旨があった。3月に、試掘調査を境内の空き地で実施した結果、境内の北西側約450㎡に鳴海城の旧地形が部分的に残存し、買収予定地にも掘跡が残存する可能性があると判断された。そのため、土木局と宗教学人圓道寺と協議をし、旧地形が部分的に残存すると予測された約450㎡の範囲が圓道寺建物の改築予定地となるため、この範囲を対象に調査を実施することにした。9月17日から10月12日まで発掘調査を行った。

(2) 調査日誌

平成2年

9月17日 境内の北西隅高台の平坦部付近約30㎡をA区、城の堀の肩部付近約12㎡ををB区、堀の底部付近約5㎡をC区と呼称する、調査区を設定。

18日 現地地形測量のために伐採等を開始。

26日 航空写真撮影により、約450㎡の範囲の現況測量を実施した。

27日 各区の発掘調査を開始し、A区では、約20cmの表土層の下に、茶褐色土層が約20~40cmあり、播鉢や弥生時代土器の破片が少量出土。

10月11日 土層断面図等の作成。

10月12日 埋め戻しを行ない調査を終了。



古鳴海停車場線遺景(第5次調査現在)



A区調査風景(北から)



B区調査付近(北から)

3) 遺構

調査対象区域は、二之丸の南端の付近で、『古城絵図』に、堀堀および土居形と記載される部分にあたり、その堀の中が四間(約7.2m)、深さが石門半(約2.7m)とある。土居形は既にほとんどが削平され、二之丸の南側にある小曲輪を形成する堀の、東側の形状が圓道寺境内の西側にあり、西側の形状が隣地内に残存し、原形を残していた。

約450㎡の現況地形測量を実施した後、原形が残る堀跡を調査の対象とした。しかし、堀跡の中央部南北に隣地境界線があることや、圓道寺の建物が現存するため、発掘できる場所に制約があり、発掘調査は、堀跡の範囲確認を目的とし、面積はトレンチ方式による約50㎡であった。その結果、A区で、堀が南から西方向へ緩やかに曲がる形状の一部を検出した。

A区での土層は、約10cmの表土下に厚さ約15～20cmの灰褐色土層、さらに約15～20cmの褐色土層があり、遺物が含まれ、地山は赤褐色シルト(礫混じり)層である。

B区では、黄褐色土や赤褐色土が互層となり、地山面の約5cm上の黄褐色土層に遺物が含まれていた。

C区では、地表付近から近現代の遺物が出土し、その下層には灰褐色土などが堆積し、地山面は赤褐色粘土層である。

堀跡(SD-1A-1)

A区の北西隅付近では、現地表下から約10cmを掘り下げた段階で、地山(赤褐色砂シルト層：礫混じり)面が露呈し、堀の東側肩部が検出された。堀は南から西方向へ緩やかに曲がる形状の一部で、堀肩部の検出面の標高は、約14m付近になる。

埋土は、隣地との制約から約1mの深さまで掘り下げることはできず、暗灰褐色土で現代遺物が混じるものであった。



調査前の堀跡(南から)



A区調査区(北から)

B区の北側上層断面の観察では、約13m付近に堀肩部と想定される土層の相違部分があり、この高さ付近が堀の上端と考えられた。また、黄褐色土と赤褐色土など地山を主とする土が互層となり、「土居形」の西端の残存とも推定される。盛り土されたような痕跡が部分的に残存していた。堀の西側肩は隣地内となるため、発掘調査は実施できていないが、堀東側の上端の状況と堀西側の現状の地形から予測すれば、14~15m付近の等高線が西側肩部の上端であろうと考えられる。その間の幅は、10m程と推定された。

C区調査区の北側土層断面の観察から、堀の底部は、標高約5.5m付近であった。底部の幅は、断面観察と現状地形から予測すれば、3m程と思われる。この付近での堀の現状の上端は、標高9m付近と推定される。



B区調査区土層(南から)



C区調査区(北東から)

堀の埋上からは騎海城の時期に関連する遺物はまったく発見できなかった。

なお、この堀の東南側には、『古城絵図』によれば、「土居形」が繋がって記載されるが、おそらく既存建物の建設時等の造成により削平されて、地形測量の結果からは、その山形状を推測できなかった。

調査後に、圓道寺の新築工事に伴う造成工事の立合い調査を実施し、堀跡が北西へ屈曲して繋がる形状と堀の土層断面が再確認された。

(4) 遺物

A区(写真1-1・2)

包含層から、土器、陶器等が出土している。1-1は壺、1-2は高杯、いずれも弥生後期上器である。1-4は播鉢の底部、大塚期の製品と思われる。1-5は皿、くすんだ灰色と深みのある緑色の釉が掛分けされ、鉄絵が描かれている。その他、土師器、濃い錆釉の施された輪高台の天目茶碗底部・播鉢(写真1-2)等が出土している。

B区(写真1-3)

9層から1-3の尊式花瓶が出土している。古瀬戸後IV期の新段階(Ⅳ₁)に相当する。

注1 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ 古瀬戸後期の編年」『瀬戸市歴史民族資料館 研究紀要X』 以下同

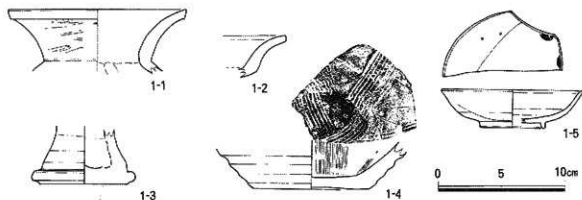
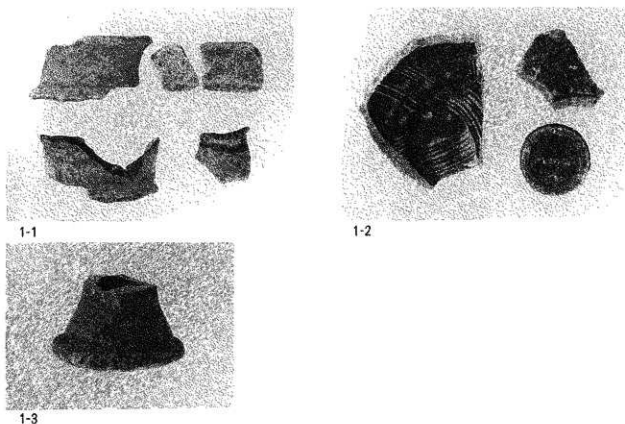
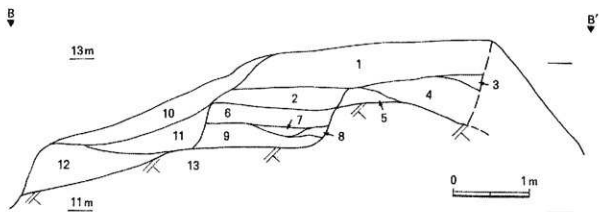


図6 第1次出土遺物

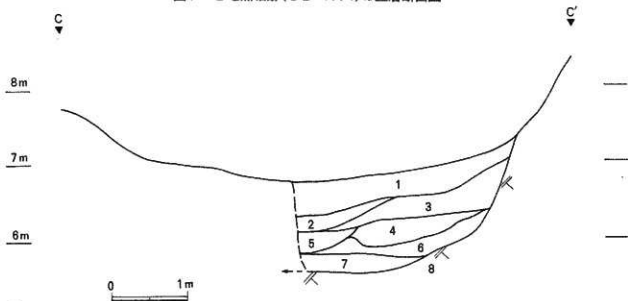




- 1 褐色(砂質)土: 0.2~0.5cmの褐色土粒に、0.2~0.3cmの礫が多く混じり、植物の腐敗物が含まれる。
- 2 黄褐色(シルト質)土: 0.5~2cm黄褐色土粒に、褐色土粒が混じり、1~2cmの礫が含まれる。
- 3 黄褐色(砂質)土: 0.2~0.5cmの黄褐色(砂質)土粒に、褐色土粒が含まれる。
- 4 灰褐色(砂質)土: 0.2~0.5cmの褐色土粒に、0.2~0.3cmの灰褐色シルト粒が多く混じる。
- 5 褐色土: 0.2~0.5cmの褐色土粒に、1~2cmの赤褐色粘土粒が多く混じる。
- 6 黄褐色(砂質)土: 0.2~0.5cmの黄褐色(砂質)土粒に、1~2cmの赤褐色粘土粒が多く含まれる。
- 7 赤褐色(シルト質)土: 0.5~0.3cmの灰褐色シルト粒に、0.2~0.5cmの褐色土が少量含まれる。
- 8 赤褐色(シルト質)土: 1~2cmの赤褐色粘土粒に、0.2~0.3cmの灰褐色シルト粒が含まれる。
- 9 黄褐色(砂質)土: 0.2~0.5cmの褐色(砂質)土粒に、0.2~0.5cmの赤褐色土粒が多く含まれる。
- 10 灰褐色(砂質)土: 0.2~0.5cmの褐色土粒と、灰褐色シルト粒が混じり、0.5~1cmの礫が含まれる。
- 11 灰褐色(砂質)土: 褐色土粒と、灰褐色シルト粒が混じり、1~3cmの黄褐色土粒が含まれる。
- 12 灰褐色(砂質)土: 褐色土粒と、灰褐色シルト粒が混じり、1~3cmの礫を多く含む。
- 13 赤褐色(シルト質)土: 地山、1~2cmの礫が含まれる。

1~9: 土居形の盛土層の一部とも推定される層位
10~12: 流出土と推定される層位

図7 B地点掘跡(SD-1A-1)の土層断面図



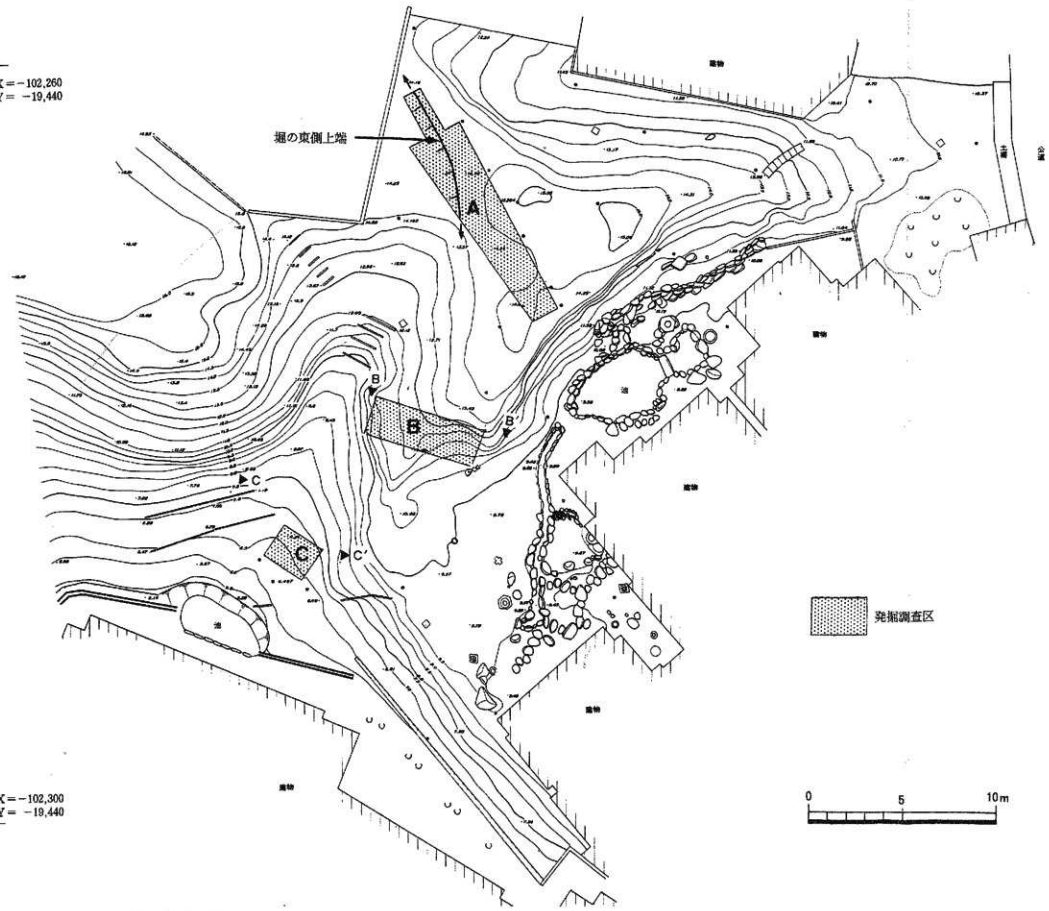
- 1 褐色(砂質)土: 0.2~0.5cmの褐色土粒に、0.5~1cmの礫が多く混じり、植物の腐敗物が含まれる。
- 2 灰褐色(シルト質)土: 3~4cm黄褐色土粒に、褐色土粒が混じり、1~2cmの礫が含まれる。
- 3 灰褐色(砂質)土: 褐色土粒に、0.5cm以下の黄褐色(砂質)土粒が混じり、2~3cmの礫が含まれる。
- 4 灰褐色土: 0.5cm以下の褐色土粒と灰色シルト粒が混じり合い、1~3cmの赤褐色土粒や1~2cmの礫が含まれる。
- 5 灰褐色土: 灰褐色土粒に、2~3cmの黄褐色土粒が混じる。
- 6 黄褐色(砂質)土: 0.2~0.5cmの黄褐色(砂質)土粒に、1~2cmの礫が多く混じる。
- 7 灰褐色(シルト質)土: 0.2~0.3cmの灰褐色シルト粒に、0.2~0.5cmの褐色土が混じり、1~2cmの礫が少量含まれる。
- 8 赤褐色(シルト質)土: 2~5cmの赤褐色粘土塊に、1~2cmの礫が含まれる。

1~6: 埋入土と推定される層位
7: 橋の底部付近の地土

図8 C地点掘跡(SD-1A-1)の土層断面図

X = -102,260
Y = -19,440

X = -102,260
Y = -19,380



X = -102,300
Y = -19,440

X = -102,300
Y = -19,380

第9図 第1次調査区(A~C区)の位置と地形測量図

第3章 第2次調査

(1) 調査経過

平成6(1994)年6月に、文化財課による試掘調査が、発掘調査の必要がある区域を確定する目的で、行われた。拡幅工事予定地内および現道路内に幅1m程のトレンチを10箇所程設置し、調査した結果、用地買収されたA地点(字城35-7)と、B地点(字根古屋18-2)に、鳴海城二之丸を区画する東側の堀跡が存在すると判断された。B地点は、圓道寺の旧境内地である。

A地点は、同年11月に土木局建設課により、シートパイル土留工事がされた範囲内を調査した。A地点での調査は、シートパイルの支保工事の必要もあり、堀を約2m掘り下げた段階で、写真撮影と実測をし、調査区全体(地山も含めて)を約1.5m掘削して支保工事をした後に、堀を再度掘り下げるといった方法で行った。

B地点では、試掘結果から堀の位置を明確にできなかったため、土留をしない状態で発掘を開始した。B地点での調査を進めたところ、北半部から現道路に向けて堀跡が残存し、さらに、発掘区内に圓道寺への上下水道管などが埋設されていることが判明した。そのため、北半部のシートパイル土留工事や、上下水道管などの配管替え工事を土木局建設課など関係局へ依頼して、B地点の北半部として、後日に再調査を実施することになった。

調査は、A地点とB地点(南半部)は、平成6年12月5日から平成7年2月14日まで、B地点(北半部)は、シートパイル土留工事後の再調査を平成7年5月1日から5月31日まで実施した。

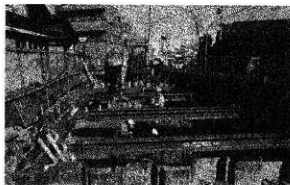
(2) 調査日誌

平成6年

- 11月28日 A地点で、土留工事の開始。
- 12月6日 A地点の表土除去および堀跡の検出。
- 7日 A地点の堀跡を掘り下げる。
- 8日 堀跡内にトレンチを設定し、約1.5mまで掘り下げる。
土層断面図を作成する。
- 12日 A地点の第1回目の測量および航空写真撮影を実施。
- 13日 B地点の発掘区の設定。
- 14日 B地点表土除去と堀跡等の検出。
- 19日 A地点で、支保工事開始。
- 20日 変更協議の資料作成のため、B地点の発掘区域と堀跡の測量を実施。

平成7年

- 1月9日 A地点の堀跡を約1.5～2mまで掘り



A地点調査風景(南から)



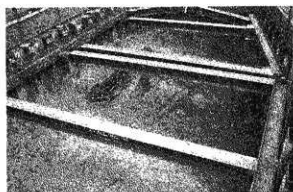
B地点調査風景(北から)

下げる。堀の埋土(11層付近)より山茶碗や陶器の破片が出土。

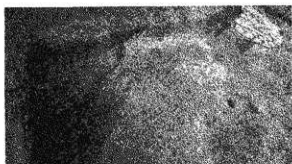
- 1月13日 A地点の第2回目の測量と航空写真撮影の実施。
- 18日 B地点(南半区)の表土除去。
- 19日 B地点(南半区)で堀跡と、大型の方形遺構(S X-2-2BS)を検出。
- 23日 土木局により、A地点の埋め戻しとシートパイルの撤去工事開始。
- 24日 B地点(北半区)の堀跡内にトレンチ設定。堀の土層断面図作成。
- 25日 北半区の堀跡の測量図作成。
- 26日 北半区の再調査のため埋め戻し。
- 2月7日 南半区の測量と航空写真撮影の実施。
- 10日 B地点の埋め戻し。

平成7年

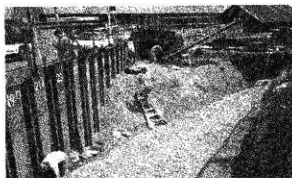
- 4月26日 B地点(北半区)で、土木局によるシートパイル土留工事の開始。
- 5月8日 B地点(北半区)の再調査開始。表土除去と堀跡の掘り下げ。
- 16日 北半区の土層断面図作成。
- 19日 北半区の測量および航空写真撮影の実施。
- 23日 B地点(北半区)の埋め戻し。



A地点堀跡：SD-2-2A(南東から)



B地点(南半区)堀跡：SD-2-2BS(南から)



B地点(北半区)調査風景(北から)

(3) 遺構

1) A地点

二之丸を区画する東から北側の堀跡の一部が検出されている。A地点では、堀が東側から北側へ屈曲した北側付近が、発掘区のはほぼ中央部で北西から南東方向に検出された。

堀跡(SD-2-2A)

堀の上部は既に削平され、攪乱土を約50cm掘り下げると、黄桃色砂シルト層(地山)が露呈する。堀の幅は約7.5m、深さ約2.2m、その断面形は逆台形であった。堀の底部の標高は、中央部で約7.7m、東部で約7.5mである。堀の西側については、土層断面図を作成する目的から、約1.5mの幅を未掘とし、その東際でトレンチ調査による堀の土層状況の観察をした。

堀の埋土は、標高約8m付近までが後世の埋め戻し土で、その下層に暗灰褐色土などが約80cmの厚さで堆積していた。南東方向へ続く堀は、現在の道路の東半側付近で南方向へ屈曲すると思われる、道路の東側

に崖形状が残る部分が、堀の東側の両部のなごりと推測される。この付近について、『古城絵図』の内容をみると、この堀の西端止り付近の形状が巾六間半、深サ壹間で、検出した堀が屈曲する付近から二之丸側に南方向への土居(上塚)が記載されている。

2) B地点(北半区)

堀跡(SD-2-2BN)

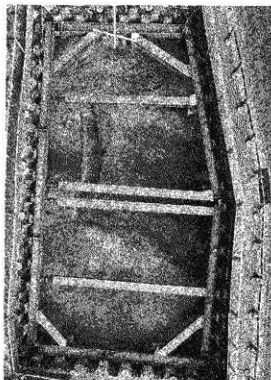
二之丸を区画する東側の堀跡の一部が検出されている。A地点で検出した堀が繋がるもので、発掘区の北半区を北北西から南南西方向に延びる。堀の上部は既に一部が削平され、その検出面は、黄褐色砂シルト(地山)面である。

堀の幅は約5mで、北東側での深さが約1.7m、南西側での深さが約1.8mである。その断面形は逆台形で、堀の底部の標高は、北東側で約7.5m、南西部で約7mを計測し、南西方向へ堀の深さも傾斜して深くなる。発掘区の南西側の堀底で、その下端部の両側には、幅約5cm、深さ約5~10cmの溝が、堀の底部の形状に沿って延びていた。埋土は灰色粘質土である。現状の地形が発掘区の北側で標高約10m付近、発掘区の南側で約8m付近となり、旧地形もほぼ同様に南方向への傾斜をしている。

また、堀は、発掘区外の圓道寺境内の南西端付近へと繋がるものと推定される。堀の埋土は、主に、灰褐色砂利土層で礫の多くみられるものであり、後世に埋め戻された土と考えられる。

SK01・SK02

堀の東側に、2基の土坑が重なる箇所が検出された。SK01は、長径が約1.5mの楕円形の北側半分が確認され、深さが20cm程で、SK02は長軸が約1mの楕円形の北側半分が確認され、深さが15cm程である。これら土坑は、南半区で確認された土坑の北側部分にあたると思われる。いずれも、暗灰色土に黄褐色土が混じる埋土で、現代造



A地点堀跡：SD-2-2A(南から)



B地点(北半区)堀跡：SD-2-2BN全景

物も出上しているため、土坑状遺構は、後世の遺作によるものと考えられる。

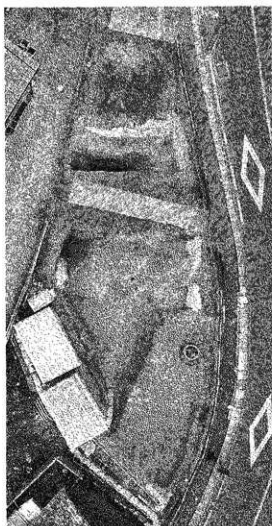
3) B地点(南半区)

堀跡(SD-2-2BS)

この堀跡は、北半区で検出した堀跡に繋がる。堀跡の南西側部分で、上端部の検出長は、約4m、下端部の検出長は、約2m、地山面よりの深さ約2mである。堀の底部の標高は、約6.7mを測り、さらに南西方向へ傾斜しながら繋がる予測された。

方形状遺構(SX-2-2BS)

大型の方形状遺構の北東部分が検出されている。その最大深さは、地山面が南方向に傾斜するが、最も高い検出面から約1.8mである。この付近について、『古城絵図』の内容をみると、堀の形状が巾七間、深サ貳間で、二之丸側の土居形(土塁)が記載されている。『古城絵図』のその着色方法を見ると、堀が黄色(空堀)となる部分が空白になっている。この着色の方法に意図があるとすれば、この方形状遺構がその空白の付近に対応するような形状とみることもできる。



B地点(南半区)全景

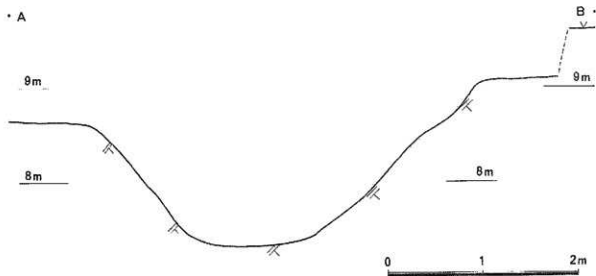


図10 B地点堀跡(SD-2-2BN)横断面

(4) 遺物

1) A地点

堀跡(SD-2-2A)(写真2-1・2)

埋土上位からは、山茶碗が多く出土しているが、小片が多く図化したのは4点である。全体の形状は復元できないが、2-1、2-4は底部と体部の境目が明瞭であり、斎藤第Ⅷ-1型式(註1)に相当し、2-3はやや古く同Ⅶ-3に相当すると思われる。山茶碗のほとんどは尾張系であるが、2-2は東濃系の小皿である。埋土最下層からは、須恵器、皿、播鉢、土師器鍋等が出土している。2-6は丸皿、内側に円錐ピンの跡があり、大窯第4段階(註2)の前半に相当する。2-5は布目瓦、凹面は磨耗が著しい、凸面は縄印きによる調整が施されている。2-7は播鉢、2-8は土師器羽付鍋である。

2) B地点

堀跡(SD-2-2BN)(写真2-3・4)

埋土上位からは、17世紀～18世紀代と思われる常滑鉢、甕が出土している(註3)。2-9は、真焼けの鉢、2-10は赤物の鉢とともに17世紀代と思われる。2-11は赤物の甕の口縁部、18世紀代前半にあたる。2-12は赤・甕(赤物)の底部である。下層からは、山茶碗、古瀬戸陶器、播鉢、土師器鍋、布目瓦等が出土している。2-13の山茶碗はⅧ-1、2-14の播鉢は大窯第1段階に相当すると思われる。

堀跡(SD-2-2BS)(写真2-4)

弥生土器、常滑甕等が出土している。2-15の常滑甕は、口縁部の緑帯が特に下方に突出し、頸部から差

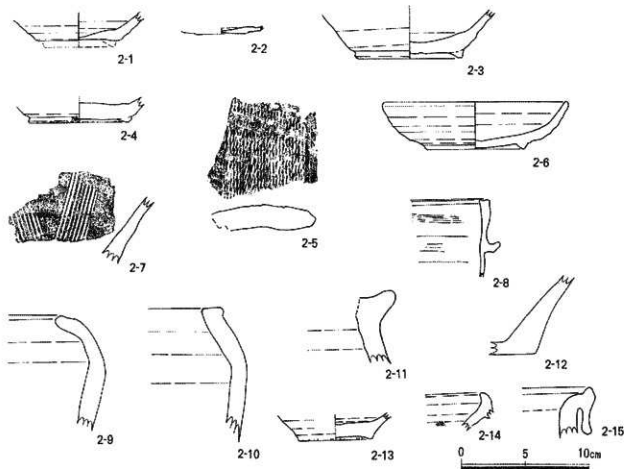


図11 第2次出土遺物

れており、7型新に該当する。

SK01

須恵器、土師器鋸、瓦片が出土している。

SK02

布目瓦、常滑竈(赤物)片が出土している。

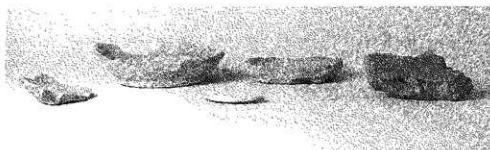
その他

表上等から、土師器、須恵器、山茶碗、常滑壺・壺、土師器鋸、摺鉢、布目瓦、いおし瓦等の小片が出土している。

註1 藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター 以下同

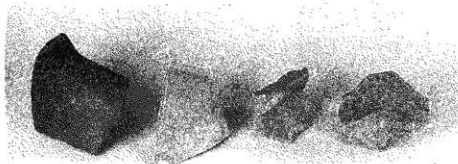
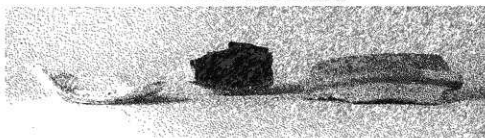
註2 藤澤良祐 1998『瀬戸市史 陶磁史篇四』瀬戸市史編纂委員会 愛知県瀬戸市 以下同

註3 常滑製品については、中野晴久氏にご教示いただいた。以下同



2-1

2-2



2-3

2-4



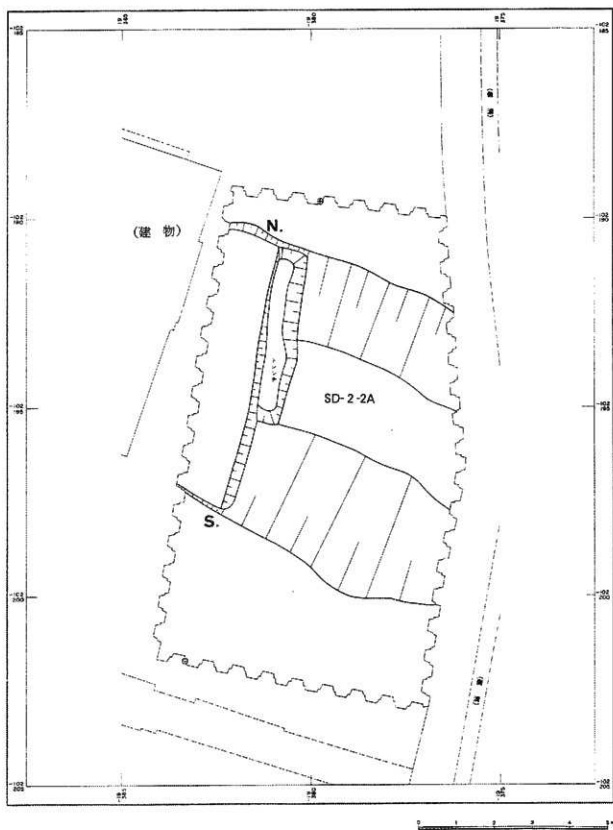
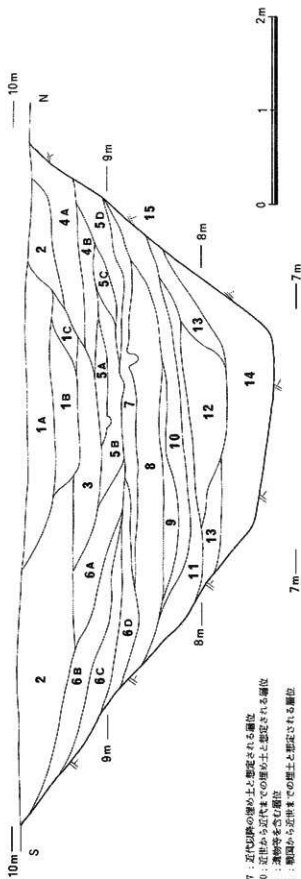


图12 A地点調査区と遺構図



1C~7：近代以降の埋め土と想定される層位
 8~10：近世から近代までの埋め土と想定される層位
 11~12：遺物を含む層位
 13~14：第四から近世までの埋土と想定される層位

- 1 A 灰茶褐色(砂質)土：1~3cmの礫を多く含む、茶褐色砂に0.5cm以下の灰色シルト粒が少量混入する。
- 1 B 灰茶褐色(砂質)土：3~6cmの礫を多く含む、1Aより灰色シルト粒の量が多く灰色が濃い。
- 1 C 灰茶褐色(砂質)土：1~3cmの礫を多く含む、1Bより灰色シルト粒の量が多くさらに灰色が濃い。
- 2 茶褐色(砂質)土：1~3cmの礫を多く含む、0.5cm以下の茶褐色砂粒と灰色シルト粒が混ざり合っている。
- 3 茶褐色(砂質)土：1~3cmの礫を多く含む、茶褐色土の砂が0.5~1cmの茶褐色粒が混入する。
- 4 A 赤褐色(砂質)土：1~3cmの礫を多く含む、灰褐色土の砂がほとんど含まれない。
- 4 B 赤褐色(砂質)土：3~6cmの礫を多く含む、4Aより色調が深い。
- 5 A 灰色砂質土：砂粒上に、3~6cmの礫と0.5cm以下の灰色シルト粒が混入する。
- 5 B 灰色砂質土：砂粒上に、1~3cmの礫を多く含む。
- 5 C 灰色砂質土：砂粒上に、3~6cmの礫を多く含む。
- 5 D 灰色砂質土：砂粒上に、1~3cmの礫を含む。
- 6 A 灰黄色砂質土：砂粒上に、1~3cmの礫と3~10cm大の灰色シルト塊を少量混入する。

- 6 B 灰黄色砂質土：砂粒上に、2~3cmの礫を多く含む。
- 6 C 灰黄色砂質土：砂粒上に、1cmの礫を多く含む。
- 6 D 灰黄色砂質土：砂粒上に、1cmの礫と5~10cmの灰色シルト塊が混入する。
- 7 赤褐色砂質土：砂粒上に、1~3cmの礫を多く含む。
- 8 暗赤褐色(粘質)土：暗赤褐色シルトに、0.5cm以下の砂粒が混入する。
- 9 暗赤褐色砂質土：砂粒上に、1~3cmの礫を含む。
- 10 暗赤褐色砂質土：砂粒上に、1~3cmの礫を含む。
- 11 暗赤褐色(粘質)土：暗赤褐色シルトに、少量の植物腐敗物を含む、陶器等出土。
- 12 暗赤褐色(粘質)土：暗赤褐色シルトに、少量の植物腐敗物と0.1~1cmの礫を少量混入する。
- 13 暗赤褐色土：灰褐色土質と0.2~0.3cmの砂粒層が互層になる。
- 14 暗赤褐色土：灰褐色土質と灰褐色砂粒層が互層になる。
- 15 赤褐色土及び黄褐色土：薄土層

図13 A地点掘跡(S-D-2-2A)土層断面図

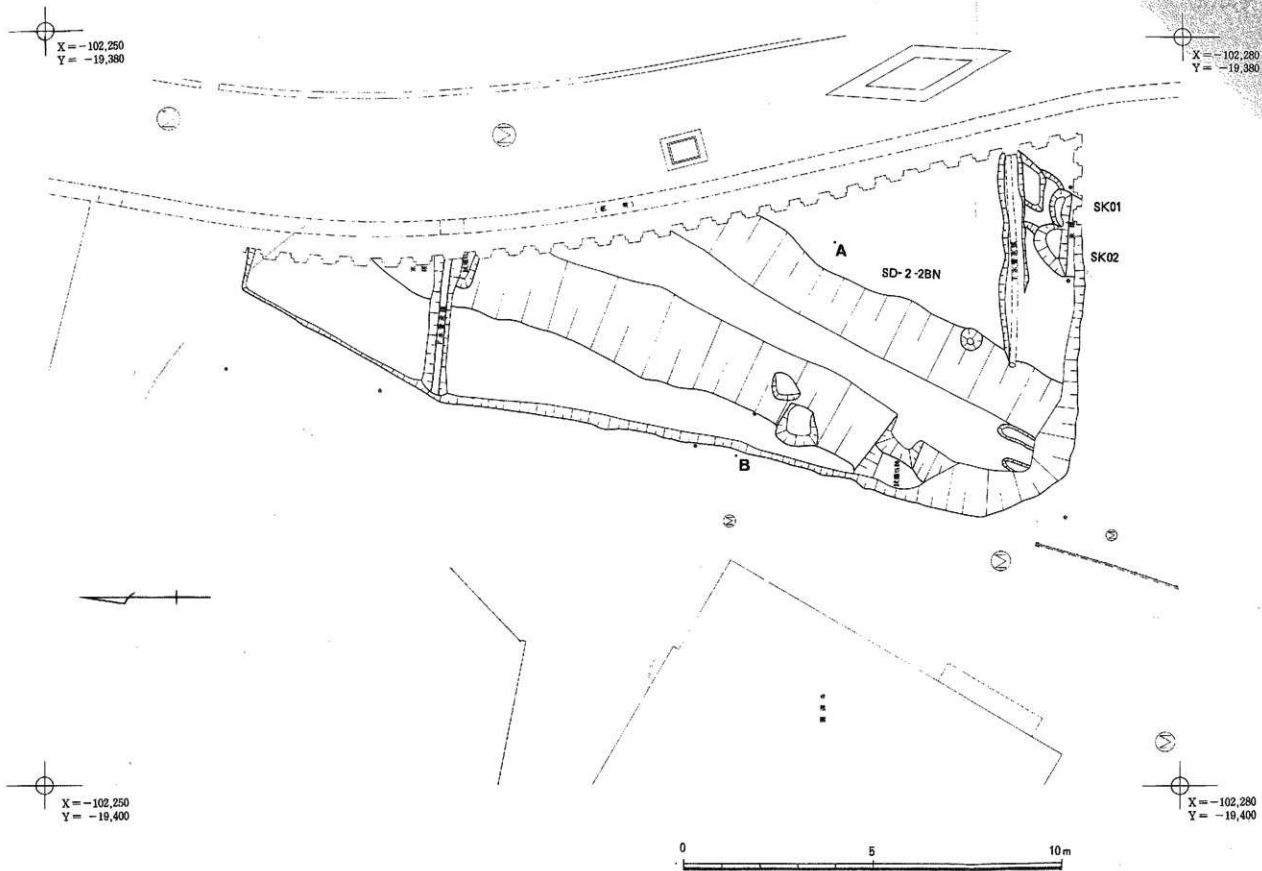


图14 B地点(北半区)调查区与遺構図

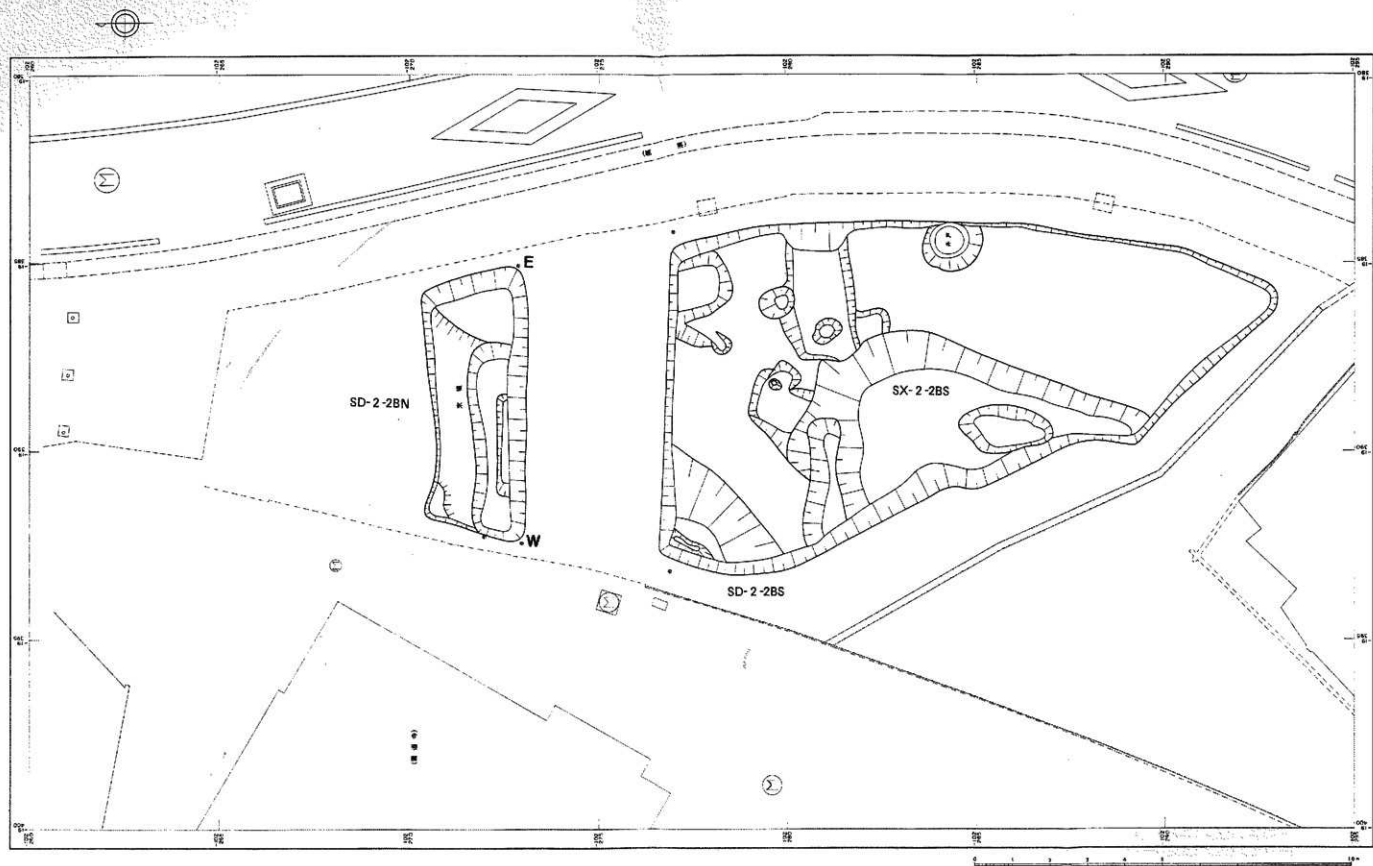
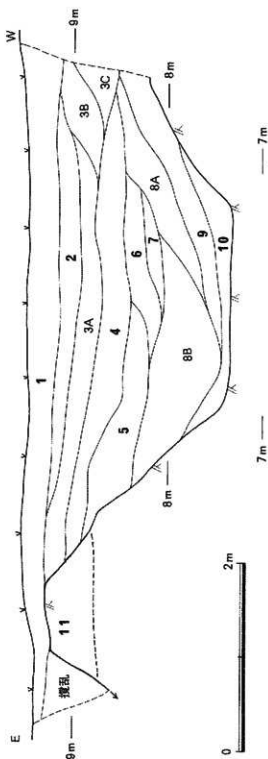


图15 B地点(南半区)調査区と遺構図



- 1 : 現代の遺跡による埋め土
 2~7 : 古代から現代までの埋め土と認定される層位
 8~9 : 互層から乱層までの埋め土と認定される層位
 10 : 埋込部の埋め土と認定される層位

- 1 灰褐色色(砂質)土: 重粘土(假説土)、1~3cmの黄褐色土を含む。
 2 灰褐色砂利土: 砂利土に、1~3cmの礫を混入含む。
 3A 淡灰褐色色砂利土: 砂利土に、1~3cmの礫を混入含む。
 3B 淡灰褐色色砂利土: 砂利土に、1~3cmの礫を混入含む。
 3C 淡灰褐色色砂利土: 砂利土に、1~3cmの礫を混入含む。
 4 淡灰褐色土: 0.2~0.5cmの灰褐色シルト粒に、1~3cmの礫を多く含む。
 5 暗灰褐色色砂利土: 砂利土に、1~5cmの礫を含む。
 6 暗灰褐色色砂利土: 砂利土に、1~8cmの礫を混入含む。
 7 灰褐色土: 0.2~0.5cmの灰褐色シルト粒に、0.5~1cmの礫を少量含む。
 8A 暗褐色色砂利土: 砂利土に、1~8cmの礫を混入含む。
 8B 暗褐色色砂利土: 砂利土に、1~8cmの礫を混入含む。
 9 暗褐色色砂利土: 砂利土に、2~3cmの礫を少量含む。
 10 淡灰褐色色砂利土: 砂利土に、0.5~1cmの礫を混入含む。
 11 黄褐色土水字灰白褐色土: 埋込層

図16 B地点掘跡(S-D-2-28N)土層断面図

第4章 第3次調査

(1) 調査経過

第3次調査地点は、第2次調査B地点南半区の南側隣接地で、道路拡幅用地が買収されたことに伴い、二之丸を形成する東側堀(外堀)の南東端付近の確認を目的として、調査面積は約205㎡、平成9年4月7日から5月23日まで実施した。

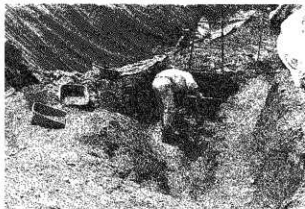
(2) 調査日誌

平成9年

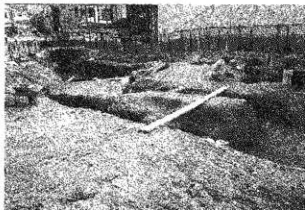
- 4月7日 発掘調査の案内看板の設置。
- 9日 調査事務所の設置。
- 18日 土木局と現場で、仮歩行者通路の設置方法など安全対策を協議する。
- 21日 調査区範囲等に、ネットフェンスによる仮囲いの設置。
- 24日 道路舗装装盤の切断工事、発掘区の設定。
- 30日 調査区の南側から表土除去の開始。
- 5月1日 南側で堀跡を検出。堀跡調査のため、トレンチ1・2の設定。
- 2日 北側寄りでSX01等の遺構を検出。
- 6日 SD01・02とSX-2-3の検出。
トレンチ2で、五輪塔など出土。
- 7日 トレンチ1で、堀の底部を検出。
トレンチ2で、堀の東側肩部を検出。
調査区北西側壁の土層断面図の作成。
- 8日 SX-2等の土層断面図の作成。
- 9日 各遺構の掘り下げ、ほぼ完了。
- 10日 各遺構の仕上掘削と清掃。
- 12日 遺構の写真撮影。
- 13日 空中写真撮影および測量。
- 20日 埋め戻し開始。
- 23日 埋め戻し終了、仮囲いの撤去。



堀跡(トレンチ2)調査風景(東から)



堀跡(トレンチ2)調査風景(北から)



S D01・02付近調査風景(北東から)

(3) 遺構

この地点は、B地点の南半部で検出した方形遺構(SX-2-2RS)に繋がる遺構の存在が予測され、この付近は、『古城絵図』でも、堀の南東側の形状が不明瞭な箇所であり、堀の検出が期待された。

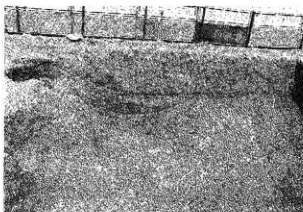
なお、調査地点は、二之丸を区画する東側堀の南端付近にあり、「古城絵図」に「巾七間、深サ式間」と記載されている付近に該当すると想定された。

遺構は、調査区の北側で方形遺構(SX-2-3)方形遺構の南辺から南西方向に延びる溝状遺構(SD01・SD02)、南側で堀跡(SD-2-3)などを発見した。

方形遺構(SX-2-3)

第2次調査B地点の南半区で検出した方形遺構(SX-2-2BS)に繋がる南隅部分が検出された。全体の南東辺の長さが、約15.5mを測り、深さ約90cmである。また、南西辺の底部では、一辺約3mの土坑形状になり、30cm程深く掘られている。

第2次調査地点で検出した堀(SD-2-2BS)の北西側辺の延長部は、これまでの調査結果から南西方向へ続き、園道寺の境内庭園に残存すると推測される。この堀の推測延長位置と方形遺構の



SX-2-3の土層断面(南東から)

南東辺との間隔は、12~13m程と予測することができ、「古城絵図」には「巾七間、深サ式間」と記載されており、巾七間(約12.6m)にほぼ一致する。そのため、この方形遺構は、堀が張り出した形状部分にあたる可能性が推測され、その形状を含めての数値が、「古城絵図」に記載されたものと思われる。

埋土の状況は、検出面(地山)より約60cmまでの深さが、地山の土に類似した後世の埋め戻し土(赤褐色土や黄褐色土)で、底部付近に厚さ約25cmの灰褐色土や約5cmの灰色粘質土が観察された。この遺構の東側では、現表土面より約1m下で地山面が露呈し、この間の上は黄褐色土で、後世に削平や造成がされている。ただし、発掘区北東側壁での土層観察では、現表上下約50cmで地山面が残存する部分があり、この遺構の当初の深さは1.4m以上はあったと考えられる。

発掘区北西側壁での、この遺構の南辺付近の土層断面観察でも、標高約7.4m付近に地山面が残存する部分があり、この面からの深さも約1.4mを測ることができる。また、遺構の検出面である地山は、南辺付近の標高が約7mで、地山面は南方向へ次第に傾斜して低くなる。

溝(SD01-A・SD01-B)

SD01・02を検出する以前に、褐色土が不整形楕円形状に広がる範囲(SX01)があり、この範囲を掘り下げると、SD01やSD02が検出された。この褐色土の範囲は、長軸6m程、短軸4m程で、SD01やSD02の上層埋土と類似していた。この形状は、不整形な楕円形もしくは帯状の広がりの範囲で、埋土も灰色粘質土が多く混じる箇所もあり、この付近が窪み形状であったと判断される。

南西方向へほぼ平行して延びる2条の溝は、方形遺構(SX-2-3)の南西辺に接して、SX01を掘り下げた時点で、検出されている。



溝：SD01・02(北北東から)

S D01-Aは、埋土が褐色土で、ほぼS D01-Bの位置の上に対応するかのようには帯状に広がる範囲で、その幅は約2.5m、最大深さ20cm程であった。S D01-Aの南東側肩部は、S X-2-3の南東辺の延長線上にほぼ位置し、調査区外へ繋がる。そのため、外堀の南東側肩部の役割を果たした痕跡の可能性もあり、S X-2との前後関係は明確にできなかったが、「古城絵図」の着色方法で空白となる部分を補う造構とも考えられる。

S D01-Bは、S D01-Aを掘り下げた後に検出し、幅約1.5m、深さ約60cm、検出全長が約9mで発掘区外へ繋がる。北端と南端で地山面からの深さは約60cmを測り、北端底部の標高は約6.4m、南端底部の標高は約5mである。地山面も、南方向に傾斜して低くなるが、この溝は約8°の勾配で南西方向へ傾斜している。溝の底部では、灰褐色の埋土を掘り下げると、さらに溝状あるいは穴状になる箇所がある。溝の底部で北端から中央にかけて溝状になる箇所では、東側の地山面からの深さが約1mとなり、さらに20~40cm深くなる箇所ができています。底部での溝状あるいは穴状になる箇所の形状は不整形であり、埋土も上に灰褐色砂であり、水の流れによる影響を受けた状態を示していると思われるため、この溝(S D01)も自然水路のような役割を果たしたと考えられる。

溝(S D02)

S D02は、最大幅約80cm、最大深さ約70cm、いずれの埋土も灰褐色土で、底部では厚さ約5cmの灰色粘土層があり、S D01とはほぼ平行する位置関係にある。検出全長が約5mで、北端での深さが約70cm、南端での深さが約10cmを測り、跡切れる。溝の北端底部の標高は約6.1m、南端底部の標高は約6mで、南西方向へ幾分低くなるが、S D01とは異なり、底部での傾斜が大ききは認められない。埋土は、約15cmの褐色土、約20cmの灰褐色土、底部付近が約10cmの灰色粘質土であり、底部での埋土の状態から、水が流れた時期があったことを示していると思われる。



S D02(南西から)

いずれの溝もS X-2-3との前後関係は、重複する位置での埋土差や調査区北側の土層断面の観察などからも明確に確認できなかった。ただし、調査区北側の土層断面の観察から、S X-2-3は、埋土が大小の地山塊を多く含む土であることから、近代以降に埋められたものと判断された。このことからすれば、S D01とS D02は、地山面が南方向に傾斜して低くなる地形上にあり、S D01とS D02が埋った後も、S X-2-3は埋らずに放置された状態であったと推測される。

井戸(SE01・02)

井戸跡が、3箇所発見されている。1箇所は、最近まで使用されていたため、調査対象としな



調査区全景(北から)

った。また、他の2箇所もいずれも完掘はできていない。

SE01は、方形遺構(SX-2-3)の南西辺際付近にあり、掘り方の直径が1.3m程で、埋土は暗褐色砂質土であった。

SE02は、掘り方の直径が1.5m程で、埋土は暗灰褐色土であった。

堀跡(SD-2-3)

調査区の南半で堀跡を検出した。調査区が三角形状に狭くなる箇所での発見であり、しかも南東側が道路であることから、安全性を考慮して全体

を深く掘り下げることは断念した。そのため、トレンチ方法による調査とし、調査区の南端箇所をトレンチ1(Tr.1)、堀跡検出の箇所をトレンチ2(Tr.2)と呼称して部分的に掘り下げることにした。トレンチ1での地山(黄色シルト質土)までの深さは、道路面から約2.5mを測る。この地山面が、おそらく堀底であろうと思われた。南端の地山面の標高は、約3.4mである。

トレンチ2では、堀跡の東辺を発見し、北西側壁の上層断面観察から、北端の深さが約1.5mである。その標高は、約4.7mである。



堀跡：SD-2-3(南東から)



調査区全景(西から)

(4) 遺物

SX01(写真3-1)

土師器、山茶碗、攝鉢、天目茶碗、皿、布目瓦等が出土している。3-1の尾張系山茶碗は、斎藤第Ⅷ-1型式、3-2は、長石釉の菊皿、登窯第5小期^(a)の製品と思われる。

SX-2-3(写真3-2・3)

須恵器、山茶碗、古瀬戸皿、常滑甕、碗、布目瓦等が出土している。3-3~9は山茶碗、3-10は小皿、いずれも尾張系で、3-4・5は同Ⅷ-3、3-6・7・9は同Ⅷ-1に相当する。3-11は灰釉丸碗の底部、大窯第2段階に相当すると思われる。布目瓦の破片も多く出土している。3-12~14の平瓦は、いずれも凸面は縄叩き調整が施され、3-13・14は1枚つくりと思われる。丸瓦(写真3-3)は、凸面は縄叩き後ナデられている。その他、東濃系の山茶碗片が1点出土している。

SD01-A(写真3-4)

須恵器、灰釉陶器、山茶碗、常滑甕、土師器鉢、布目瓦等が出土し、特に表面が磨耗した瓦の小片が集中している。3-15は灰釉陶器、3-16は尾張系山茶碗である。

SD01-B

布目瓦が1片出土している。

SD02(写真3-5)

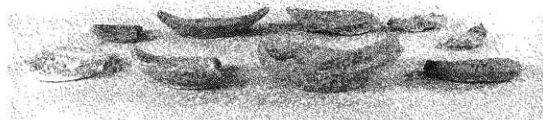
山茶碗、布目瓦、常滑甕等が出土している。3-18の山茶碗は、尾張系で体部が直線的に立ち上がっており、同Ⅷ-3に相当する。3-19は常滑甕胴部で、12世紀代のものと思われる。

SE01(写真3-6)

山茶碗、常滑甕、古瀬戸皿、土師器鉢、布目瓦等が出土している。3-20は古瀬戸後期の皿底部、3-21は常滑甕、口縁端部を上下に短く伸ばしており、6(新)型式に相当する。他に、常滑甕で、頸部から直線的に肩が張り、13世紀後半と思われるものがある。3-22の平瓦は、縄叩き調整がほどこされている。山茶碗は、図化できなかったが、尾張系で13世紀前半頃のものが出土している。

註1 瀬戸市史編纂委員会 1998 『瀬戸市史 陶磁史編六』 愛知県瀬戸市 以下同

3-1



3-2

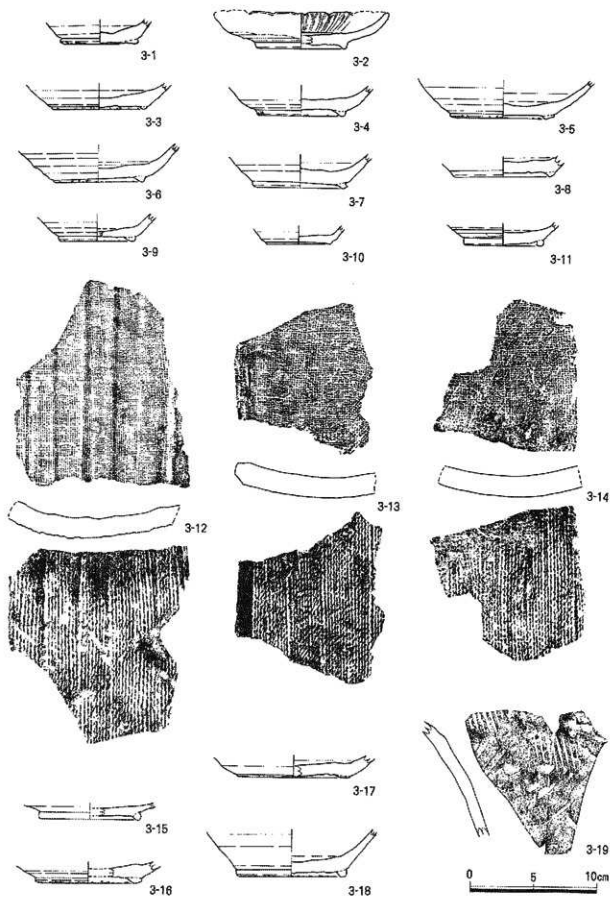


图17 第3次出土遺物(1)

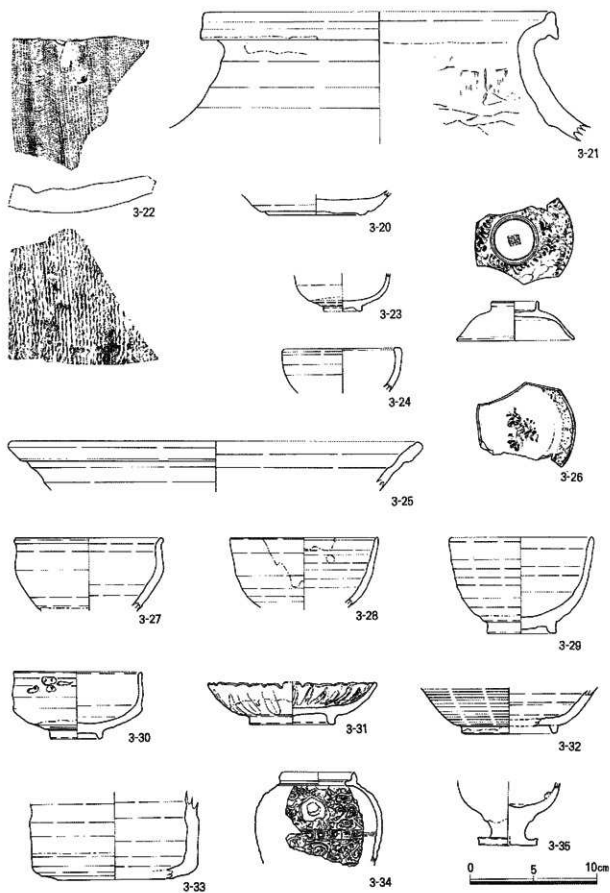


图18 第3次出土遺物(2)

SE02(写真3-7)

近世陶磁器等が出土している。3-25は登窯第7小期の播鉢、3-23は18世紀後半の灰釉小碗、3-24は口縁が内傾し、胎土にぶい浅黄色を呈しており、唐津系の香炉とも思われる。3-26は染付蓋、その他、登窯第8・9小期の染付碗、徳利等がある。

堀跡(SD-2-3)(Tr.1)(写真3-8)

出土遺物の大部分は、近世瀬戸美濃陶器である。他には、須恵器、常滑壺、布目瓦の小片がある。3-27の天目茶碗は、口唇部は内傾し口縁はやや外反しており登窯第2小期に相当する。3-28の丸碗は、灰釉に一部緑釉が掛けられているもので、同第5・6小期に、3-29の灰釉碗は同第6小期に相当する。3-30は同第7～9小期のせんじ碗、鉄絵が描かれている。3-31は菊皿、口縁や外面はへら削りがされ、灰釉に緑釉が施されている。同第5小期に該当する。3-32は、長石釉の皿で同第3・4小期、3-33は香炉である。3-35は乗燭、3-34は水注と思われる器種で、外側型で成形され、釉は黄褐色、蓋受けがあり、横に突出部が付く形状である。

堀跡(SD-2-3)(Tr.2)(写真3-9・11)

3-36～39は淡灰褐色土～灰褐色土からの出土遺物である。3-36は長石釉の皿で、底部内外に円錐ビン跡が残る、登窯第3・4小期に相当する。3-37の天目茶碗は、口縁は短く外反し、高台は露帯、同第4小期に相当すると思われる。下層からは、一石五輪塔の空・風輪(3-42)、宝篋印塔の相輪(3-43)が出土している。

その他(写真3-10)

表採であるが、古瀬戸後IV(古)期の鉦目付大皿(3-40)、登窯第3・4小期の長石釉皿(3-41)がある。

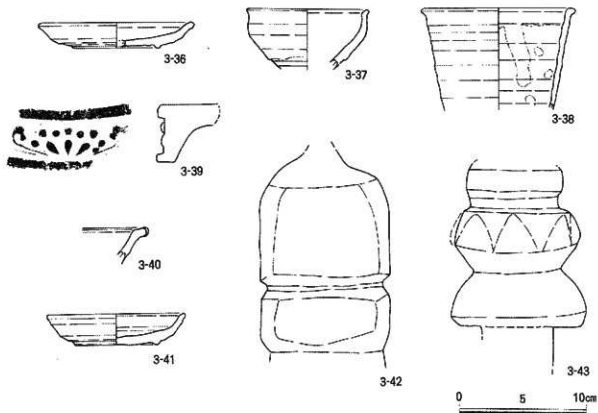
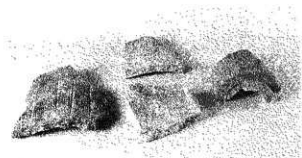


図19 第3次出土遺物(3)



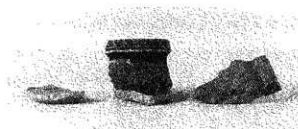
3-3



3-4



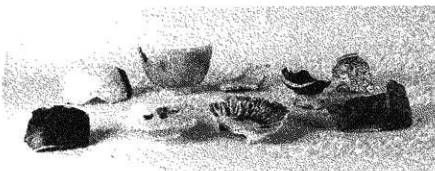
3-5



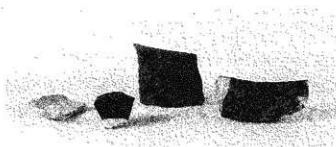
3-6



3-7



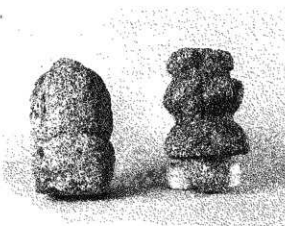
3-8



3-9



3-10



3-11

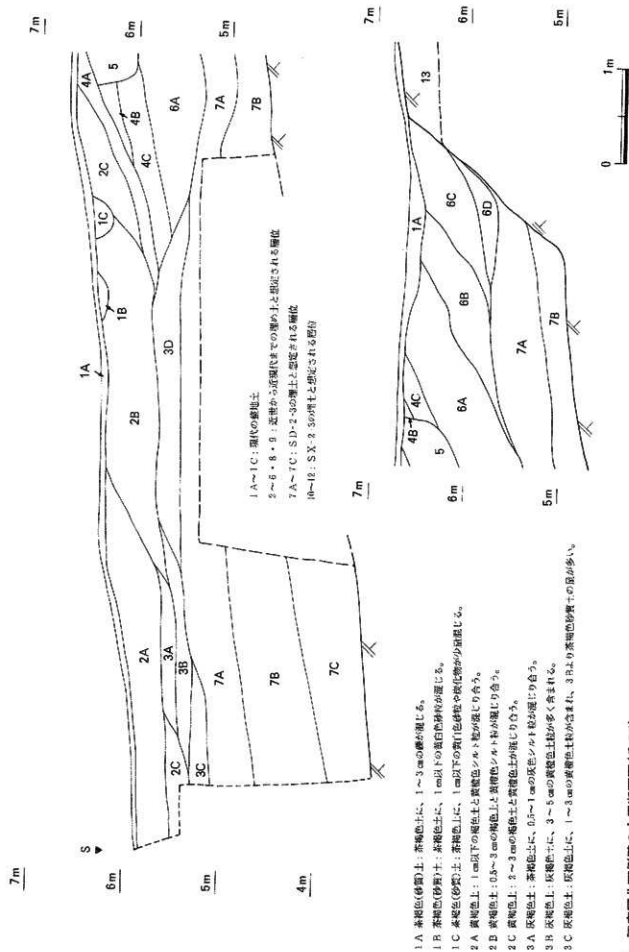
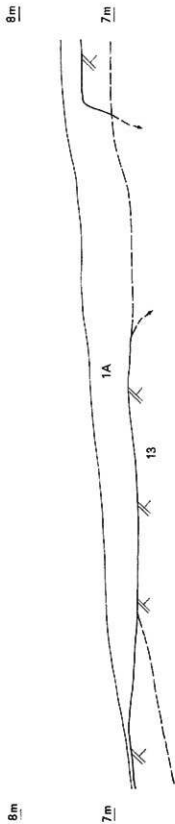


図20 調査区北西側壁の土層断面図(その1)



- 3 D 灰褐色土：3 Cより赤褐色砂質土の層がさらに多く、1 cm以下の灰色シルト粒が混じる。
 4 A 淡灰褐色土：灰褐色土に、1 cm以下の黄白色砂粒が混じり合う。
 4 B 淡灰褐色土：灰褐色土に、0.5～1 cmの灰白色粘土粒が少量混じる。
 4 C 淡灰褐色土：灰褐色土に、1 cm以下の黄白色砂粒が多く混じる。
 5 暗灰褐色土：灰褐色土に、1～2 cmの黄白色砂粒が混じる。
 6 A 赤褐色土：赤褐色土に、0.5～1 cmの黄白色砂粒が少量混じり、陶器等出土。
 6 B 赤褐色土：赤褐色土に、1 cm以下の赤褐色シルト粒や黄白色砂粒が多く混じる。
 6 C 赤褐色土：赤褐色土に、1 cm以下の黄白色砂粒が多く混じる。
 6 D 赤褐色土：赤褐色土に、1 cmの灰色シルト粒が少量混じる。
- 7 A 青灰褐色(シカト質)土：灰褐色シルトに、黄白色砂粒が混じり赤い、陶器等出土。
 7 B 青灰褐色(シカト質)土：7 Aより赤い、黄白色砂粒が多く混じり合う。
 7 C 青灰褐色(シカト質)土：7 Bより赤い、黄白色砂粒が少なく、灰色が濃くなる。
 8 赤褐色土：赤褐色土に、1～2 cmの層が混じり、1 cm以下の灰褐色土粒を含む。
 9 灰褐色土：赤褐色土に、1～2 cmの層が多く混じり、1 cm以下の灰褐色土粒を含む。
 10 灰褐色土：灰褐色土に、1～5 cmの層が多く混じる。
 11 暗灰褐色土：灰褐色土に、1 cm以下の層が少量含まれ、1.5より赤い色が濃くなる。
 12 暗灰色(粘質)土：灰褐色土に、0.5～1 cmの層が少量含まれる。
 13 黄褐色(シルト質)土・赤褐色(シルト質)土：層山、2～3 cmの層が含まれる。

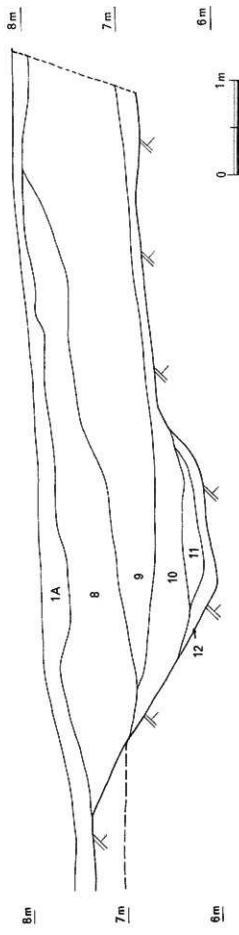


図21 調査区北西断壁の土質断面図(その2)

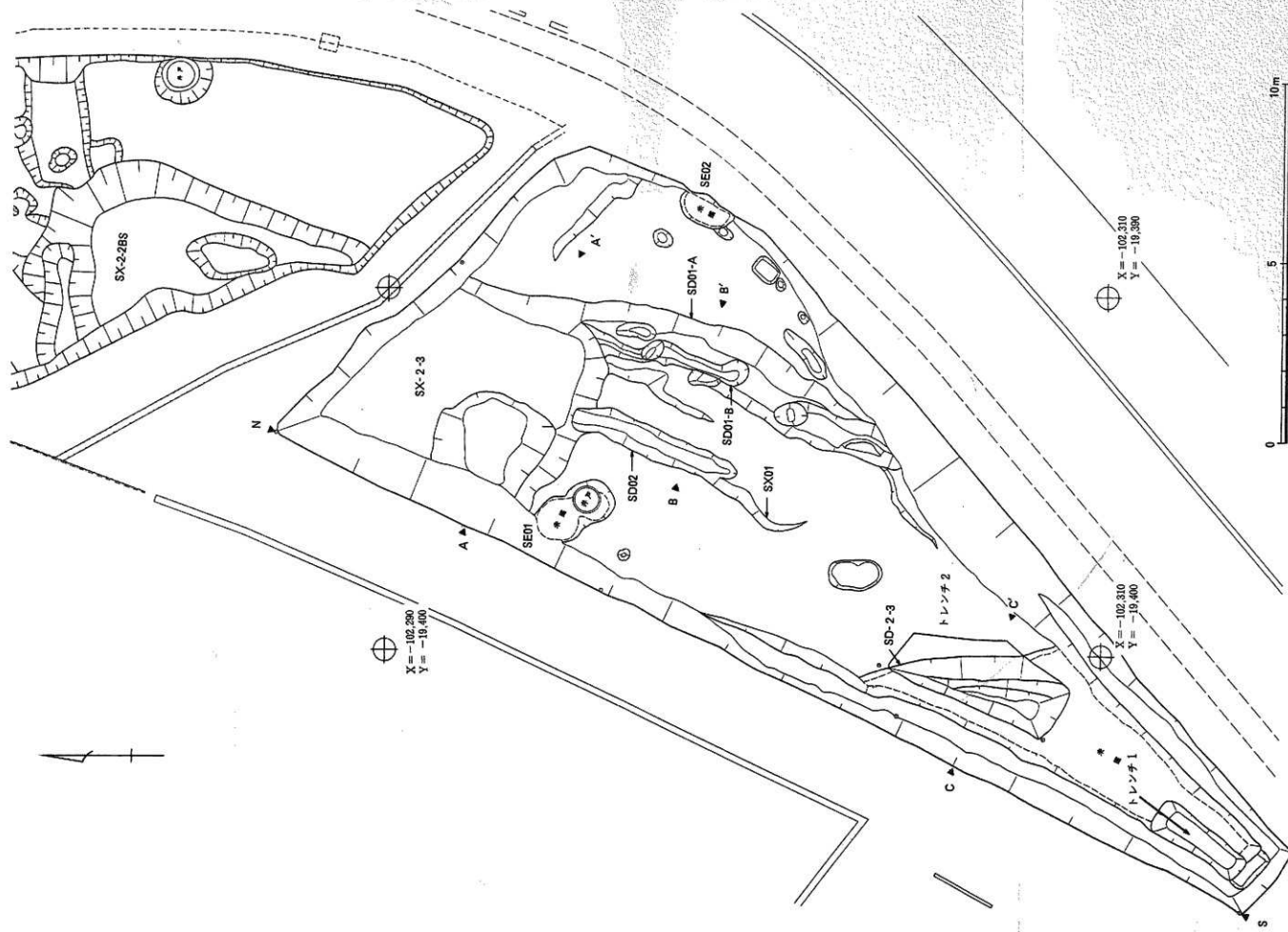


図22 新3次調査区遺構図および新2次調査区遺構(部分)図

第5章 第4次調査

(1) 調査経過

第4次調査は、第3次調査の終盤に、道路工事に対処する必要があるため、「花井」の交差点から南へ2本道を左折する現道路部約35㎡と用地買収された約60㎡を対象として、急遽実施することになった。そのため、道路工事施工業者が道路部のアスファルト撤去をした後、3次調査の埋め戻しと並行する5月19日から開始し、6月6日まで調査を行なった。

この付近については、『古城絵図』の内容をみると、総堀が東側から北側へ曲り、堀の形状は、巾五間(約9m)、深四尺五寸(約1.4m)と記載される。

(2) 調査日誌

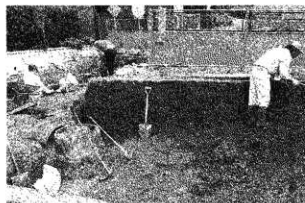
平成9年

- 5月19日 調査区の設定、ネットフェンスによる仮囲いの設置。
- 20日 表土除去の開始、仮歩行者通路の設置。
- 21日 道路部で、上下水道管・ガス管の埋設位置確認と堀跡検出のため試掘(Tr.1)実施。
道路部で、溝状遺構検出。
- 22日 南側部で、堀跡やSK02を検出。
溝状遺構(SD01)の形状確認のため試掘(Tr.2)実施。
- 23日 遺構平面図および土層断面図の作成。
遺構の写真撮影。道路部の埋め戻し。
- 25日 南側部の遺構平面図作成。
- 26日 調査区周辺の測量図作成。
- 28日 南側部の埋め戻し開始。
- 6月6日 調査区の埋め戻しと整地終了。

(3) 遺構

堀跡(SD-3-4)

調査区の中央で、堀の南西側辺を検出し、その深さは約1.2mである。堀の東北側辺は、道路地内で発見されると考えられたが、上下水道管とガス管が埋設された状態であり、全体を掘り下げる



調査風景(西から)



堀跡：SD-3-4付近(西から)



堀跡：SD-3-4付近(北西から)

ことができていない。そのため、2箇所でのトレンチ方式による調査を実施した。その結果、Tr.1の北側に部分的に残存する50cm×2m程の地山範囲が検出され、この地山面が堀の東北側辺の下端付近と判断された。この残存部分と南西側辺までの幅は、約6mあり、堀の推定幅は約8mとなる。

この検出した堀の形状は、推定幅約8m、深さ約1.2mであり、その数値は、『古城絵図』に記載された「巾五間(約9m)、深四尺五寸(約1.4m)」の近似値である。

溝状遺構(S D01)

道路内で、50cm×2m程の範囲に残存する地山面が検出されているが、この東側で幅約3mの褐色土が部分的に残存して検出され、溝状遺構の発見となった。幅約50cmのTr.2を設定して調査となったが、この溝は、幅約3.5m、深さ約1.3mで、ほぼ南北方向に繋がると考えられる。堀との関係は、部分的な残存でもあり、解明できていない。

溝状遺構(S D03)

幅約25cm、深さ約10cm、検出長約1.5mの溝で、土坑(S K02)の北東隅から南東方向へ屈曲する。

土坑(S K01)

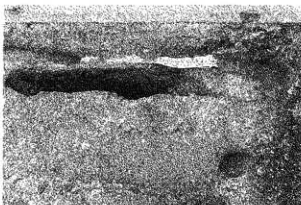
長辺約1.2m、短辺約80cm、深さ約10cmの方形状土坑で、山茶碗と近代陶器が出土している。

土坑(S K02)

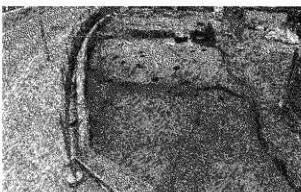
調査区南側で、短辺約2.5m、長辺約3.5m、深さ約30cmの台形状土坑を検出した。埋上は、暗褐色土であった。



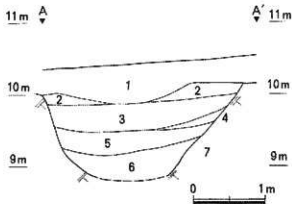
堀跡：S D-3-4付近(北から)



溝状遺構：Tr. 2 付近(南から)



土坑：S K02(南から)



- 1 淡灰褐色砂利土：道路層、0.5～3cmの礫が含まれる。
- 2 淡灰褐色土：0.5～1cmの灰褐色土粒と黄褐色土粒が混じり合う。
- 3 暗灰褐色土：0.5～1cmの灰褐色土粒に、黄褐色土粒が少量含まれる。
- 4 黄褐色土：2～3cmの黄褐色土粒に、0.5～1cmの灰褐色土粒が少量含まれる。
- 5 灰褐色土：0.5cm以下の褐色土粒と灰褐色シルト粒が混じり合い、1cm以下の礫が少量含まれる。
- 6 暗灰褐色(シルト質)土：0.2～0.5cmの灰褐色シルト粒に、0.2～0.3cmの灰褐色土粒が少量含まれる。
- 7 黄褐色(砂質)土：堆土、2～5cmの礫が含まれる。

図24 S D01の土層断面図

(4) 遺物

S D01(写真4-1)

尾張系山茶碗が数点出土している。4-1は、体部の立上りが丸みが強く、高台は逆三角形を呈し先端がやや尖っている。初殷痕は認められず念藤第Ⅶ-1型式と思われる。4-2は立ち上りが直線的になっており、同Ⅶ-1に相当する。

堀跡(S D-3-4)(写真4-2)

須恵器、山茶碗、近世陶器等が出土している。4-3は須恵器長頸瓶の底部と思われる。4-4は尾張系山茶碗、4-5は19世紀後半代の播鉢である。その他、青磁片等がある。

S K01(写真4-3)

出土遺物は2点。4-6は尾張系山茶碗、無高台の底部は小さく、体部の立上りが直線的で器壁は薄い、藤岡窯の製品で藤澤第11型式に該当する(註)。4-7は朱泥の急須である。

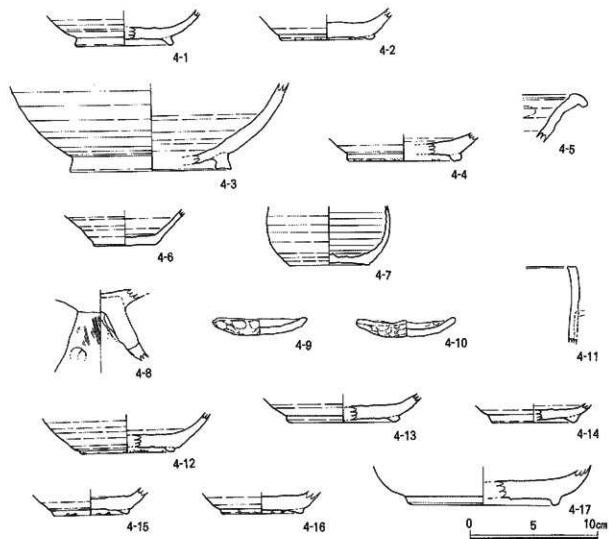


図26 第4次出土遺物

SK02(写真4-4)

土器、山茶碗、土師器皿等が出土している。4-8は弥生後期の高杯脚部、4-9、10は土師器皿、いずれも非ロクロで内面をなでている。径は7.2cmと7.5cmである。4-11は羽付鍋の口縁である。その他、尾張系山茶碗小皿等がある。

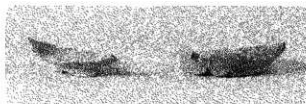
包含層(写真4-5)

山茶碗が数点出土している。4-12、13の碗は同Ⅶ-3、4-15の碗は、底径が小さくなり、底部内面に指圧痕、外面に板目状圧痕が見られることから同Ⅶ-2と思われる。これらは尾張系であるが、東濃系小皿片もある。

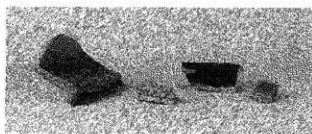
表土・攪乱(写真4-6)

4-16は、尾張系山茶碗で同Ⅶ-1、4-17は、明治後半以降の銅板刷の皿である。

註1 藤澤良祐氏にご教示いただいた。



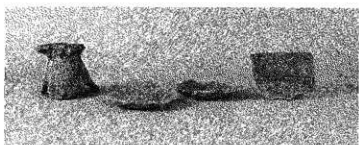
4-1



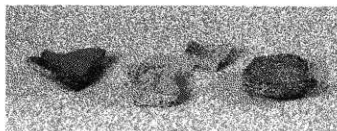
4-2



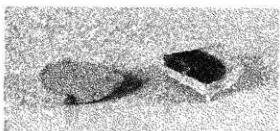
4-3



4-4



4-5



4-6

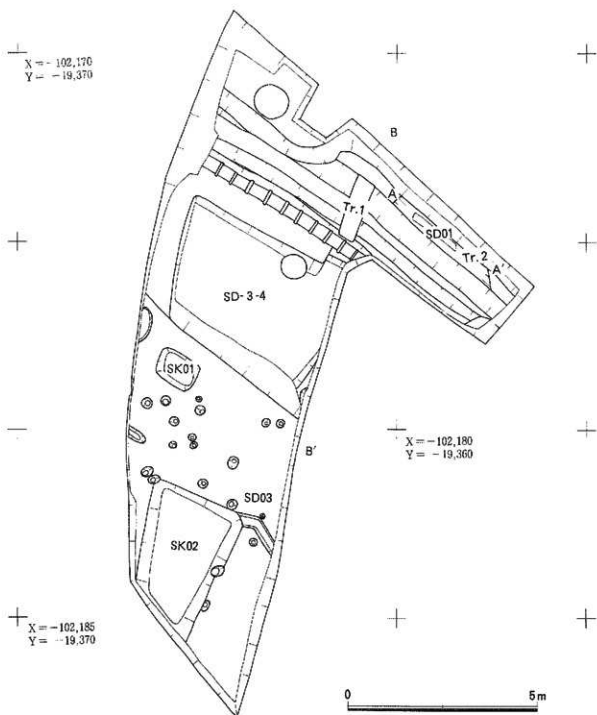


図26 第4次調査区遺構図

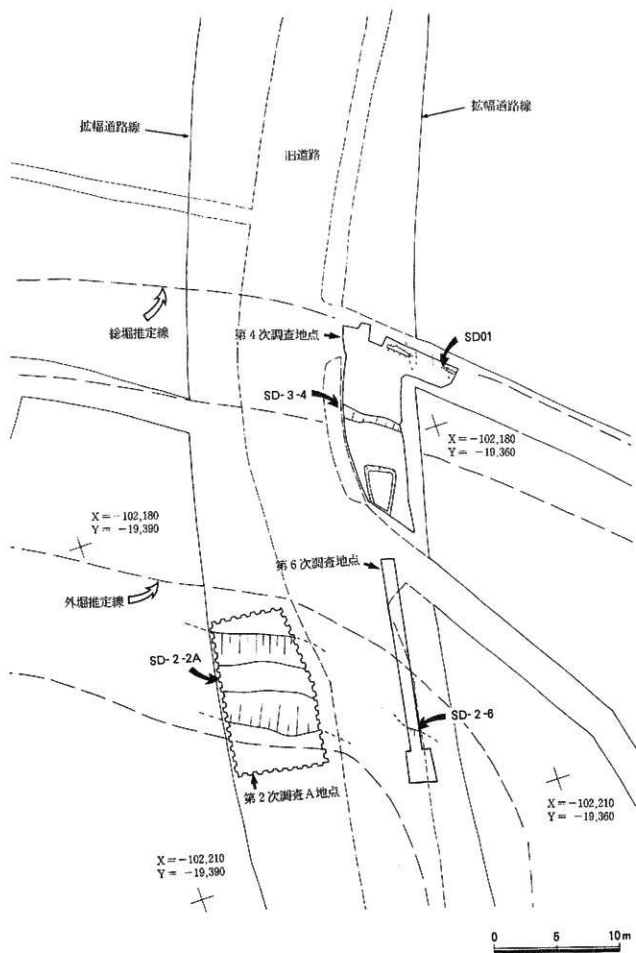


図28 第2(A)・4・6次調査地点および堀跡の推定図

第6章 第5次調査

(1) 調査経過

第5次調査は、緑保健所の解体工事および跡地造成工事に伴い実施した。建物解体工事終了後の9月16日から、調査方法の都合から北半のA区と南半のB区に区分して、A区から調査を開始した。

(2) 調査日誌

平成9年

9月18日 A区の調査区設定、表土除去の開始。

20日 調査区北東側の一部に、黒色土が残存する。

22日 包含層がほとんどなく、地山面が露出する。

26日 表土除去を終了し、建物基礎など攪乱部分の掘り下げ。

29日 調査区北西側で、埋土が赤褐色シルトの南北方向に広がる範囲(SX01)が検出される。調査区北東側で、埋土が灰色土に黒色土の混じる不整形な窪み跡(SX02)が検出される。井戸跡の期待をしたが、1.5m程掘り下げてコンクリートが含まれ建物基礎などによる攪乱土と判断された。

中央付近で、北西方向に延びる溝状遺構(SD02)を検出。埋土に炭化物が少量含まれる。

10月1日 各遺構の掘り下げ。溝状遺構(SD02)の埋土から、現代陶器・須恵器が少量出土した。

3日 遺構の土層断面図の作成。

6日 写真撮影のため清掃。

7日 クレーンによる空中写真撮影。

13日 A区の埋め戻し開始。

16日 B区の表土除去開始。

17日 調査区の南東側で堀跡の発見。

18日 堀跡上端の南西側で、褐色土が堀の形状に沿って広がる範囲が検出される。

この範囲を掘り下げると、土坑状遺構(SK01・02)が検出された。

21日 堀跡内に、畦を2本(中央畦・西畦)設定し、堀の埋土を大きく3区分(東・中・西)する。



A区全景(南から)



溝状遺構：SD02(南西から)

22日 緩やかに曲る堀跡の形状が確認され、調査区の中央付近で跡切れる。

23日 堀跡を南東側から、畦での土層断面を観察しつつ掘り下げる。

27日 SK01・SK02より土師器などの破片が出土。

28日 堀の埋土を半分程の深さまで、掘り下げる。



堀跡：SD-1A-5調査風景(西から)

10月5日 堀跡の掘り下げが、畦部分を残して、ほぼ完了。中央部の堀底付近より古銭が出土。

6日 畦の土層断面図の作成。

10日 畦を土層別に掘り、遺物を採集。

14日 各遺構の掘削完了。

18日 写真撮影のため清掃。

19日 空中写真撮影。

25日 B区の埋め戻しとA区の整地を開始。

28日 埋め戻しと整地終了、器材等の搬出。



堀跡：SD-1A-5(西から)

(3) 遺構

A区では、旧緑保健所の建築工事で旧地形が著しく削平されていたものの、北西端で溝状遺構の一部などが発見された。調査開始の前に、『古城絵図』から期待した、本丸東側の堀や井戸は発見されなかった。

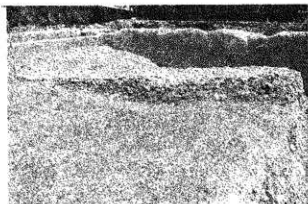
B区では、二之丸の南側にある小区画を形成する堀が発見された。この堀は、第1次調査で検出した堀に繋がり、南から西方向に曲る形状が確認され、西端部分の幅が約1.5mと狭くなって跡切れる。跡切れる西側が、北の二之丸へ至る「土橋」形状となっていたと考えられる。

『古城絵図』によれば、この堀の形状は、「巾四間(約7.2m)、深サ壹間半(約2.7m)」と記載される。調査区南側の地形は、旧形状を残していると思われ、調査区の表土より1m程高く、調査区は削平された状況にあると判断される。また、『古城絵図』作成時に、既にある程度埋っていたことが推測される。

1) A区

SX01

調査区の北西側で、赤褐色シルト質土と灰褐色土が混じる範囲が南東方向に広がり、地山面(黄褐色シルト質土)で溝状遺構の南西側面の一部を検出した。溝の埋土は、北西方向に次第に深く残存し、南端で深さ約25cm、発掘区北側断面での最大深さ約60cmを測る。北東辺付近が、建物基礎で攪乱され残存しているため、幅は不明であり、また、出



SX01(北西から)

土遺物もない。

SD02

幅約1.5m、南東端の深さ約20cm、北西端の深さ約40cmで、断面形状が箱形になる。検出全長約13mである。埋土は暗灰褐色土で、炭化物が含まれる。

2) B区

堀跡(SD-1A-5)

南から西方向に緩やかに曲る形状が検出され、西端部分の幅が約1.5mと狭くなって跡切れる。堀の調査に際して、その遺物の取り上げ位置を、便宜上、土層断面図作成ための畦を境にして、東部、中部、西部、西端部に区分した。

堀の形状は、最大幅約6m、地山面からの最大深さ約2.8mを測り、場所によって幾分相違があり、北西方向へ次第に浅くなり、南東方向へ幅が広がっている。検出面である地山の標高は、13.7m付近で、西側底部の標高が、11.5m付近、東側底部の標高が10.9m付近となる。その間の傾斜勾配は、3°程を測る。

南東部は、堀が南方向に曲る付近になり、南西側の堀上端部が発見されている。この付近は、標高12m付近で、最大幅約80cmの平坦面が検出されている。

中央部の土層断面の観察から、堀の断面形状が、逆台形とV字形の段階があった可能性が考えられた。逆台形の堀が埋った後に、暗灰褐色砂シルトが底部になるV字形の堀形状の段階があったことを推測させた。中央部から南東部にかけての堀底では、最大厚約20cm、幅が50～100cmの範囲に、暗灰褐色砂シルトが埋土となるV字形の堀形状の底部が溝状に検出されている。この形状の差が、人為的な時期差を示すと考えられる。逆台形の堀底幅は、西側畦付近で約4m、中央畦付近で約5m、標高は、西側畦で約11.4m、中央畦で約11.6m、東側で約11.2m、V字形の堀底部の標高は、西側畦で約11.8m、中央畦で約11.2m、東側で約10.9mである。

堀の西端部分は、幅2m程に先端が括れて細くなる形状で、上層から黒褐色土の埋土が広がるため、土坑遺構の存在を想定したが、西端畦の土層断面の観察から埋り方の違いによることが確認された。この堀留部分は、底面の標高が約12.5mと1m程高くなっており、底部の長さは約1.5m、幅は狭く20～40cmである。逆台形の段階で既に掘られていた可能性もあるが、V字形の堀底部の形状と標高から、V字形状



堀跡：SD-1A-5(北から)



堀跡：SD-1A-5(南西から)



堀跡：SD-1A-5(東から)

は西端から始まり東に深くなっていくかのように推測される。

堀の南西側に残る旧地形の標高は、15～15.5mであり、堀が掘られた当時の深さは4m程と考えられる。また、幅は、側面の傾斜をそのまま延長していくと7～8.5m前後となる。埋土を観察してみると、上から、1)橙褐色土を主とする層位群、2)灰褐色～暗灰褐色土を主とする層位群、3)黒褐色土を主とする層位群、4)暗灰褐色土を主とする層位群に大きく分けられ、出土遺物から、1)は近世から近代、2)は近世、3)は近世以前に埋った土と考えられる。堀の規模については、『古城絵図』に「巾西間(約7.2m)、深サ志間半(約2.7m)」と記載されており、幅は相当するが、深さは、絵図が書かれた頃までに1～1.5mは埋っていたと推測できる。3)の上面の標高は、西側畦で約12.2m、中央畦で約12.5mである。

SK01

直径約80cm、深さ約10cmで、埋土が褐色土である。

SK02

長辺約4.5m、推定短辺2m程、深さ約30cmである。堀と重なる部分での埋土の観察から、堀跡より以前の黒褐色土が埋土となる別の遺構が、重複して残存していた可能性がある。

(4) 遺物

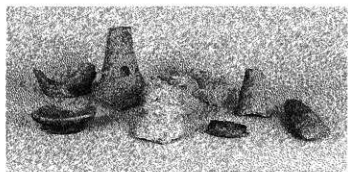
遺物は、弥生土器、須恵器、山茶碗、その他の中世陶器、近世陶磁器等、弥生時代～19世紀代にわたっている。遺物の大部分が堀(SD-1A-5)からの出土である。発掘の遺物採集の方法は、土層観察用の畦によって東部、中部、西部、西端部に区画して取り上げたが、ここでは堀内一括として、おおまかに中世以前、中世、近世にわけて整理した。

中世以前(写真5-1～3)

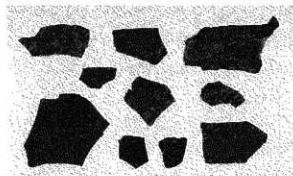
弥生土器、土師器、須恵器等がある。5-1～4は弥生後期土器、1・2は甗の底部、3・4は高杯脚部である。5-5は土師器壺、5-7は屈折脚高杯である。図化はしていないが、長胴甗の胴部片もある。5-8は砂岩製の石斧である。5-9～17は須恵器、5-9の杯蓋は器高が低く、内側に短い返しが付く、1-17号窯式に相当する。5-10の杯蓋は端部をくの字状に折返しており、I-41号窯式かC-2号窯式に相当すると思われる。5-11～13は杯身である。12の底部には、「×」印のような窯記号が認められる。13の底部には糸切り痕が残る。5-14～15は甗、口縁端部をくの字状に折返している。5-16は横瓶の口頸部である。灰釉陶器の出土量は少ない。5-18は碗の底部、高台は三日月高台である。布目瓦は多く出土している。5-19・20の軒丸瓦は、複弁5葉と単弁1葉からなる蓮華文をもち、正面右上の弁間に斜の線がある鳴海磨寺固有のものである(20)。

中世(写真5-4～21)

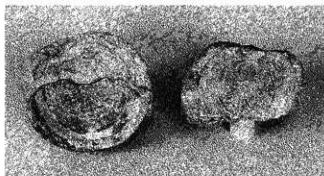
山茶碗、古瀬戸後期製品、大塚期製品、常滑製品、土師器皿、土師器鍋等が出土している。5-21～33は、尾張系山茶碗である。5-21は高台が逆三角形を呈し、切殻痕は認められなく、斎藤第VII-1型式に相当すると思われる。5-23～27は体部が直線的に立ち上がり、同VII-3と思われる。5-31は、無高台で底径が小さく、器高の低い形状であり、藤澤第10型式に該当すると思われる。5-32・33も同様の形状と思われる。その他、碗が3枚軸着したものもある。また、図化はできていないが、東濃系の碗、皿の小片も数点出土している。



5-1



5-2



5-3

古瀬戸では後期の製品が多くある。5-34は灰釉の甌了、5-35は鉄釉の壺口縁部、5-36は祖母懷茶壺、耳は縦に付く。5-178(図52)は灰釉縁釉皿である。その他、祖母懷壺片や甌片、搦鉢片等がある。

大窯期の陶器は皿、大目茶碗、搦鉢等がある。5-37・38は第1段階の灰釉端反皿、37の底部内面には印花文が押し印されている。5-39、181(図52)は鉄釉皿、39は稜皿、第2段階に相当すると思われる。5-40は第3段階の丸皿で鉄釉の上に灰釉が施されている。5-41～45は天目茶碗でいずれも高台周辺には錆釉が施されている。5-41は口唇部のくびれは弱く第1段階に相当すると思われる。5-42は直線的に立ち上がり、口唇部のくびれがやや強くなっており、第2段階に相当し、5-45は内返り高台で濃い錆釉が施されており第1段階に、他は第2～3段階に相当すると思われる。5-46は、第1段階の鉄釉仏前具、5-47は、第3段階の鉄釉水指である。5-48は中国製青花皿、5-86は同白磁碗である。高台は細く高く、壺付は釉が拭いとられており、16世紀後半に該当すると思われる。搦鉢は比較的多く出上している。5-57・58、183(図52)は、口縁が上方に伸び三角形に近い断面を呈し、5-59は外面に溝があり、いずれも第1段階と思われる。5-60～62、5-179(図52)は、口縁がやや下方にも伸びていることから第2段階に、5-65・66は第3段階に相当する。5-64・67は口縁上端が平坦になっているので第4段階とも思われるが、縁帯の幅は広い。底部から体部(5-68～73)は時期は特定できなく、近世のものを含む可能性もある。他には重圓皿、内禿皿や志野向付等がある。

常滑の製品は、壺、壺、鉢がある。5-49・51は壺、5-56はこね鉢、他は壺である。こね鉢は9型式、5-50～52は10型式、5-53は11型式、5-54・55は12型式に該当する。5-49の押印文のある壺は13世紀代である。15世紀後半から16世紀後半が中心である。

十筋皿は、ロクロ成形と手づくね(非ロクロ成形)の2種がある。非ロクロ皿は、5-74～80、直径5.6～6.4cm、外面全体に指頭圧痕がある。ロクロ皿は、5-81～84、直径は非ロクロ皿より大きく、7.6cmと11～12

cmで、直径の大きいものは口縁端部がやや外反している。土師器の鍋は、内耳鍋、羽付鍋、釜がある。5-87は唯一全形のおわかるもので、口縁部はやや内傾し、体部上部に沈線があり、底部外面はへら削りされ、底部と体部の境は明瞭である。5-95・99は口縁部が内傾し、体部の丸みが強い。他の内耳鍋も口縁部が内傾している。5-89・92・100は、内面に横方向のハケ目がよく残る。羽付鍋は全形のおわかるものはないが、5-101は跨り上の口縁部が比較的高い。鍋の破片は集中して出土し、胴部～底部の破片も多くある。復元はほとんどできていないが、底部と体部の境は不明瞭で丸みを持つものが多いように思われる。内耳鍋は、5-87が大窯第1段階、他は、第2～3段階に相当し、羽付鍋は第2～3段階頃に相当すると思われる⁽⁴⁰⁾。釜は凶化していないが、口縁部と耳の部分が出土している。

最下層から中国銭が5枚出土している。5-184から188まで順に重ねた状態であった。5-184は元祐通宝、5-185・188は聖宋元宝、北宋銭である。5-186は南宋の紹熙元宝、5-187は明銭の洪武通宝である⁽⁴¹⁾。最も新しい洪武通宝は14世紀代の初铸である。

石製品としては、安山岩製の茶臼の受皿部分(5-158)などが出土している。五輪塔、宝篋印塔は堀の底近くから出土している。5-159～161は五輪塔の水輪、5-162・163は五輪塔の地輪、5-164・165は石五輪塔の空～火輪、5-166は同風～火輪、5-168は宝篋印塔の相輪である。5-159は安山岩、5-167は砂岩、他は花崗岩である。時期は、5-163が16世紀後半、他は14世紀～16世紀に相当する。

近世(写真5-22～25)

瀬戸美濃陶磁器、肥前陶磁器、常滑陶器等が出土し、最も量が多いのは瀬戸陶器である。

5-109は人日茶碗、体部は比較的直線に開き、口縁は外反しており、第3小期に相当すると思われる。5-110～112は梅花文湯呑、花卉は白化粧土、芯や枝は鉄釉で描かれている。5-113は直径7cmほどの皿で、口縁端部が立ち上がっている。燈明皿と思われる。5-114は馬の日皿、5-115は、黄土色、緑色の釉を波文状に掛け分け、その上に瑠璃色の釉が掛かっている。胎土はにぶい橙色をしており、唐津の水盃と思われる。5-116は美濃鉄釉徳利である。5-117～119は乗燭、5-120は鉢の底部、5-121は長石釉に呉須絵の花瓶であろう。5-124は灰釉輪壳皿、第5小期に相当する。5-122は鍋、5-123は鉄壺の底部、5-127・128は土瓶、127は外面に鉄釉、128は内側上半分に褐色の釉が掛かっている。5-144～146はすり鉢である。144は第7小期、146は第9・10小期に相当する。5-147・149はねり鉢、147は内傾しているが口縁が体部から離れており第10小期に、149も同じと思われる。5-148は手水鉢、灰釉に上野釉とうのふ釉が掛かっている。5-150は灰釉水甕で第10小期、5-151は甕、頸部は直立し口縁部は外反している。5-152は常滑の甕口縁部、18世紀代のものと思われる。その他、凶化はしていないが、鉄釉茶入、急須、枯木鉢、瓶掛、エンゴロ等がある。

磁器は、肥前系、瀬戸美濃、その他がある。5-136・138・140・141・143は肥前系の製品と思われる。5-140は丸型段重、口縁上端と内側上部、底部端は釉が拭かれており、中段のものである。5-141は蓋、内側の五弁花はコンニャク判、5-143は色絵の御神酒徳利である。5-140・143には焼窯があるが、18世紀代の製品と思われる。5-129・131・133・134・139は瀬戸の製品である。

5-126はホウロク、口縁端部が内側と上方に伸びている。18世紀前半代にあたる。5-177は土師皿である。にぶい赤褐色を呈し底部はやや突出している。

SK01

土師器甕片が出土している。

SK02

土師器、須恵器片が出土している。図29の5-5は甕、5-17は須恵器で受け口状の口縁を持ち、体部にはタキがあり、鉢と思われる。

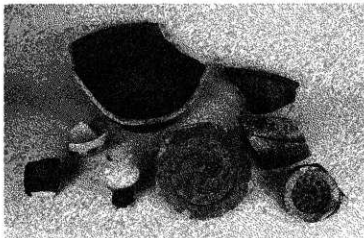
その他出土(写真5-26)

5-153・154は堀の東側地山上で出土した土師器皿である。非ロクロづくりで内側はなでている。5-155～157は表土から出土した。5-155は灰釉大皿、口縁は水平方向に折れ端部はやや尖っている。5-156・157は播鉢、156には「㊦」の印がある。これらは19世紀代の瀬戸の製品である。

立合調査出土(写真5-27)

5-169～176は下水道工事の立合調査時に出土した遺物である。5-169は人目茶碗、高台周囲は露胎である。5-170は伊万甲染付碗である。コンニャク判で、外面底部に禍福の銘があり、18世紀前半代の製品である(註1)。5-171は美濃の仏花瓶、鉄釉と灰釉が施されている。5-172の播鉢は登窯第6小期に相当する。5-173・174は常滑鉢と甕、いずれも真焼である。173の鉢は上部に突帯を巡らすもので、17世紀末頃と思われる。

なお、立合調査の場所は、古鳴海停車場線と旧東海道の交差点から50m程北側の道路(古鳴海停車場線)中央部で、遺物は、道路面より約1.2m下の青灰色砂質土から出土している。



立合調査出土遺物

註1 名古屋市教育委員会『鳴海庵寺発掘調査概要報告書』によれば、軒丸瓦には、尾張国分寺と同型のものや鳴海庵寺固有のものとの2型式がある。固有の型式は、複弁5葉と甲弁1葉とからなる蓮華文を持ち、外区に比べ内区が狭く、そのため蓮華文も中房も小さく、中房に4個の蓮子を配す。互当正面右上の弁間に斜の細い線が表現されている。面径は14cm強のものと16cm弱のものとがあり、前者が多いという。今回出土の5-19の面径は約14cmである。

註2 鈴木正貴『戦国時代における尾張型煮炊具の歴史的様相』考古学フォーラム4によれば、尾張型煮炊具の鍋は法量差によって階層制が具現化されており、この煮炊具様式は集落構成の変動に対応して成立したものと考える。とあり、それに従って鳴海城出土の鍋(口径の測定できるものは12点)は、鍋B a類(口径27cm以上)は2点、鍋B b類(口径21～26cm)は8点、鍋B c類(口径20cm以下)は0点、鍋A類(口径40cm前後)は2点であり、鍋B b類が圧倒的に多いが、鍋Aの実際の割合は同化点数からもっと高くなるため、この地は大きな鍋を使用する集団規模の大きい居住空間であったといえる。

註3 櫻木晋一 1998『洪武通寶の出土と成分組成 季刊考古学第62号』によれば、今回出土の洪武通寶は、径銭が2.4cmで通の字のつくり上部がマとなっている「マ通タイプ」と思われる。

註4 佐賀県立九州陶磁文化館『国内出土の肥前陶磁』に掲載されている、宇治折西遺跡(京都府教育委員会)から出土している伊万甲染付碗と同じ模様の判と銘である。それによると、1700～1750年代の製品という。

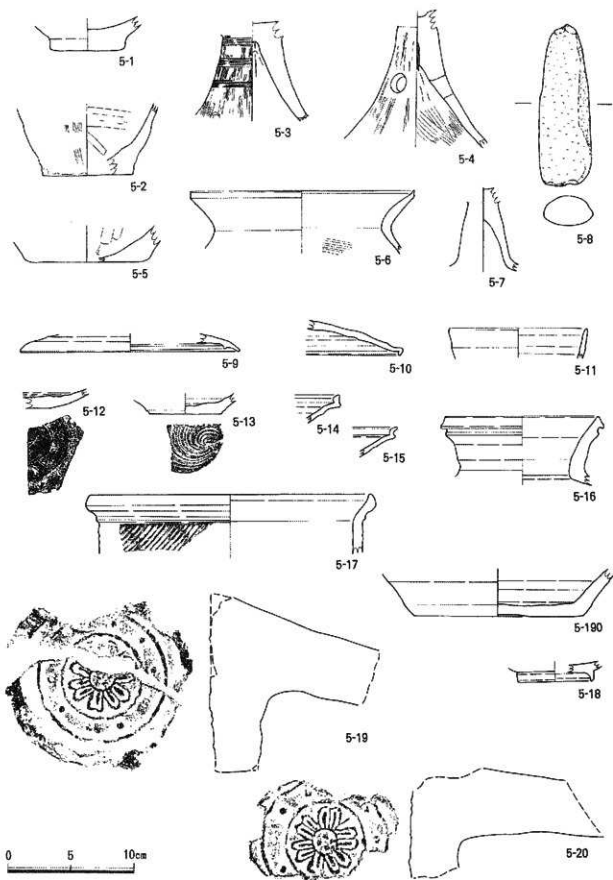


图29 第5次出土遺物(1)

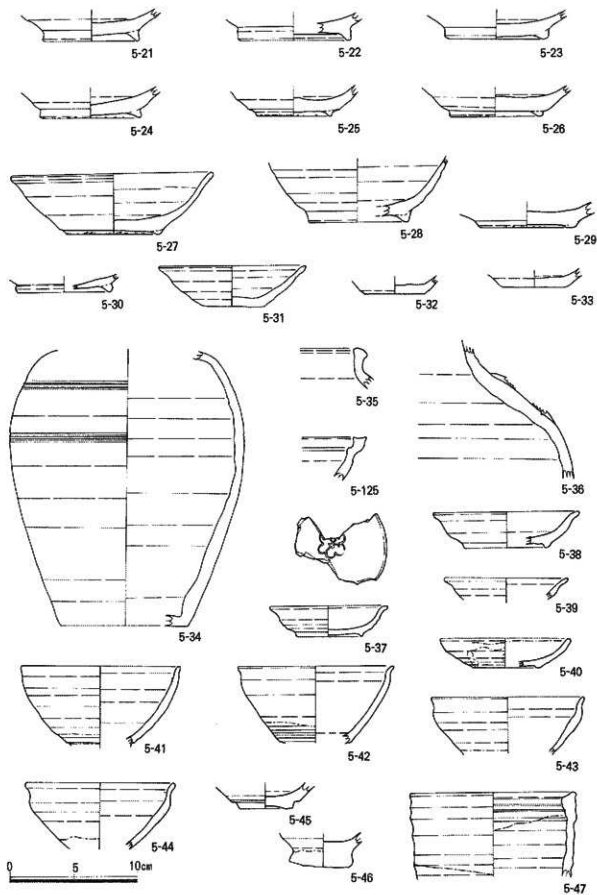


图30 第5次出土遺物(2)

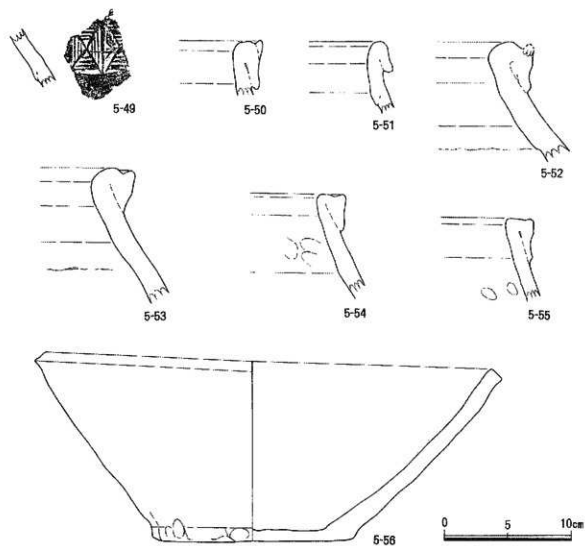


图31 第5次出土遺物(3)

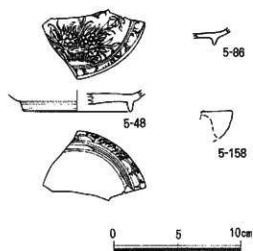


图32 第5次出土遺物(4)

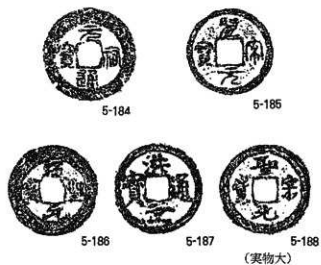


图33 第5次出土遺物(5)

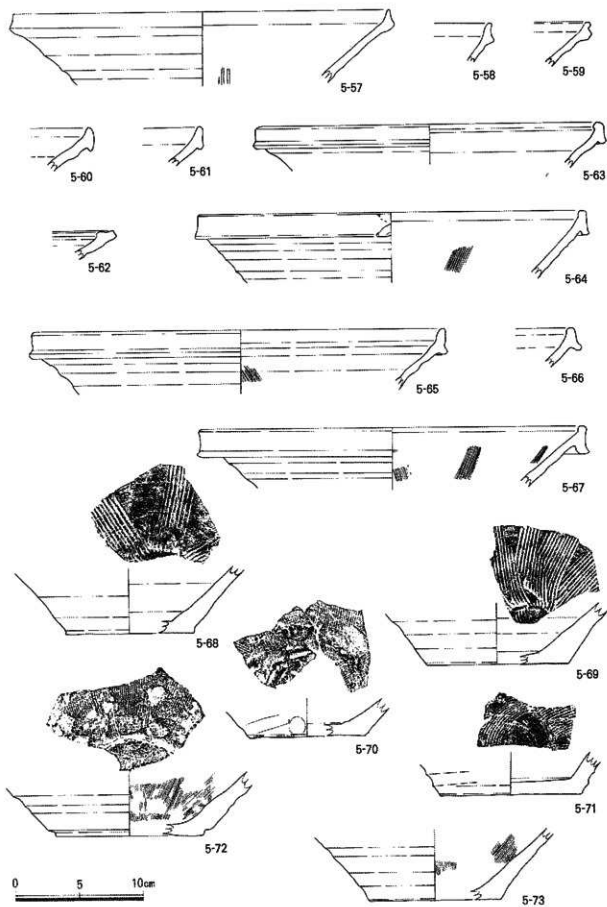


图34 第5次出土遺物(6)

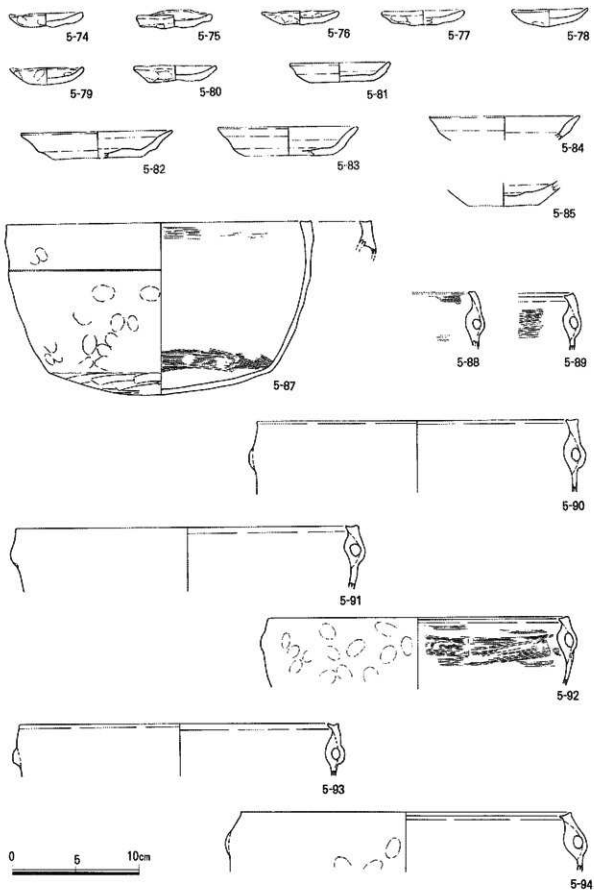


圖35 第5次出土遺物(7)

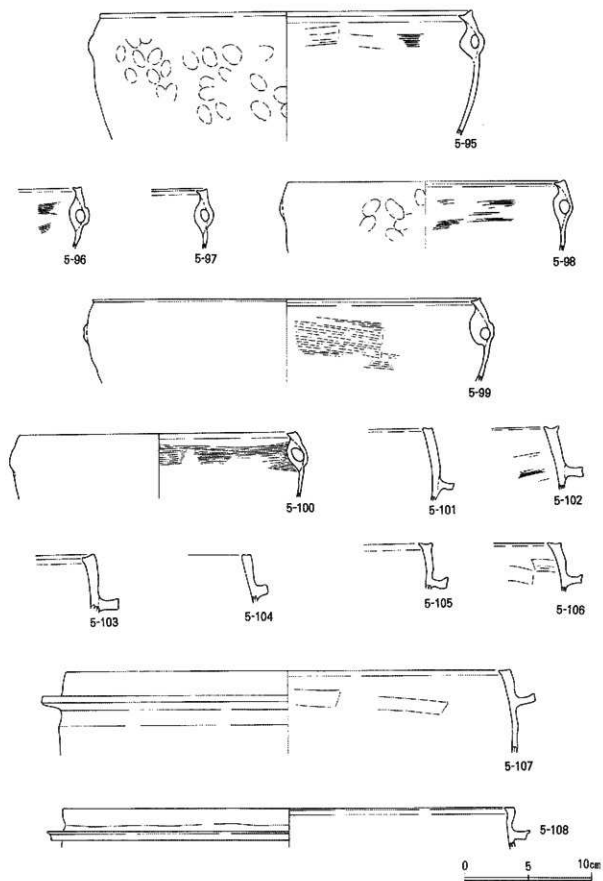


图36 第5次出土遺物(8)

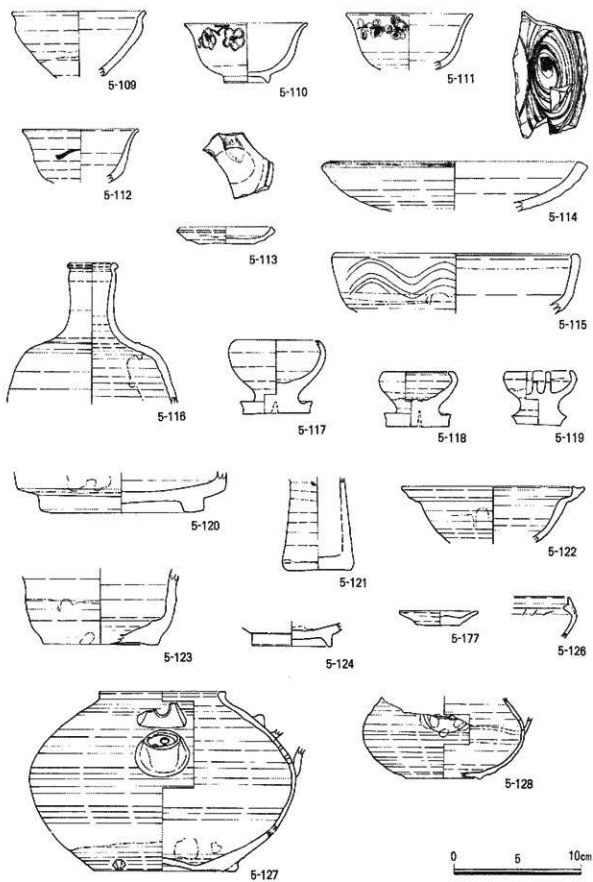


图37 第5次出土遺物(9)

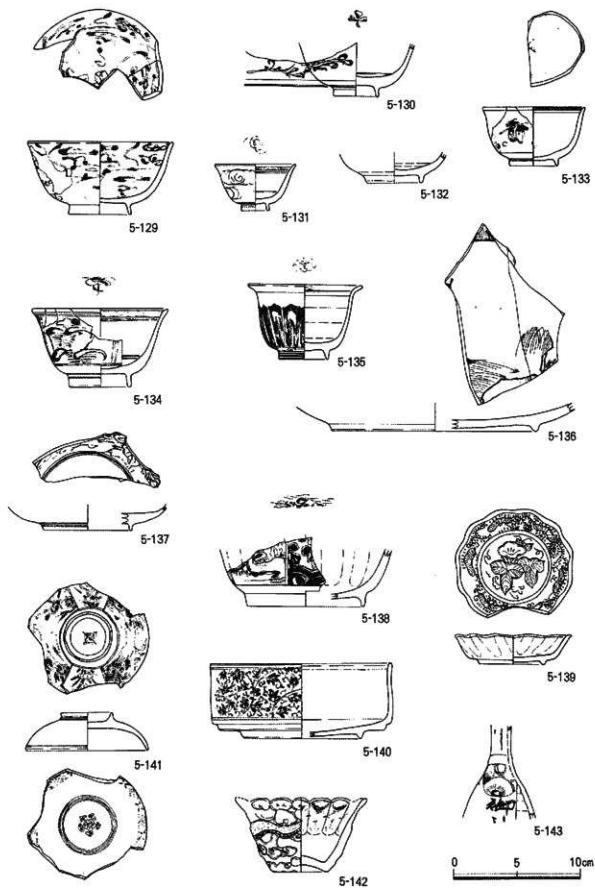


图38 第5次出土遺物 100

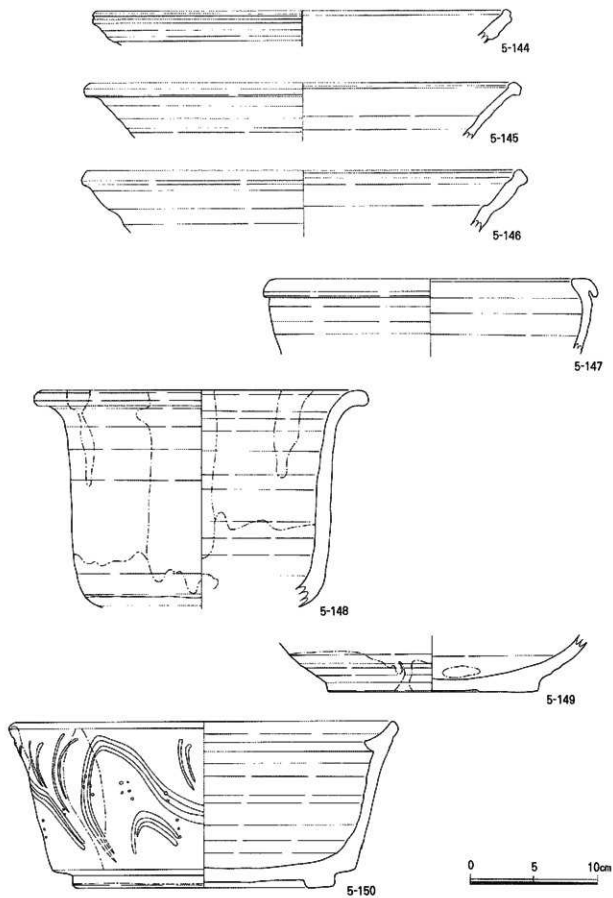
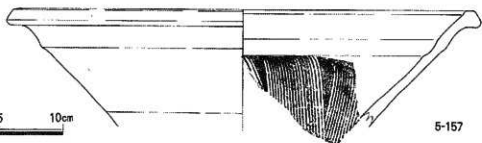
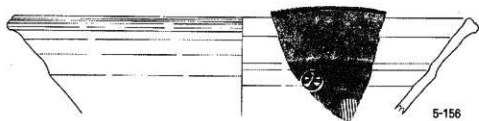
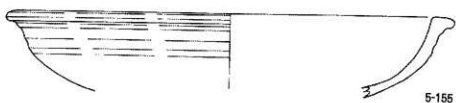
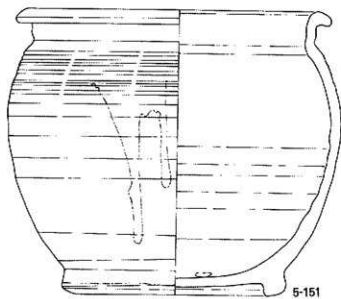


图39 第5次出土遺物 (1)



0 5 10cm

図40 第5次出土遺物 (12)

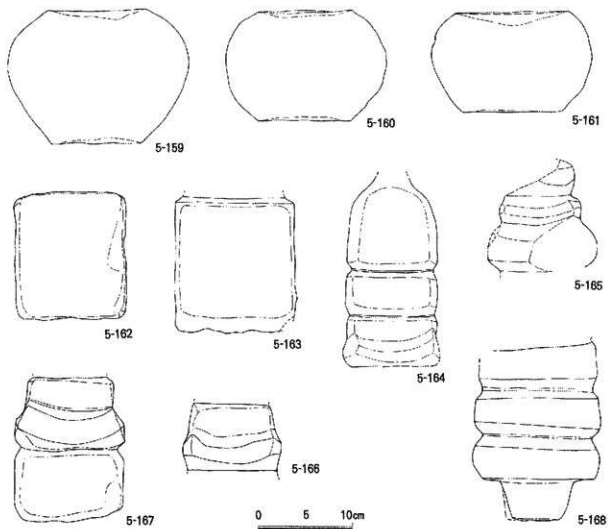


图41 第5次出土遺物 ⑬

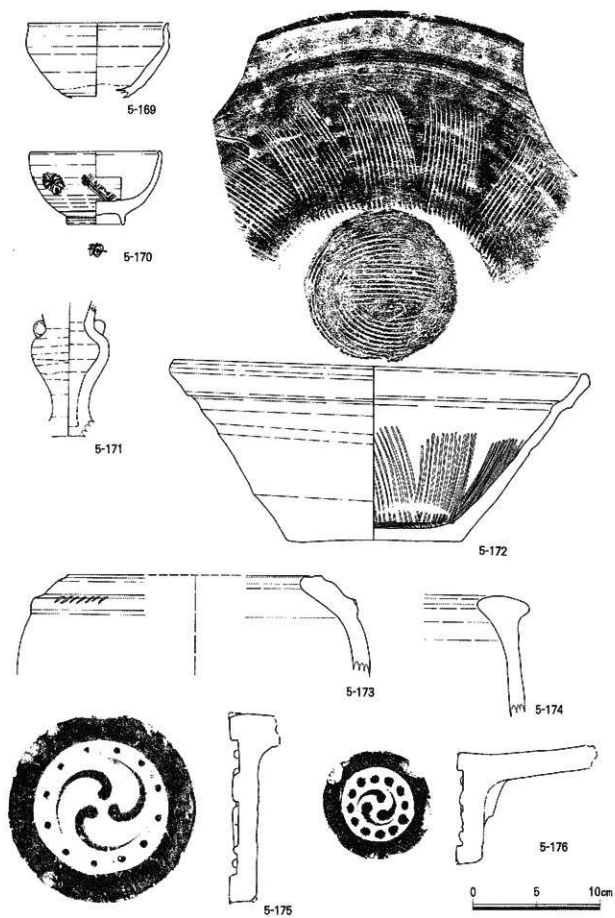
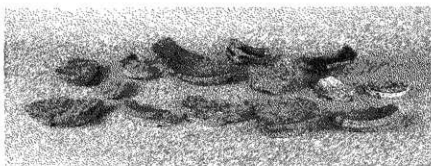
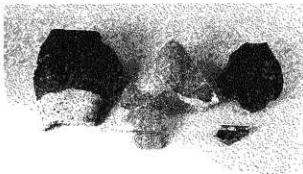


图42 立合調査出土遺物

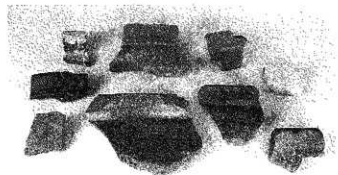
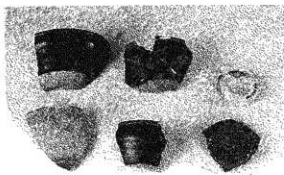
5-4



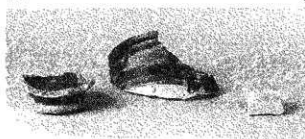
5-5



5-6



5-7



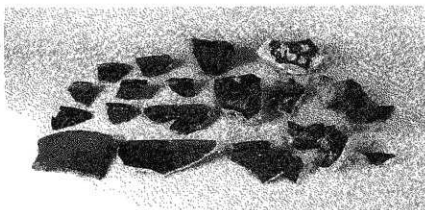
5-9

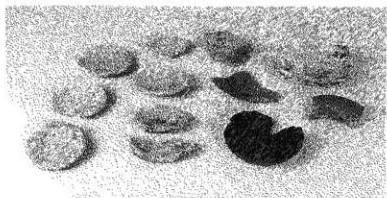


5-8

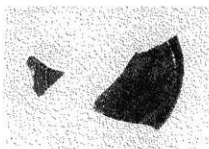
5-10

5-11

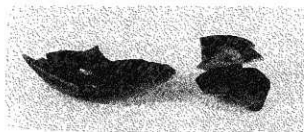




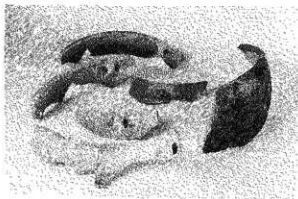
5-12



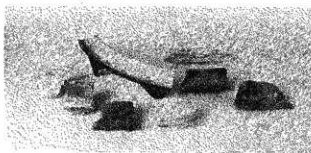
5-16



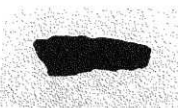
5-13



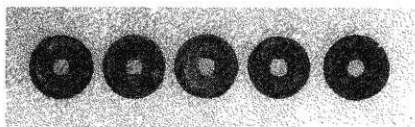
5-14



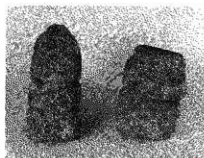
5-15



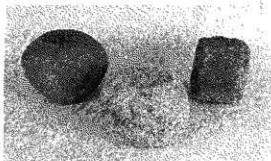
5-17



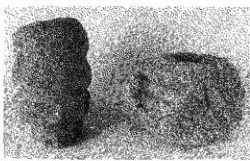
5-18



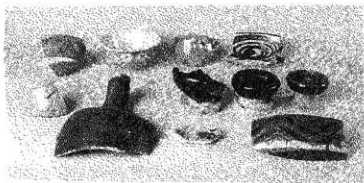
5-20



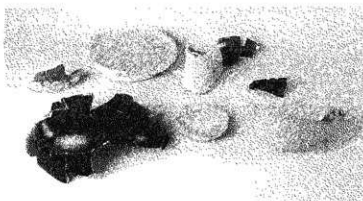
5-19



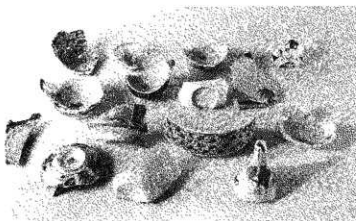
5-21



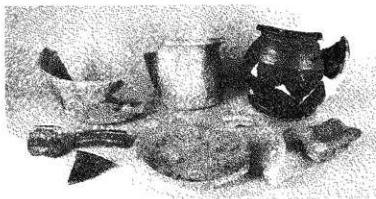
5-22



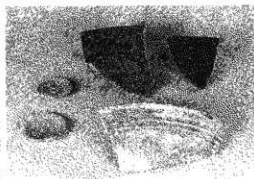
5-23



5-24



5-25



5-26

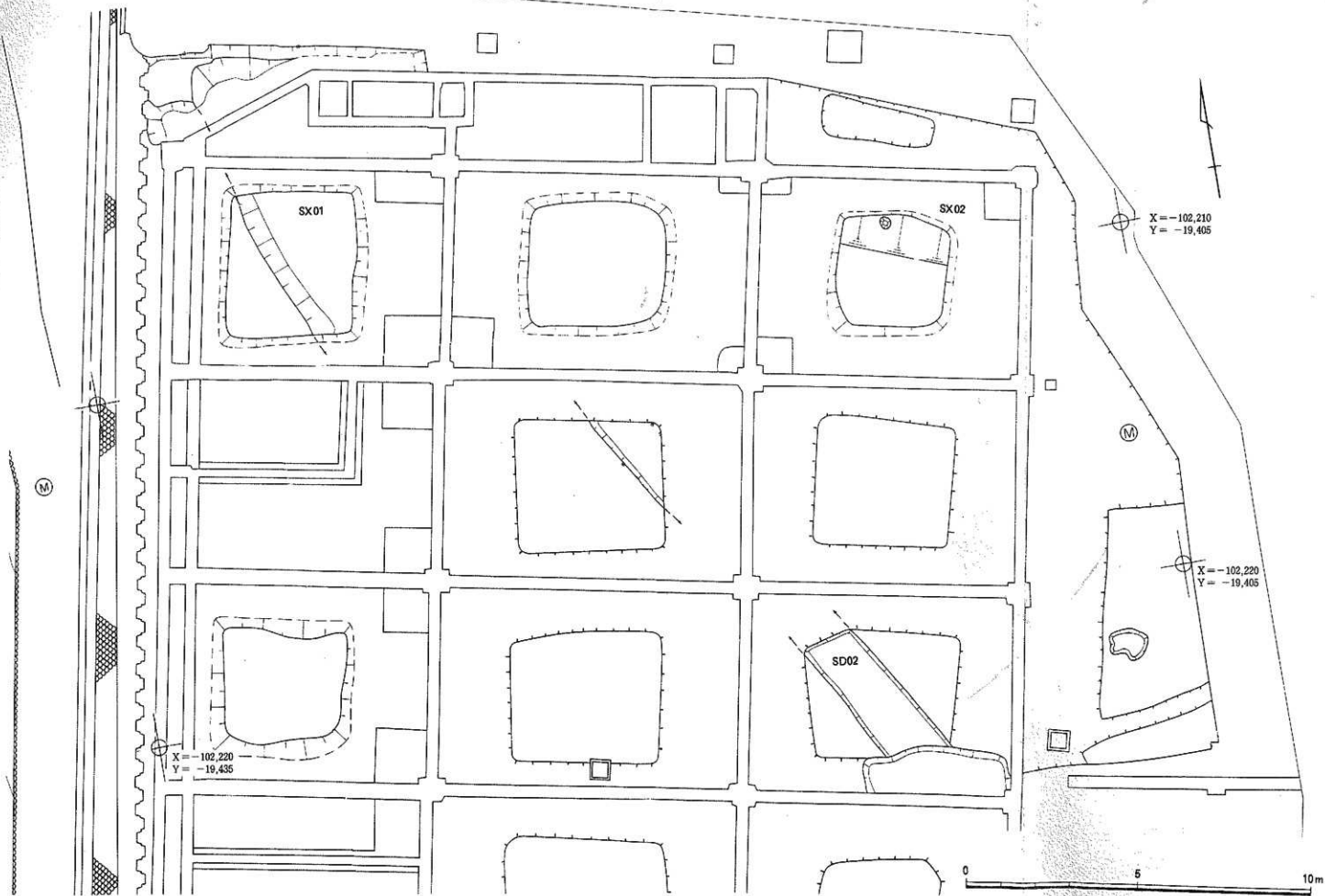


图43 A区遺構図

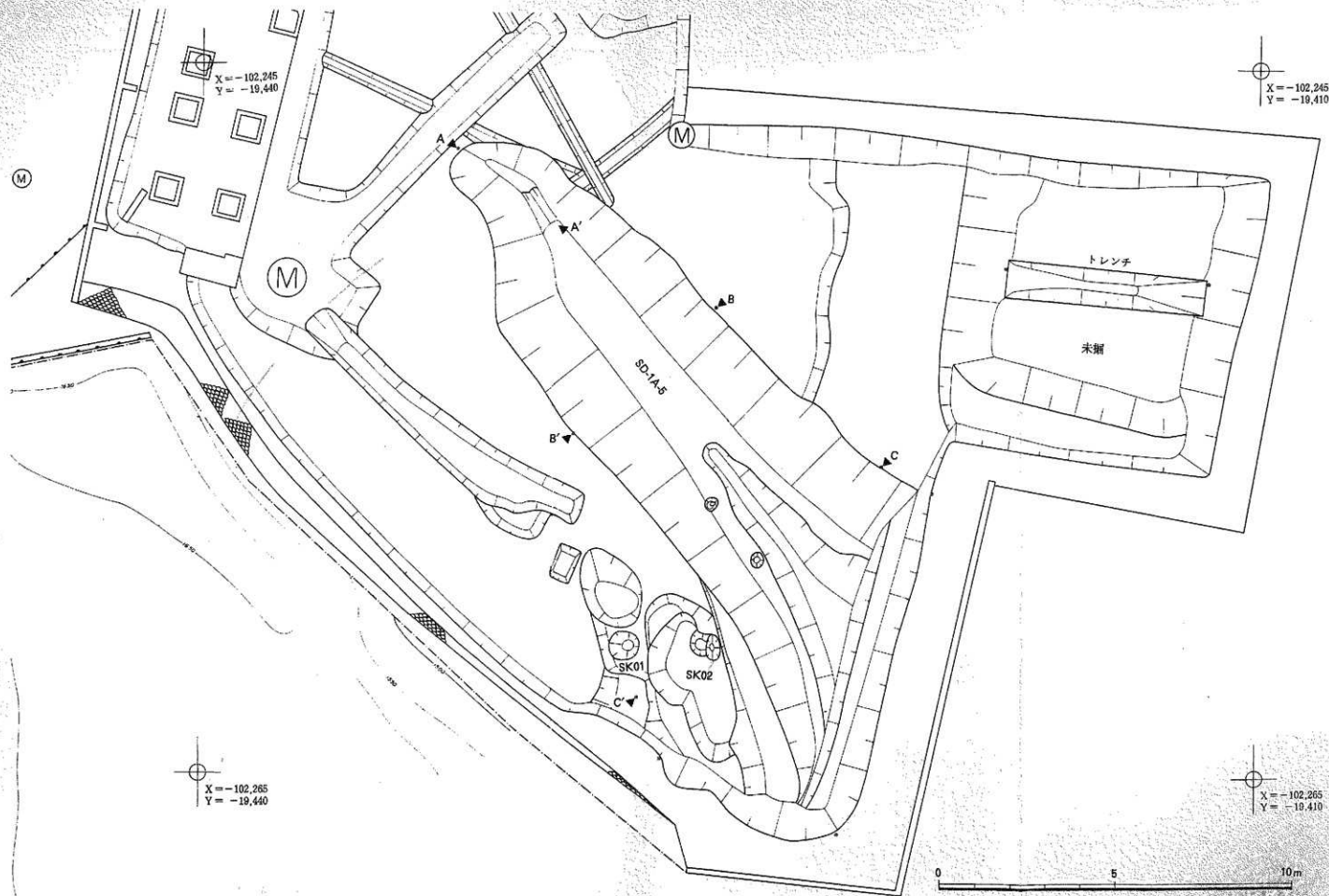


図44 B区遺構図

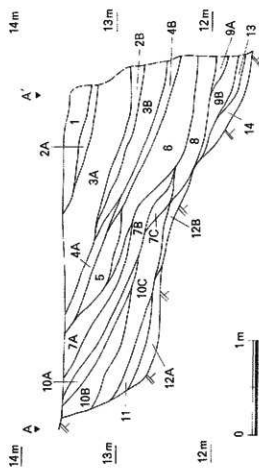


図45 SD-1A-5 (西端壁)土層断面図

- 1 灰褐色土：1～2 cmの灰色シルト粒に、0.2～0.5mmの灰色砂粒や褐色シルト粒が混じり合う。
- 2A 褐色土：0.5～1 cmの褐色シルト粒に灰褐色土粒が混じり、0.5～1 cmの礫が多く含まれる。
- 2B 褐色土：2Aより粗、褐色シルト粒が多く混じり、礫がさらに多く含まれる。
- 3A 灰褐色土：0.2～0.5mmの灰色砂粒と褐色シルト粒が混じり合い、0.5～1 cmの礫が多く含まれる。
- 3B 灰褐色土：3Aと同質し、1～5 cmの礫が多く含まれる。
- 4A 赤褐色シルト質土：1～2 cmの灰色シルト粒に、0.2～0.5mmの灰色砂粒と褐色シルト粒が混じり合い、1～2 cmの礫が少量含まれる。
- 4B 赤褐色シルト質土：4Aより、1～2 cmの灰色シルト粒が多く混じり、0.5cm以下の礫が含まれる。
- 5 灰褐色土：0.5cm以下の灰褐色土粒と褐色砂粒が混じり合い、0.2～0.5mmの礫が少量含まれる。
- 6 赤褐色土：0.5～1 cmの灰色砂粒と褐色シルト粒が混じり合い、2～8 cmの礫が多数に含まれる。
- 7A 暗灰褐色土：0.5cm以下の灰褐色土に、0.2～0.5mmの褐色土粒や黒褐色土粒が混じり合い、0.5cm以下の礫が多く含まれる。
- 7B 暗灰褐色土：7Aに類似するが、0.5cm以下の褐色土粒が多く含まれ、褐色が濃い。

- 8 灰褐色砂粒土：0.5～1 cm以下の灰褐色砂粒に灰色シルト粒が少量混じり合い、2～3 cmの礫が多く含まれる。
- 9A 暗灰褐色土：1 cm以下の灰褐色シルト粒と褐色土粒が混じり合い、2～8 cmの礫が多く混じり、2～3 cmの礫が少量含まれる。
- 9B 暗灰褐色土：9Aに類似するが、1～2 cmの灰褐色シルト粒が含まれる。
- 10A 暗褐色土：0.5～1 cmの褐色土粒と0.5mm以下の黒褐色土粒が混じり合う。
- 10B 暗褐色土：0.5cm以下の褐色土粒と0.5～1 cmの黒褐色土粒が混じり合い、10Aより褐色が濃い。
- 10C 暗褐色土：0.5cm以下の黒褐色土粒に少量の褐色土粒が混じり、10Bより褐色がさらに濃い。
- 11 赤褐色土：0.5～1 cmの灰褐色土粒に、0.2～0.5mmの灰色シルト粒や黒褐色土粒が少量混じり合う。
- 12A 暗灰褐色シルト質土：0.5～1 cmの灰褐色土粒に0.5cm以下の褐色土粒が混じり、0.5cm以下の礫が少量含まれる。
- 12B 暗灰褐色シルト質土：12Aより、0.2～0.5mmの褐色土粒が多く混じり、褐色が濃い。
- 13 灰褐色土：0.5～1 cmの黒褐色土粒に0.5cm以下の灰褐色土粒が少量混じり、1 cm以下の礫が少量含まれる。
- 14 暗褐色土：0.5～1 cmの褐色土粒に褐色シルト粒が少量混じり、1 cm以下の礫が混じり、1 cm以下の礫が少量含まれる。

14m B

8' 14m

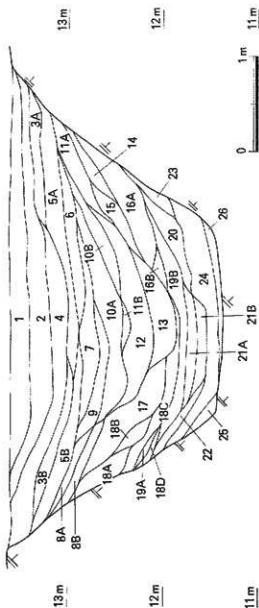
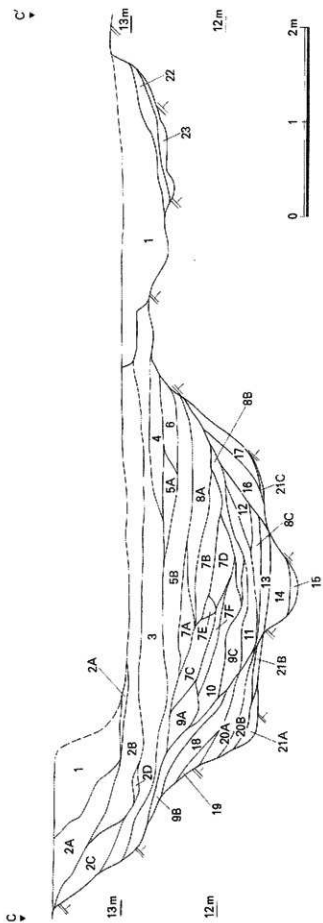


図46 SD-1A-5 (西側壁)土層断面図

- 1 灰褐色土: 0.2~0.3cmの灰褐色砂粒と褐色シルト粒が混じり合い、1cm以下の層が含まれる。
- 2 褐色土: 0.2~0.3cmの灰褐色砂粒や褐色シルト粒が混じり合う。
- 3A 灰褐色土: 0.5~3cmの褐色シルト粒と層が混じり合い、0.3cmの灰褐色土層が少量含まれる。
- 3B 暗褐色土: 0.3~0.3cmの褐色シルト粒と層が混じり合う。
- 4 暗灰褐色土: 褐色土は、0.5cm以下の灰褐色砂粒と褐色シルト粒が多く混じり合い、1cm以下の層が多く含まれる。
- 5A 暗灰褐色土: 4より、0.5cm以下の褐色土層が多く混じり灰褐色が濃い、1cm以下の層が多く含まれる。
- 5B 暗灰褐色土: 5Aより、褐色土層がさらに多く混じり、1~2cmの層が多く含まれる。
- 6 暗灰褐色土: 1cm以下の褐色土層と褐色シルト粒が混じり、2~3cmの褐色シルト粒が少量含まれる。
- 8A 暗褐色土: 0.5cm以下の褐色シルト粒と褐色土層が混じり合い、0.2~0.5cmの層が多く含まれる。
- 8B 暗褐色土: 0.2~2cmの褐色シルト粒と褐色土層が混じり合い、1~2cmの層が多く含まれる。
- 9 暗灰褐色土: 5Bより、褐色土層が多く混じり、さらに灰褐色が濃い。
- 10A 灰褐色土: 0.2~2cmの灰褐色砂粒と褐色シルト粒が混じり、0.5cm以下の層が含まれる。
- 10B 灰褐色土: 0.2~0.5cmの灰褐色砂粒と褐色シルト粒が混じり、0.5~1cmの層が多く含まれる。
- 11A 暗灰褐色土: 0.5cm以下の灰褐色砂粒と褐色シルト粒が混じり、0.2~0.5cmの層が含まれる。
- 11B 灰褐色土(砂質): 0.2cmの灰褐色砂粒と褐色シルト粒が混じり合い、2~4cmの層が多く含まれる。
- 13 暗灰褐色土: 1cm以下の暗褐色土層に、1~3cmの層が多く含まれる。
- 14 暗灰褐色土: 1~2cmの暗褐色シルト粒に、1cm以下の層がほとんど混じり、0.3~0.5cmの層が多く含まれる。
- 16A 暗灰褐色土: 0.2~0.5cmの暗褐色シルト粒と褐色シルト粒が混じり合う。
- 16B 暗灰褐色土: 0.2~0.5cmの暗褐色シルト粒と褐色土層が混じり合い、0.5~1cmの層が多く含まれる。
- 18A 暗褐色土: 0.2~0.5cmの暗褐色土層と褐色土層が混じり、0.3~1cmの層が多く含まれる。
- 18B 暗褐色土: 0.5cm以下の暗褐色土層と褐色土層が混じり、0.2~0.5cmの層が少量含まれる。
- 18C 暗褐色土: 0.5cm以下の暗褐色土層に、0.2~0.3cmの暗褐色土層が混じり合う。
- 19A 暗褐色土: 0.5cm以下の暗褐色土層に、0.2~0.5cmの暗褐色土層が少量含まれる。
- 19B 暗褐色土: 1cm以下の暗褐色シルト粒に、0.2~0.5cmの灰褐色土層が少量混じり、0.3~1cmの層が多く含まれる。
- 21A 暗灰褐色土(粘質): 暗灰褐色シルト粒に、0.2~0.5cmの暗褐色土層が少量混じり、0.3~1cmの層が多く含まれる。
- 22 暗褐色土: 0.2~0.5cmの暗褐色土層に、褐色土層が少量混じり、0.3~1cmの層が多く含まれる。
- 24 暗灰褐色土(粘質): 21Aより、灰褐色土層が混じり、0.2~0.5cmの層が少量混じり、0.2~0.5cmの層が多く含まれる。
- 25 暗褐色土: 0.5cm以下の灰褐色砂粒と褐色土層が少量混じり、0.2~0.5cmの層が多く含まれる。
- 26 暗灰褐色土: 25に類似し、砂分の含量が見られる。



1 : 現代の堆積土と想定される層位

2A~6 : 石期から近世までの埋め土と想定される層位

7A~12 : 戦国から近世までの埋め土と想定される層位

13~15 : 縄文時代の埋め土と想定される層位

16~21 C : 戦国の埋め土と想定される層位

図47 SD-1 A-5(中央)土層断面図

S.D-1A-5(中央部-C')土層断面土層注

- 1 暗灰褐色土: 0.5~2cmの灰色砂粒や褐色土粒が混じり合い、1~3cmの砂石やコンクリートが含まれる。
- 2A 褐色(砂質)土: 0.2~0.5cmの灰色砂粒に褐色シルト粒が混じり、0.5cm以下の礫が多く含まれる。
- 2B 褐色(砂質)土: 2Aよりも、多くの砂が混じり、0.5cm以下の礫が含まれる。
- 2C 褐色(砂質)土: 2Aよりも、礫が多く含まれ、褐色が深い。
- 2D 褐色土: 0.5~3cmの褐色シルト粒と灰色砂粒が混じり合う。
- 3 褐色土: 0.2~0.5cmの灰色砂粒と褐色土粒が混じり合い、0.5~2cmの礫が多く含まれる。
- 4 灰褐色(砂質)土: 0.2~0.5cmの灰色砂粒と0.5~1cmの褐色土粒が混じり合う。
- 5A 暗灰褐色土: 0.5cmの褐色土粒が多く混じり合い、褐色が深く、0.5cm以下の礫が少量含まれる。
- 5B 暗灰褐色(シルト質)土: 5Aより、0.5cm以下の褐色土粒にさらに多く混じり合い、1~2cmの礫が含まれる。
- 6 褐色土: 0.2~0.5cmの褐色土粒に、0.5~3cmの棕色シルト粒が混じる。
- 7A 暗褐色土: 0.5~1cmの棕色シルト粒と褐色土粒が混じり、0.5~1cmの礫が少量含まれる。
- 7B 暗褐色土: 1~2cmの棕色シルト粒に1cm以下の褐色土粒が混じり合う。1cm以下の礫が少量含まれる。
- 7C 暗褐色土: 0.5~2cmの棕色シルト粒と褐色土粒が混じり合い、0.5~2cmの礫が含まれる。
- 7D 暗褐色土: 2~3cmの棕色シルト粒に灰褐色土粒が混じる。0.5~1cmの礫が多く含まれる。
- 7E 暗褐色土: 0.5~1cmの棕色シルト粒に褐色土粒が混じる。0.5~1cmの礫が少量含まれる。
- 7F 暗褐色土: 0.5cmの棕色シルト粒に褐色土粒が混じる。0.2~0.5cmの礫が少量含まれる。
- 8A 黄灰褐色土: 0.2~0.5cmの淡黄褐色砂粒と棕色シルト粒に、灰褐色土粒が混じる。
- 8B 黄灰褐色土: 0.2~0.5cmの淡黄褐色砂粒と棕色シルト粒に、灰褐色土粒が多く混じる。
- 8C 黄灰褐色土: 0.2~0.5cmの淡黄褐色砂粒に、0.5cm以下の褐色土粒が少量混じる。
- 9A 褐色土: 0.5cm以下の灰褐色土粒と褐色土粒が混じり合い、2~3cmの礫が多く混じる。
- 9B 褐色土: 0.5cm以下の灰褐色土粒と褐色土粒が混じり合い、0.2~0.5cmの棕色シルト粒が含まれる。
- 9C 褐色土: 9Bより、褐色土粒が多く混じり褐色が深く、0.2~0.5cmの棕色シルト粒が含まれる。
- 10 暗灰褐色(シルト質)土: 0.5cm以下の灰褐色土粒と黒褐色土粒が混じり合い、1~2cmの礫が多く含まれる。
- 11 暗褐色土: 1cmの棕色シルト粒に少量の褐色土粒が混じり、0.5~2cmの礫が多く含まれる。
- 12 暗灰褐色土: 10より、灰褐色土粒が多く混じり、色調が深い。
- 13 暗灰褐色土: 0.2~0.5cmの灰褐色土粒や黒褐色土粒に、褐色土粒が混じり合う。
- 14 暗灰褐色(粘質)土: 暗灰褐色シルト粒に、0.5~1cmの礫が少量混じる。
- 15 暗灰褐色(粘質)土: 14より、褐色土粒やや多く混じり、1~2cmの礫が多く混じる。
- 16 黄灰褐色土: 0.2~0.5cmの淡黄褐色砂粒に、灰褐色土粒が少量混じり、1cmの礫が含まれる。
- 17 暗褐色土: 0.5~1cmの棕色シルト粒に、0.5cm以下の褐色土粒や灰褐色土粒が少量混じり、0.5~1cmの礫が多く含まれる。
- 18 黒褐色土: 0.2~0.5cmの灰褐色土粒や黒褐色土粒に、褐色土粒が混じり合い、0.5~1cmの礫が多く含まれる。
- 19 暗褐色土: 0.5~1cmの棕色シルト粒に、灰褐色土粒が少量混じり、1cm以下の礫が多く含まれる。
- 20A 黒褐色土: 18と類似するが、0.5~1cmの棕色シルト粒が少量混じり、黒色がやや深い。
- 20B 黒褐色土: 0.2~0.5cmの灰褐色土粒や黒褐色土粒に、褐色土粒が多く混じり合い、黒色が深く、0.5cm以下の炭化物が含まれる。
- 21A 淡褐色(砂質)土: 0.2~0.5cmの灰色砂粒と褐色土粒が混じり合う。
- 21B 淡褐色(砂質)土: 0.5cm以下の灰色砂粒と褐色土粒が混じり合う。
- 21C 淡褐色(砂質)土: 21Bより、0.5cm以下の灰色砂粒が多く混じり、1cm以下の礫が含まれる。
- 22 黒褐色土: 0.5cm以下の黒褐色土粒に、褐色土粒が混じる。
- 23 黒褐色土: 22に類似し、褐色土粒が多く混じり、1cm以下の礫が少量含まれる。

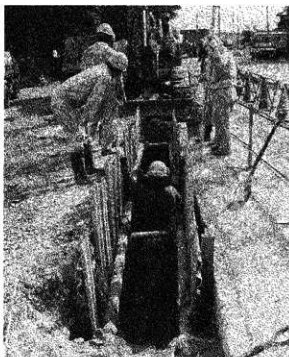


図48 第1～3・5・7次調査の遺構集成図

第7章 第6次調査

(1) 調査経過

本調査地点において下水管の埋設工事が行われることになったことから、ここが『古城絵図』に記された二の丸を区画する堀の北東コーナー部分にあたる事が想定されたため、9月17日から24日までの間、緊急に発掘調査を行った。調査の実際は、工事の進行状況に即して必要の都度、工事を中断した上で記録作業を行うという変則的な調査方法で対応した。



調査風景

(2) 調査概要

調査区の北側では、雨水管やガス管などが埋まっていたために攪乱が著しく、道路面から地山層と考えられる7層(淡黄褐色砂礫層)までの約1mの間、遺物包含層等は全く認められなかった。

調査区の南側では、北側から続く地山層のラインが南端から約4m北側の位置で急激に落ち込んでいることが確かめられた。道路面から約1mで攪乱層が終わり、以下、4層から6層まで遺構内の埋積土層と考えられる砂礫層が認められた。しかしながら、出土遺物は1点として認められていない。なお、深さ2mを超えて調査を続けることは、工事との兼ね合いから断念せねばならず、遺構の規模・形状を伺うことや、出土遺物を得ることはかなわなかった。

調査区南端で認められた遺構は、確認面での堀が4mを優に超える規模であることや、過日(平成10年8月)に行われた本調査区の南側に隣接する位置での立会調査に際しても、堀の埋土と想定される土層から土銅片が出土していることから、2次調査のA区で検出された堀(SD-2-2A)の続きであることがわかる。また、本調査地点の県道から枝分かれして東南に向かう市道地内での立会調査(平成10年8月)では、道路面直下で地山面を確かめていることなどを考え併せると、本調査区南端の位置をもって、『古城絵図』に記された二の丸を区画する堀の北東コーナー部分に当たることが確実なこととなった(図28参照)。

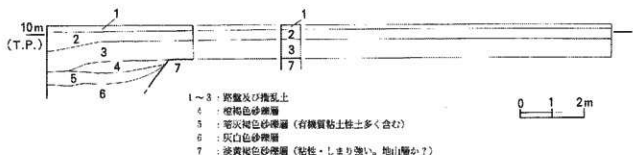


図49 土層断面図(西壁)

第8章 第7次調査

(1) 調査経過

第7次調査は、城跡公園の東側で、公園通路およびその東側の道路工事に伴い、平成10年10月12日から実施した。調査面積は約130㎡である。道路盤への影響を考慮して堀の完掘はせずに、道路盤掘削の深さや公園東側の土留め石垣設置の掘削盤の深さまでを掘り下げて、本丸の東側堀(内堀)の南端付近を検出した。遺物は発見されなかった。

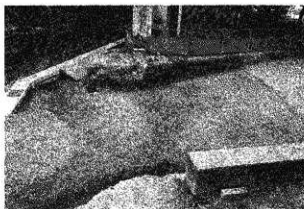


堀跡：SD-1-7南端付近(北東から)

(2) 遺構

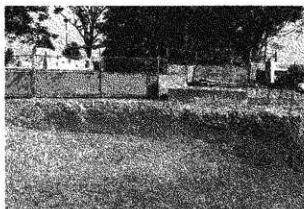
堀跡 (SD-1-7)

堀の西端上端は、調査区西側の公園内の通路設置予定地内で、地表面から約5cm掘り下げると、黄褐色シルト質(礫混じり)土が露呈し、この面で検出された。また、東側上端は、土留め石垣設置の掘削盤深さまで、調査区の北側で地表面から約60cmを掘り下げると、その一部が検出された。この付近は旧下水道による破壊が、堀上端に沿うように両西方向へ著しい状態であった。調査区南側の道路内で、堀の東側上端と南端部分が、道路面下約10cmの地山面で確認された。検出面での堀の埋土は、褐色土と黄褐色土等の地山土が混じる状態であることから、公園の造成や道路工事等により堀が埋め戻されたものと判断された。



堀跡：SD-1-7(北から)

両側検出の上端から推測される堀の最大幅は、約9mである。



北壁断面

この堀の南側に、崖地形から北東方向に掘られた、別の堀跡が旧地形のまま残存している。その推定幅は、上端が標高16m付近と推測できることから、約10mと思われる。この堀と検出した堀(内堀)の南端との間に、本丸から東方へ出入りする、2m程の「土橋」が造られていたと判断される。この付近で現況道路と旧地形を残す南側地形との高低差は約2mあり、その差分程が道路工事等により削平されていると思われる。

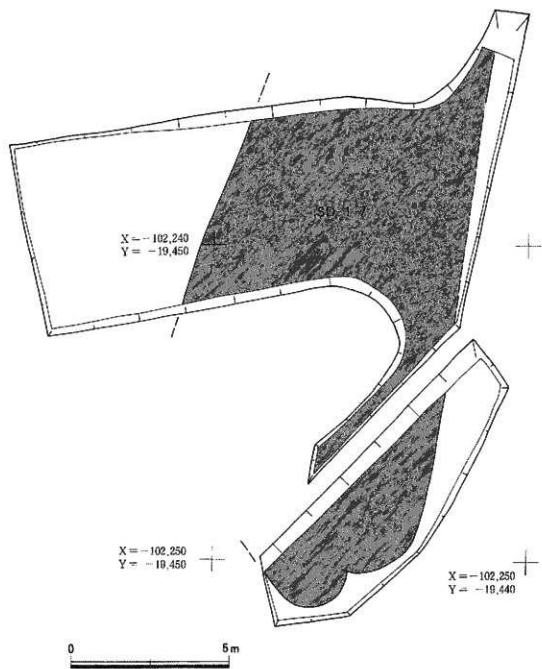


图50 遺構図

第9章 まとめ

鳴海城は、鎌倉街道の南西側の交通要地に、安原備中守宗範の城館として、応永年間(1391~1428)頃に築城されたと伝えられる。その後、戦国時代に重要な城としての役割を果たすことになり、織田方と今川方の攻防にあって、天文年間の頃、山口左馬助と九郎次郎父子が居城し、天文22年(1553)に赤塚の地で織田信長と戦っている。また、桶狭間の合戦(1560年)で、岡部五郎兵衛尉元信が居城し、織田方との攻防に重要な役割を果たした。この後、織田方の佐久間信盛が城主となり、天正8年に佐久間氏が改易となった後、廃城となっている。

江戸時代に、東海道筋の交通路が整備されるに従い、尾張藩にとっても重要な城郭跡の一つとなった。尾張藩では、藩内の各街道筋やその周辺に位置する古城跡を把握する目的から、その詳細な絵図を作成している。『古城絵図』に表現される城郭は、その残存状態もかなり良好な城であり、他国からの侵攻に備える軍事的な施設として再利用することができるように、その残存状況や古城と街道や「名古屋城」との関係等が詳しく記載される。また、当時、有事に備える軍学的な視点から、屋敷跡、寺院や神社、さらに古井戸などの位置が記述されたものと考えられ、城としての機能を保持する古城についての記述は、測量の成果による内容を含めてかなり正確なものであったと推測される。鳴海城の場合も、『愛知郡鳴海村古城絵図』が作成されて、東海道沿いに新たな町屋が増えるものの、城の形状は保存されてきた。

これまでの発掘調査の結果、『古城絵図』に記載される堀跡の一部分を発見した。発見された堀の形状と、調査地点付近で『古城絵図』に記載された内容を比較すると、次のようになる。

(調査結果)

堀跡名	幅	深さ
SD-1-7	(推定)約9m	—
SD-1 A-1	(推定)約10m	—
SD-1 A-5	約6m	約2.8m
SD-2-2A	約7.5m	約2.2m
SD-2-2BN	約5m	約1.8m
SD-2-2BS	—	約2m
SD-2-3	—	約2.5m
SD-2-6	—	—
SX-2	—	約1.4m
SD-3-4	(推定)約8m	約1.2m

(古城絵図)

幅	深さ
六間(約10.8m)	式間(約3.6m)
四間(約7.2m)	壱間半(約2.7m)
四間	壱間半
六間半(約11.7m)	壱間(約1.8m)
七間(約12.6m)	式間(約3.6m)
七間	式間
七間	式間
七間	式間
七間	式間
五間(約9m)	四尺五寸(約1.5m)

堀の形状を比較してみると、調査で検出した数値は、いずれも幅では狭く、旧地形が削平されていることによるものと判断される。

本丸の東側堀(内堀)は、第7次調査の結果、残存する幅約9mが検出された。堀の南側に崖地形から北東方向に掘られた堀跡が残存していることから、この旧地形が2m程削平された状況で、本丸の東側堀が

確認されている。本丸から二之丸へ至る小曲輪を区画する堀は、第5次調査の結果、残存する幅約6m、深さ約3mが検出された。第5次調査区の南側に、標高約15mに旧地形が残存し、1m程削平された状況で、この堀が確認されている。また、二之丸を区画する東側の堀(外堀)は、第2次調査(A地点)の結果、幅約7.5m、深さ約2.2mが検出された。検出面は、地表下約50cmであり、少なくとも50cmの深さは削平されたと判断される。第2次調査(B地点)の結果、残存する幅約5m、深さ約1.8mが検出され、やはり少なくとも50cmの深さは削平されたと判断される。総堀は、第4次調査の結果、推定幅約8m、深さ約1.2mが残存して検出され、この付近も20~30cm程削平されたとと思われる。

第2次調査(B地点南半区)と第3次調査地点で検出した方形状遺構(SX-2)は、出土した遺物から、内堀に関連する遺構と推測され、堀が張り出した形状部分にあたる可能性が考えられる。この遺構の東北側辺の延長線上に、溝状遺構があり、これら遺構を含めた形状の数値が『古城絵図』に記載されたものと思われる。

第2次調査地点で検出した堀(SD-2-2BS)の北西側辺の延長部は、これまでの調査結果から南西方向へ続き回道寺の境内庭園に残存すると推測される。この堀の推測延長位置と方形状遺構の南東辺との間隔は、12~13m程と予測することができ、『古城絵図』には「巾七間、深サ式間」と記載されており、巾七間(約12.6m)にはほぼ一致する。そのため、この方形状遺構は、堀が張り出した形状部分にあたる可能性が

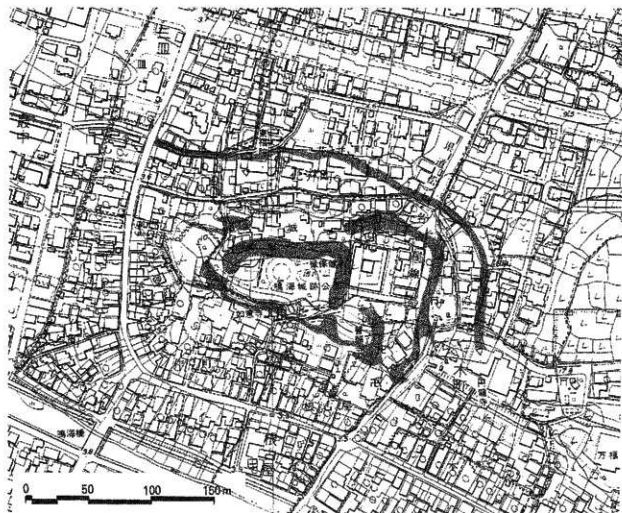


図51 堀跡推定図

推測され、その形状を含めての数値が、『古城絵図』に記載されたものと思われる。

なお、調査を実施した外堀部分は、昭和12年に開通した道路(古鳴海停車場線)が通り、この工事等により、周辺の地形が削平されたと推定される。この道路東側の高台が、宅地化されているがほぼ旧地形を残すものと思われる。平成2(1990)年4月に成海神社(大神社)での発掘を実施しているが、その調査時の西側の崖付近が標高約15mにあり、外堀の東側肩部付近にあたと推定される。

『古城絵図』に記載された鳴海城の縄張りは、佐久間信盛が城主の時期に完成したと考えられる。第5次調査で検出した堀跡については、堀の断面形が逆台形状とV字形状をが重なる状態にあり、V字形状に掘り直しが行なわれたと考えられる。この掘り直されたV字形状が、佐久間信盛が城主であった頃、もしくは岡部元信が城主の頃であろう。逆台形状が、岡部元信が城主の頃、もしくは以前の可能性があると考えられる。

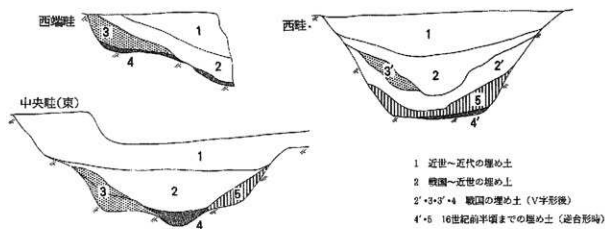
鳴海城の時期の遺物を、埋土と比較してみると、東側では、中央畦最下層4(図52参照以下回)は、V字形に掘り直した堀の底部にたまった土であり、土師器鍋と常滑壺口縁部、5枚重なった状態の中国銭等が出土している。常滑壺は11型式でも新しい段階に属し、16世紀前半頃、5-178は灰釉縁軸皿で古瀬戸後4期(新)の段階、5-179・182の播鉢は大窯第2段階に相当する。中央畦3(恐らく下位)・5は掘り直し以前の埋土になるが、5からは常滑製品小片等が出土し、3は、古瀬戸後期の陶器片と土師器鍋が出土している。中央畦2は『古城絵図』の描かれるまでの埋土で、ほぼ15世紀後半から16世紀代の遺物が出土している。

西側では、西畦5は、掘り直しをするまでの埋土である。1-3は古瀬戸後4期(新)の、5-181は大窯第2段階の鉄軸丸皿、5-183は同第1段階の播鉢である。西畦2・2'・3'は、中央2と同様に15世紀～16世紀代の遺物が出土している。西端畦3では、15世紀末から16世紀後半までの遺物が出土している。5-48の青花皿、5-86の白磁は16世紀代後半と考えられる。土師器鍋は15世紀代末から16世紀中頃、土師皿は、端部が反外するもので15世紀末から16世紀始め頃と考えられる。これらのことから推測すると、台形の堀は15世紀後半までには掘られ、16世紀中～後半に再掘削が行われ、ほどなく埋っていったと思われる。近世の遺物は、各畦2にも若干含まれるが、ほぼ1から出土しており、『古城絵図』が描かれた当時、2のある程度の深さまでは埋っていたという推測は矛盾しない。

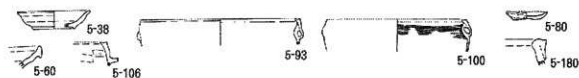
大窯期の製品は、第1段階から第3段階のものが中心である。種類でみると、土師器が全体の50%以上(接合前、破片数の割合)を占め、瀬戸美濃製品、常滑製品となるが、瀬戸美濃と常滑は差があまりない。次に、瀬戸美濃製品の器種は、播鉢、皿、天日茶碗と比較してみると、播鉢が50%近くを占め、次いで皿、天日茶碗となる。時期を併せると、播鉢は古瀬戸後期から大窯第3・4(前半)段階、皿は古瀬戸後期から大窯第4段階までであるが、大窯第2段階までが主である。天日茶碗は、大窯第1・2段階であり、播鉢は大窯第1・2・3・4(前半)段階が同じ割合であり、皿、天日茶碗より新しい時期のものがみられる。15世紀後半から16世紀末を中心にこの地で集団で生活が営まれていたと推測される。

堀の埋土からは、弥生～近世までの遺物が出土している。概ね、近世の遺物は中位～上位で出土し、中世の遺物はそれ以下から、古代の遺物は全体から出土しており、堀の埋っていく過程が推測される。また、地点の差も多少みられ、第5次調査では、近世の遺物が集中しているのは、中央畦より東側、布日瓦は東側に多い、土師皿、土師鍋は中央から西側、古瀬戸後期から大窯期の遺物は、西側に多いといえる。第2

・掘断面模式図（第5次）



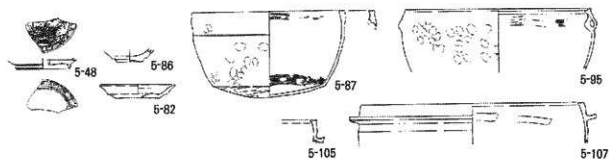
・V字形堀の埋め土（第5次 西3'・2'）



・V字形堀の最下層（第5次 東4）



・V字形堀の埋め土（西端3・東3） ※西端は逆台形堀の可能性もある



・逆台形堀の埋め土等（第1次・第5次 西5）

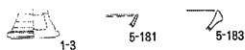


図52 掘断面模式図と出土遺物

次A地点、第4次地点は近世の遺物が少なく、東海道際にあたる第2次B地点、第3次地点に近世遺物や近世遺構が多い。第5次調査の掘跡は、民家に近い地点が廃棄場として利用されていたと思われる。

また、布目瓦の分布は、第3次調査地点、第5次調査掘東側で多く出土している。鳴海庵寺の位置を推測する手がかりのひとつとなる。

7次にわたる調査は、調査地点の制約はあるものの「古城絵図」に描かれた堀を実証することができた。しかし、鳴海城の築城から「古城絵図」が描かれるまでは、150～200年ほどの隔りがあり、築城当時の様子やその後の変革等は、戦国時代に堀の内堀削が行われたことしか推測できなかった。鳴海城の北方にある丹下砦の地点(清水寺遺跡)でも近年発掘調査が行われ、15世紀代の井戸、柱状の穴、溝等が検出され^(a1)、砦以前にあった「古屋敷」^(a2)に関係するものと考えられている。鳴海城の築城と同じ頃にあたり、鳴海城の調査でも15世紀代の遺物も多く出土していることから、中世の鳴海の様相を考える手がかりを得ることができた。

注1 名古屋市見晴台考古資料館 1998 『清水寺遺跡第5次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

注2 「信長公記」に「……丹下という古屋敷があるのをとりでに構えて……」と書かれている。

参考文献

- 植崎彰一 1983 「堀投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告』愛知県教育委員会
- 斎藤孝正 1995 「須恵器集成図録 第3巻 東日本編」雄山閣出版株式会社
- 藤澤良祐 1982 「瀬戸古窯址群」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』
- 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群-古瀬戸後期様式の編年-」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』
- 藤澤良祐 1997 「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要 第5輯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 中野晴久 1995 「中世常滑焼の実像」『常滑焼と中世社会』小学館
- 鈴木正貴 1994 「戦国時代における尾張型煮沸具の歴史的様相」『考古学フォーラム4』
- 鈴木正貴 1995 「清洲城下町遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第54集』
- 金子純一 1996 「尾張出土のホウロクについて」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第4号』
- 續伸一郎 1995 「中世後期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真福社
- 瀬戸市史編纂委員会 1998 『瀬戸市史 陶磁史篇六』愛知県瀬戸市
- 新修名古屋市史編纂委員会 1998 『名古屋市史 第二巻』名古屋市
- 佐賀県九州陶磁文化館 1984 『国内出土の肥前陶磁』

付表 山土遺物一覧表(口径・器高・底径の単位は、cm)

調査次	図番号	出土地点	種別	名称	口径	器高	底径	色調・その他	写真
1	1-1	A区	土器	壺	13.8			弥生、淡黄褐色	1-1
1	1-2	A区	土器	高杯				弥生、淡黄褐色	1-1
1		A区	土師器	甕				舟部、淡黄褐色	1-1
1	1-3	B区	陶器(瀬戸美濃)	等式花箱		6.8		鉄軸	1-2
1	1-4	A区	陶器(瀬戸美濃)	播鉢			9.1	底部、錆軸	1-3
1		A区	陶器(瀬戸美濃)	播鉢				錆軸	1-3
1		A区	陶器(瀬戸美濃)	天明茶碗			4.1	底部、濃い化粧掛	1-3
1	1-5	A区	陶器	皿	11.1	3		掛分、口紅、鉄軸	
2A	2-1	堀上端	山茶碗(尾張系)	碗			6.8	底部1/3、黄白灰色	2-1
2A	2-2	堀上端	山茶碗(東濃系)	小皿				底部1/3、白灰色	2-1
2A	2-3	-1m	山茶碗(尾張系)	碗				底部分、白灰色	2-1
2A	2-4	灰色砂シルト	山茶碗(尾張系)	碗			8	底部完、白灰色	2-1
2A	2-5	-1m		瓦				白灰色	2-1
2A	2-6	暗灰・青色シルト	陶器(瀬戸美濃)	皿				内縁ピンク、長石軸	2-2
2A	2-7	暗灰・青色シルト	陶器(瀬戸美濃)	播鉢				胴部	2-2
2A	2-8	暗灰・青色シルト	土器	羽付鍋				暗褐色	2-2
2B	2-9	堀上層	陶器(常滑)	鉢				にぶい赤褐色	2-3
2B	2-10	堀上層	陶器(常滑)	鉢				明赤褐色	2-3
2B	2-11	堀2層下部	陶器(常滑)	鉢				明赤褐色	2-3
2B	2-12	堀2層下部	陶器(常滑)	甕				底部、明赤褐色	2-3
2B	2-13	堀上層・茶褐色	山茶碗(尾張系)	碗			5.8	灰軸	2-4
2B	2-14	堀下層・茶褐色	陶器(瀬戸美濃)	播鉢				錆軸	2-4
2B	2-15	溝1(堀)	陶器(常滑)	甕				明赤褐色	2-4
3	3-1	SX01	山茶碗(尾張系)	碗			6.1	底部完、白灰色	3-1
3	3-2	SX01	陶器(瀬戸)	丸皿	13.5	2.8	6.8	長石軸	3-1
3	3-3	SX-2-3	山茶碗(尾張系)	碗			7	底部1/2、白灰色	3-2
3	3-4	SX-2-3	山茶碗(尾張系)	碗			6.6	底部1/2、灰色	3-2
3	3-5	SX-2-3	山茶碗(尾張系)	碗			8	底部1/2、灰色	3-2
3	3-6	SX-2-3	山茶碗(尾張系)	碗			6.8	底部完、白灰色	3-2
3	3-7	SX-2-3	山茶碗(尾張系)	碗			6.8	底部完、白灰色	3-2
3	3-8	SX-2-3	山茶碗(尾張系)	碗			6.9	底部1/2、灰白色	3-2
3	3-9	SX-2-3	山茶碗(尾張系)	碗			5.7	底部1/2、白灰色	3-2
3	3-10	SX-2-3	山茶碗(尾張系)	小皿			4.9	底部1/2、白灰色	3-2
3	3-11	SX-2-3	陶器(瀬戸美濃)	丸碗			5.8	灰軸	3-2
3	3-12	SX-2-3	瓦	平瓦				種作り、縄タタキ、灰白色	3-3
3	3-13	SX-2-3	瓦	平瓦				1枚作り、縄タタキ、灰白色	3-3
3	3-14	SX-2-3	瓦	平瓦				1枚作り、縄タタキ、灰白色	3-3
3	3-15	SD01-A	灰軸陶器					底部1/6、白灰色	3-4
3	3-16	SD01-A	山茶碗(尾張系)	碗			7.5	底部1/3、灰白色	3-4
3	3-17	SD02下層	山茶碗(尾張系)	碗			8.7	底部1/2、灰白色	3-5
3	3-18	SD02下層	山茶碗(尾張系)	碗			8.5	底部1/2、白灰色	3-5
3	3-19	SD02下層	陶器(常滑)	甕				にぶい赤褐色	3-5
3	3-20	SE01	陶器(瀬戸)	皿					3-6
3	3-21	SE01	陶器(常滑)	甕	27.2				3-6
3	3-22	SI01	瓦	平瓦				縄タタキ、灰色	3-6
3	3-23	SE02	陶器(瀬戸)	小碗			3	灰軸	3-7
3	3-24	SE02	陶器	香炉?	9			灰軸?	3-7
3	3-25	SE02	陶器(瀬戸)	播鉢	32			錆軸	3-7
3	3-26	SI02	陶器	蓋	3.6	3.1	8.1	染付	3-7
3	3-27	堀Tr1	陶器(瀬戸)	天明茶碗	11.5			鉄軸	3-8
3	3-28	堀Tr1	陶器(瀬戸)	碗	11.4			灰軸	3-8
3	3-29	堀Tr1	陶器(美濃)	丸碗	11.1	7.6	5.2	灰軸	3-8
3	3-30	堀Tr1	陶器(瀬戸)	せんじ碗	11.8	5.2	4.2	灰軸	3-8
3	3-31	堀Tr1	陶器(瀬戸)	菊皿	13	3.4	6.3	灰軸・緑軸、口縁・外面へう割り	3-8
3	3-32	堀Tr1	陶器(瀬戸)	皿			7.3	長石軸	3-8
3	3-33	堀Tr1	陶器(瀬戸)	香炉			8.9	錆軸	3-8
3	3-34	堀Tr1	陶器(瀬戸)	香爐			4.6	錆軸	3-8
3	3-35	堀Tr1	陶器(瀬戸)	水注	5.4			黄瀬戸	3-8

調査区	図番号	出土地点	種別	名称	口径	器高	底径	色調・その他	写真
3	3-36	堀Tr2	陶器(瀬戸)	皿	11.8	2	6.7	長石釉、底部内外に内産ビン跡	3-9
3	3-37	堀Tr2	陶器(瀬戸)	天目茶碗				鉄釉	3-9
3	3-38	堀Tr2	陶器(瀬戸)	植木鉢	11.4			鉄釉	3-9
3	3-39	堀Tr2	瓦	軒平瓦				黒灰色	3-9
3	3-40	表探	陶器(瀬戸美濃)	却目付大皿				灰釉	3-10
3	3-41	表探	陶器(瀬戸美濃)	皿	10.6	2.5	6.3	長石釉、	3-10
3	3-42	堀Tr2	石製品	一石五輪塔					3-11
3	3-43	堀Tr2	石製品	宝篋山塔					3-11
4	4-1	SD01	山茶碗(尾張系)	碗			7.3	底部1/2、灰白色	4-1
4	4-2	SD01	山茶碗(尾張系)	碗			6.9	底部2/3、暗灰色	4-1
4	4-3	堀	須恵器	瓶			12.5	灰褐色、ひずみあり	4-2
4	4-4	堀	山茶碗(尾張系)	碗			8.6	底部1/3、灰白色	4-2
4	4-5	堀	陶器(瀬戸)	鉢鉢				鉄釉	4-2
4	4-6	SK01	磁器(中国)	碗				青磁	4-2
4	4-6	SK01	山茶碗(尾張系)	碗			4.8	底部完、暗灰色	4-3
4	4-7	SK01	陶器	急須			6.2	朱泥	
4	4-8	SK02	土器	高杯				にぶい褐色、莖生	4-4
4	4-9	SK02	土器	土師皿	7.2	1.4		非ロクロ、内面ナデ	4-4
4	4-10	SK02	土器	土師皿	7.5	1.5		非ロクロ、内面ナデ	4-4
4	4-11	SK02	土器	羽釜				にぶい褐色	4-4
4	4-11	SK02	山茶碗(尾張系)	小皿				白灰色	4-4
4	4-12	包含層	山茶碗(尾張系)	碗			7.3	底部1/2、にぶい褐色	4-5
4	4-13	包含層	山茶碗(尾張系)	碗			8	底部1/4、白灰色	4-5
4	4-14	包含層	山茶碗(尾張系)	碗			6.2	底部1/3、白灰色	4-5
4	4-15	包含層	山茶碗(尾張系)	碗			5.7	底部完、指爪痕、板目状圧痕	4-5
4	4-16	表土・攪乱等	山茶碗(尾張系)	碗			6	底部完、白灰色、指爪痕	4-6
4	4-17	表土・攪乱等	磁器(瀬戸美濃)	皿			10.8	墊付、或ノ目高台	4-6
5	5-1	東2	土器	壺			5.9	褐色、莖生	5-1
5	5-2	東アゼ1、中1	土器	壺			7.2	灰白色	5-1
5	5-3	西	土器	高杯				浅黄褐色、莖生	5-1
5	5-4	中	土器	高杯				にぶい褐色、莖生	5-1
5	5-6	東1	土師器	甕	17.6			にぶい褐色	5-1
5	5-7	西	土師器	高杯				屈折脚高杯、にぶい褐色	5-1
5	5-8	西端	石製品	石弁				砂岩、幅4.1cm、長さ12.7cm	5-1
5	5-9	西端畦1	須恵器	杯蓋	17.3			灰白色	5-2
5	5-10	西端3	須恵器	杯蓋				灰褐色	5-2
5	5-11	西端1	須恵器	杯身	10.9			灰色	5-2
5	5-12	東1	須恵器	杯身				灰色、底部に窯記号	5-2
5	5-13	西端2	須恵器	杯身			5.8	にぶい黄褐色、回転糸切痕	5-2
5	5-14	西3'	須恵器	盤				灰褐色	5-2
5	5-15	東1	須恵器	盤				灰色	5-2
5	5-190	西端畦1	須恵器	底部			13.2	灰色、平底	5-2
5	5-16	西	須恵器	横置	12			灰色	5-2
5	5-18	西2・2'・8'	灰種陶器	碗			6	灰黄色	5-2
5	5-19	西畦5	瓦	軒丸瓦				白灰色、面径14cm	5-3
5	5-20	堀西	瓦	軒丸瓦				白灰色	5-3
5	5-21	西端1	山茶碗(尾張系)	碗			7.6	底部1/2、灰白色	5-4
5	5-22	中2	山茶碗(尾張系)	碗			8.9	底部1/2、灰白色	5-4
5	5-23	東2	山茶碗(尾張系)	碗			7.8	底部2/3、灰白色	5-4
5	5-24	東2	山茶碗(尾張系)	碗			7.9	底部1/2、灰黄色	5-4
5	5-26	西端1	山茶碗(尾張系)	碗			6	底部1/2、灰白色	5-4
5	5-26	東1	山茶碗(尾張系)	碗			7.5	底部1/2、灰黄色	5-4
5	5-27	東	山茶碗(尾張系)	碗	13.7	4.6	7.6	底部完、灰白色	5-4
5	5-28	東1	山茶碗(尾張系)	碗			7.9	1/8、灰白色	5-4
5	5-29	西2	山茶碗(尾張系)	碗			7.1	底部1/2、灰白色	5-4
5	5-30	西端畦1	山茶碗(尾張系)	碗			7.4	底部1/4、灰白色	5-4
5	5-31	西端	山茶碗(尾張系)	碗	11.5	5	5	底部完、灰白色	5-4
5	5-32	東畦2	山茶碗(尾張系)	碗			4.8	底部3/4、灰白色、焼成不良	5-4
5	5-33	中2	山茶碗(尾張系)	碗			5.2	底部3/4、灰白色、焼成不良	5-4

調査次	図番号	出土地点	種別	名称	口径	器高	底深	色調・その他	写真
5		東畦1	山茶碗(尾張系)	碗				3枚重なる。灰白色	5-4
5	5-34	西畦1~3	陶器(瀬戸)	瓶子				灰釉	5-5
5	5-35	中2	陶器(瀬戸)	酒				鉄釉	5-5
5	5-36	西2	陶器(瀬戸)	祖母燒茶碗				黒	5-5
5			陶器(瀬戸)	壺					5-5
5	5-37	西2・2'・3'	陶器(瀬戸美濃)	埴反皿	9.2	2.5	5.2	灰釉	5-6
5	5-38	西3'	陶器(瀬戸美濃)	埴反皿	11.3	2.8	6.6	灰釉	5-6
5	5-39	中2・2'・3'	陶器(瀬戸美濃)	埴反皿	9.7			鉄釉	5-6
5	5-40	西端1	陶器(瀬戸美濃)	丸皿				鉄釉・灰釉	5-6
5	5-41	東2	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	12.5			鉄釉	5-7
5	5-42	西畦2'	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	12			鉄釉、化粧掛	5-7
5	5-43	西1・2	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗				鉄釉	5-7
5	5-44	西端3	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗				鉄釉	5-7
5	5-45	西端3	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗			4.3	濃い化粧掛	5-7
5	5-46	西2・2'・3'	陶器(瀬戸美濃)	仏前具			4	鉄釉	5-8
5	5-47	西端畦1	陶器(瀬戸美濃)	水指	12.8			鉄釉	5-8
5		東2~5	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗				鉄釉、化粧掛	5-7
5		西端1	陶器(瀬戸美濃)	向付				長石釉	5-8
5		西端3	陶器(瀬戸美濃)	重圓皿				赤紫色	5-6
5	5-48	西端3	磁器(中國)	皿			8.6	青花	5-16
5	5-49	東畦2	陶器(常滑)	造				灰色	5-9
5	5-50	西端2	陶器(常滑)	壺				褐灰色	5-9
5	5-51	中2	陶器(常滑)	造				黒褐色	5-9
5	5-52	中2	陶器(常滑)	壺				明赤褐色	5-9
5	5-53	中4	陶器(常滑)	壺				暗赤褐色	5-9
5	5-54	西2'・3'	陶器(常滑)	壺				灰褐色	5-9
5	5-55	中2	陶器(常滑)	壺				灰褐色	5-9
5	5-56	西2	陶器(常滑)	こね鉢	35	13.6	15.4	にぶい赤褐色	5-10
5	5-162	東1	陶器(常滑)	壺				明赤褐色	
5		東2	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢				鉄釉	5-11
5	5-57	東1	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢	29.6			鉄釉	5-11
5	5-58	西畦2	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢				鉄釉	5-11
5	5-59	西端1	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢				鉄釉	5-11
5	5-60	西3'	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢				鉄釉	5-11
5	5-61	西端1	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢				鉄釉	5-11
5	5-62	中2	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢				鉄釉	5-11
5	5-63	西2・2'・3'	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢				鉄釉	5-11
5	5-64	西2	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢	30.3			鉄釉	5-11
5	5-65	西端2	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢	32.1			鉄釉	5-11
5	5-66	中1・2	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢				鉄釉	5-11
5	5-67	西2	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢	30.2			鉄釉	5-11
5	5-68	中2	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢			10.1	鉄釉	5-11
5	5-69	西2・2'・3'	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢			11.2	鉄釉	5-11
5	5-70	中2	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢			9.2	鉄釉	5-11
5	5-71	西2・2'・3'	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢			11.3	鉄釉	5-11
5	5-72	中2	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢			11.5	鉄釉	5-11
5	5-73	西端1~3	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢			10.3	鉄釉	5-11
5	5-74	西2	土師器	皿	5.8	1.1	3.6	浅黄褐色、非ロクロ、内面ナデ	5-12
5	5-75	西畦2	土師器	皿	5.8	1	2.5	浅黄褐色、非ロクロ、内面ナデ	5-12
5	5-76	西端1	土師器	皿	6	1.1	3.1	浅黄褐色、非ロクロ、内面ナデ	5-12
5	5-77	西1・2	土師器	皿	6.4	1.1		浅黄褐色、非ロクロ、内面ナデ	5-12
5	5-78	西端畦1	土師器	皿	5.8	1.4	3	にぶい黄褐色、非ロクロ、内面ナデ	5-12
5	5-79	西端2	土師器	皿	6.6	1.3	3.3	浅黄褐色、非ロクロ、内面ナデ	5-12
5	5-80	西畦2'	土師器	皿	6.4	1.2		にぶい黄褐色、非ロクロ、内面ナデ	5-12
5	5-81	西2・西端1~3	土師器	皿	7.6	1.5	4.6	黒褐色、ロクロ、内面ナデ	5-12
5	5-82	西端3	土師器	皿	12	2	6.9	褐灰色、ロクロ	5-12
5	5-83	西端1・3	土師器	皿	10.9	2.2	6.9	浅黄褐色、ロクロ	5-12
5	5-84	西端2	土師器	皿	11.7			褐灰色、ロクロ	5-12
5	5-85	西端3	土師器	碗			5.4	淡黄色、ロクロ	5-12

調査次	区番号	出土地点	種別	名称	口径	器高	底径	色調・その他	写真
5	5-86	西端2・3	磁器(中国)	皿			4		5-16
5	5-87	西端3	土師器	内耳鍋	23.9	13.6	17.5	にぶい褐色	5-13
5	5-88	西2・2'・3'	土師器	内耳鍋				にぶい褐色	
5	5-89	西3'	土師器	内耳鍋				灰白色	
5	5-90	中1・2	土師器	内耳鍋	25.2			にぶい黄褐色	
5	5-91	西端3	土師器	内耳鍋	26.6			にぶい黄褐色	5-14
5	5-92	西端1・3	土師器	内耳鍋	23.6			にぶい黄褐色	
5	5-93	西3'	土師器	内耳鍋	25.2			にぶい黄褐色	
5	5-94	西端1	土師器	内耳鍋	25.9			にぶい黄褐色	
5	5-95	西端3	土師器	内耳鍋	29.3			にぶい黄褐色	5-14
5	5-96	西端群1	土師器	内耳鍋				にぶい黄褐色	
5	5-97	西3'	土師器	内耳鍋				灰白色	
5	5-98	西3'・西端3	土師器	内耳鍋	21.7			にぶい黄褐色	5-14
5	5-99	西端1、西1	土師器	内耳鍋	30.6			にぶい褐色	5-14
5	5-100	西3'	土師器	内耳鍋	21.7			灰白色	
5	5-101	西2・2'・3'	土師器	羽付鍋				淡黄色	5-13
5	5-102	西1・2	土師器	羽付鍋				灰白色	5-15
5	5-103	中2	土師器	羽付鍋				にぶい黄褐色	5-15
5	5-104	西端1	土師器	羽付鍋				淡黄褐色	5-15
5	5-105	東趾3	土師器	羽付鍋				にぶい黄褐色	
5	5-106	西	土師器	羽付鍋				にぶい褐色	5-16
5	5-107	東趾3	土師器	羽付鍋	34.8			淡黄褐色	5-15
5	5-108	中4	土師器	羽付鍋	36.6			淡黄色	5-16
5	5-109	西群1	陶器(瀬戸・美濃?)	天目茶碗	10.3			鉄軸	5-22
5	5-110	西1	陶器(瀬戸)	罐反碗	9			灰軸、鉄軸	5-22
5	5-111	東趾1	陶器(瀬戸)	罐反碗	9.8			黄色、透明軸、梅花文	5-22
5	5-112	西1	陶器(瀬戸)	罐反碗	9.6	4.8	3.4	黄色、透明軸、梅花文	5-22
5	5-113	東1	陶器(瀬戸)	皿	7.2	1.8	3.8	透明皿、灰軸、緑軸掛	5-22
5	5-114	東1	陶器(瀬戸)	皿	20			灰軸、鉄軸	5-22
5	5-115	東趾1	陶器(唐津系)	香炉	19.2			灰軸?	5-22
5	5-116	東趾1・表土	陶器(美濃)	鉢	3.4			鉄軸	5-22
5	5-117	西	陶器(瀬戸)	乘湯	6.4	5.8	5.3	鉄軸	5-22
5	5-118	東	陶器(瀬戸)	乘湯	5.4	4.4	5	鉄軸	5-22
5	5-119	東趾1	陶器(瀬戸)	乘湯	5.1	4.2	3.5	鉄軸	5-22
5	5-120	東趾	陶器(瀬戸)	鉢			12.8	灰軸	5-26
5	5-121	東1	陶器	花瓶			4.9	灰軸、貝須絵	5-23
5	5-122	東1・東趾1	陶器(美濃?)	鉢				鉄軸	5-23
5	5-123	西端群1	陶器(瀬戸)	鉄鉢			9.1	鉄軸	5-23
5	5-124	東群1	陶器(瀬戸)	輪充皿			6.2	灰軸	5-23
5	5-125	東1	陶器	鉢				鉄軸	
5	5-126	東1	土器	ほうろく鍋				にぶい黄褐色	5-23
5	5-127	東趾1	陶器(瀬戸)	土瓶	9.9			鉄軸	5-23
5	5-127	西	陶器(瀬戸)	土瓶			10.4	上の底部	5-23
5	5-128	東1・2	陶器	土瓶				にぶい黄褐色	5-23
5	5-129	東1	磁器(瀬戸)	罐反碗	11.2	5.7	5	染付	5-24
5	5-130	東1	磁器	碗			3.6	染付	5-24
5	5-131	東	磁器(瀬戸)	小杯				染付	
5	5-132	中1	磁器	碗			4.2		5-24
5	5-133	東1	磁器(瀬戸)	罐反碗	8	4.6	3.6	染付	5-24
5	5-134	東1	磁器(瀬戸)	罐反碗	10.5	6.2	4.7	染付	5-24
5	5-135	東趾1	磁器	罐反碗	8.9	5.9	4	染付	5-24
5	5-136	東1・表土	磁器(肥前)	皿			16.2	染付	5-24
5	5-137	中1	磁器	皿			6.9	染付	5-24
5	5-138	東1	磁器(肥前)	向付			9.3	染付	5-24
5	5-139	東趾1	磁器(瀬戸)	皿	9.4	2.3	5.2	型打皿	5-24
5	5-140	東趾1	磁器(肥前)	段重	14.3	5.9	9.4	丸型、染付	5-24
5	5-141	東1	磁器(肥前)	壺	3.9	3	9.5	染付	5-24
5	5-142	中1	磁器	向付	10.2	5.7	4.3	染付	5-24
5	5-143	東趾1	磁器	御神酒德利				色絵	5-24

調査次	図番号	出土地点	種別	名称	口径	器高	底径	色調・その他	写真
5	5-144	中1	陶器(瀬戸)	播鉢	32.2			錆色	5-25
5	5-145	中1	陶器(瀬戸)	播鉢				錆色	5-25
5	5-146	東畦1	陶器(瀬戸)	播鉢	34.2			錆色	5-25
5	5-147	東畦1・中1	陶器(瀬戸)	ねり鉢	24.5			灰褐色	5-25
5	5-148	東畦1	陶器(瀬戸)	ねり鉢			16.5	灰褐色	5-25
5	5-149	東畦1	陶器(瀬戸)	手水鉢	26.1			灰褐色、うのふ籠、上野粘	5-25
5	5-150	笹塚	陶器(瀬戸)	水甕	29.7	13.1	20.7	灰褐色	5-25
5	5-151	東1・中1	陶器(瀬戸)	水甕	22.7	22.4	17.6	柿色	5-25
5	5-158	東畦1	石製品	茶臼				安山岩、受傷部分	5-17
5	5-159	西	石製品	五輪塔	19.1	14.3		安山岩、水輪	5-19
5	5-160	西	石製品	五輪塔	17	11.6		花崗岩、水輪	5-19
5	5-161	西	石製品	五輪塔	16.9	10.6		花崗岩、水輪	
5	5-162	西4	石製品	五輪塔	11.6	13.5		花崗岩、水輪	5-19
5	5-163	西端3	石製品	一石五輪塔	12.5	14		花崗岩、地輪	
5	5-164	東	石製品	一石五輪塔	10.1	20		花崗岩、空~火輪	5-20
5	5-165	中4	石製品	一石五輪塔		11.5		花崗岩、空~火輪	
5	5-166	西端3	石製品	一石五輪塔		7		花崗岩、空~火輪	
5	5-167	西端3	石製品	一石五輪塔	11.4	15.6		砂岩、風~水輪	5-20
5	5-168	西端3	石製品	宝篋口塔	13.4	19		花崗岩、相輪	5-21
5		中	石製品	宝篋印塔	19.8	13.5		花崗岩、笠	5-21
5	5-177	東畦1	土師器	皿	6.2	1.2	3.4	褐色、ロクロ	
5	5-178	東畦4	陶器(瀬戸)	緑釉皿				灰褐色	5-28
5	5-179	東畦4	陶器(瀬戸美濃)	播鉢				錆色	5-28
5	5-180	西端2	陶器(常滑)	甕				赤褐色	
5	5-181	西端6	陶器(瀬戸美濃)	丸皿				鉄色	
5	5-182	表	陶器(瀬戸美濃)	播鉢				錆色	
5	5-183	西5	陶器(瀬戸美濃)	播鉢				錆色	
5	5-184	東4	中国銭	元祐通宝	2.4				5-18
5	5-185	東4	中国銭	聖宋元宝	2.36			北宋、建中靖国元年(1101)初鋳	5-18
5	5-186	東4	中国銭	紹熙元宝	2.4			南宋、紹熙元年(1190)初鋳	5-18
5	5-187	東4	中国銭	洪武通宝	2.4			明、洪武元年(1368)初鋳	5-18
5	5-188	東4	中国銭	聖宋元宝	2.4			北宋、建中靖国元年(1101)初鋳	5-18
5	5-5	SK02	土師器	甕			9.6	にぶい褐色	5-1
5	5-17	SK02	須恵器	鉢?	22			灰色	5-2
5	5-153	東側地山	土師器	皿	6.1	1.2		浅黄褐色、非ロクロ	5-26
5	5-154	東側地山	土師器	皿	5.6	1.1		浅黄褐色、非ロクロ	5-26
5	5-155	表土	陶器(瀬戸)	大皿	32			灰褐色	5-26
5	5-156	表土	陶器(瀬戸)	播鉢	35.6			にぶい赤褐色、人印	5-26
5	5-157	表土	陶器(瀬戸)	播鉢	36.2			明赤褐色	5-26
5	5-169	立合調査	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	11			高台露胎	5-27
5	5-170	立合調査	陶器(伊万里)	碗	10.2	5.7	4.5	染付、コンニャク版	5-27
5	5-171	立合調査	陶器(美濃)	仏花瓶				灰褐色・鉄色	5-27
5	5-172	立合調査	陶器(瀬戸美濃)	播鉢	32.2	13.1	13.7	錆色	5-27
5	5-173	立合調査	陶器(常滑)	鉢				福灰色、突帯付	5-27
5	5-174	立合調査	陶器(常滑)	甕				福灰色	5-27
5	5-175	立合調査	瓦	瓦				いぶし	5-27
5	5-176	立合調査	瓦	瓦				いぶし	5-27

(第5次調査の堀出土遺物の出土地点は、図52の堀断面模式図の各駐層位番号に対応する。)

報告書抄録

ふりがな	まいごうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	埋蔵文化財調査報告書							
副書名	鳴海城跡(第1～7次)							
巻次	32							
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	42							
編著者名	山田敏一 野澤則幸 野口泰子							
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館							
所在地	〒457-0026 愛知県名古屋市中区見晴町47 TEL 052-823-3200 FAX 052-823-3223							
発行機関	名古屋市教育委員会							
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区二の丸三丁目1番1号 TEL 052-972-3268 FAX 052-972-4178							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鳴海城跡	名古屋市緑区 鳴海町字城他	23112	14-95	35°	136°	1次		
				05'	57'	1990.9.17	50	寺院改築
				03"	15"	～10.12		
						2次		
						1994.12.5	360	道路 拡幅工事
						～95.2.14		
						1995.5.1	125	道路 拡幅工事
		～5.31						
				3次				
				1997.4.7	205	道路 拡幅工事		
				～5.23				
				4次				
				1997.5.19	95	道路工事		
				～6.6				
				5次				
				1997.9.16	1,800	造成工事		
				～10.28				
				6次				
				1998.9.17	21	下水道 埋設工事		
				～9.24				
				7次				
				1998.10.12	130	公園 整備工事		
				～10.23				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鳴海城跡	城跡	戦国	堀跡	中世遺物				

名古屋市文化財調査報告42

埋蔵文化財調査報告書32

鳴海城跡（第1～7次）

1999年3月31日 発行

編 集 名古屋市見晴台考古資料館
TEL (052) 823-3200
FAX (052) 823-3223

発 行 名古屋市教育委員会
TEL (052) 972-3268
FAX (052) 972-4178

印 刷 菱源印刷工業株式会社

